
コナンと哀の恋愛物語

コスモス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナンと哀の恋愛物語

【Nコード】

N7094K

【作者名】

コスモス

【あらすじ】

コナンと哀が幼児化してから、約一年が経った。組織とはまだ決着が着いていなく、解毒剤の方も相変わらずのままだ。

一方、幼児化して江戸川コナンとして過ごしていくうちに、少しずつだが、コナンの気持ちに変化が現れ始める。早く元の体に戻って、蘭に気持ちを伝えたいと言う想いがだんだんと薄まり、蘭の気持ちにも変化が現れる。

そして、だんだんとコナンは哀に惹かれていき、哀もまたコナンに惹かれていく……やがて二人は両想いとなり、そして……

この小説は、コナンと哀の恋愛話です。

コナンが好きではないと言う方には、読むことをお勧めしません。

↳プロローグ↳(前書き)

初めての投稿なので、色々指摘してくれると嬉しいです。

プロローグ

俺は高校生探偵工藤新一。幼馴染みで同級生の毛利蘭と遊園地に遊びにいった、黒ずくめの男の怪しげな取引現場を目撃した。取引を見るのに夢中になっていた俺は、背後から近づいてくるもう一人の仲間に気づかなかった。俺はその男に毒薬を飲まされ、目が覚めたら体が縮んでしまっていた。工藤新一が生きていると奴らにばれたら、また命が狙われ、周りの人間にも危害が及ぶ。阿笠博士の助言で正体を隠すことにした俺は、蘭に名前を聞かれて、咄嗟に江戸川コナンと名乗り、奴らの情報を掴むために、父親が探偵をやっている蘭の家に転がり込んだ。

謎に包まれた犯罪組織の一員、ジン・ウオッカ・ベルモット・キャンティ・コロン・バーボン、そしてシエリー。本名は宮野志保。組織が独自に開発したAPT-X4869の開発者だったが、ただ一人の肉親である姉、宮野明美を殺害されその理由を問いたださうとしたが、口を割らないため真実が語られるまで、APT-X4869の研究を中断するという対抗手段に出たところ、組織の個室に監禁されてしまった。彼女の処分をどうするか議論が行われている時、このままでは自分も姉と同じように殺されると思い、自殺するつもりで隠し持っていたAPT-X4869を飲んだところ、体が縮み脱出することに成功し、俺の家の前で意識を失ったところを阿笠博士に保護された。

彼女は灰原哀として、俺と同じく帝丹小学校に通っている。ところで、俺の正体を知っている者が博士と灰原の他に六人いる。俺の父親で、世界屈指の推理小説家の工藤優作と、母親の、元大女優の工藤有希子。西の高校生探偵服部平次、怪盗KID、本堂瑛祐、ベルモット。

俺が幼児化してから約一年がたち、俺たちは小学二年生になっていた。未だに奴らを捕まえることは出来ておらず、俺は小学生の生活

を送っていた。最初は苦痛だった小学生の生活も、今では楽しいと感じる。俺の同級生の元太、歩美、光彦。この三人は俺にとって大切な仲間だ。そして灰原。幼い頃に両親を亡くし、ただ一人の姉も奴らに殺されてしまった。いつ組織の奴らに見つかるかわからないという恐怖に怯えている、そんな彼女を見ると、俺は守ってやりたいと思う。最近では灰原のことばかり考えている。灰原と一緒にいると妙に安心する。自分でも気がつかないうちに、だんだんと気持ちに変化している。今までたくさん苦しんできた灰原を幸せにしたいと思う。そのためにも、俺は奴らを捕まえなくてはならない。どこまでも追いかけて、そして必ず捕まえて見せる。

小さくなっても頭脳は同じ、迷宮なしの名探偵、真実はいつもひとつ！

〜プロローグ〜（後書き）

随分と長くなってしまいました。次回から、物語がスタートする予定なのでよろしく願います。

第一話・新学期（前書き）

今日から帝丹小学校の新学期が始まります。

第一話・新学期

長い冬が終わり、外はすっかりとあたたかくなった。

小鳥たちは陽気に鳴き、春の訪れを喜んでいるみたいだ。

今日から、帝丹小学校の新学期が始まる。

目覚まし時計が鳴り、コナンは目を覚ました。現在の時刻は午前7：00だ。

爽やかな朝にふさわしくない音を発する目覚まし時計のスイッチを切り、コナンは布団から起き上がった。

「ふあゝあ。今日から新学期か。」

コナンは大きなあくびをしてつぶやいた。

コナンは着替えを済ませて、部屋を出た。

「おはよう。蘭姉ちゃん。」

コナンは蘭に元気よく挨拶をした。

「おはよう。コナンくん。もうすぐ朝御飯出来るから待っててね。」

「うん！わかったよ。」

しばらくして朝食が出来たので、小五郎とコナンと蘭の三人で食べている。

……

「じゃあ、いってきま〜す。」
階段をおりて、コナンは学校に向かって歩き出した。

「コナンくん。おはよう。」

「おはようございます。コナンくん。」

「おはよう。コナン。」

元気よく挨拶をする歩美、光彦、元太。

「ああ、おはよう。」

と軽く挨拶をするコナン。

「今日から新学期なんだよね〜。なんだかわくわくするね。」

「そうですね。今日から僕たちは二年生になるんですね。」

「なんだかはやいよね〜。」

と新学期のことについて話しているうちに、博士の家についた。

チャイムを鳴らしてしばらくすると、中から哀が出てきた。

「気を付けて行ってくるんじゃないよ。」

「ええ。いつてきます。」

「哀ちゃん、おはよう。」

「おはようございます。灰原さん。」

「おはよう。灰原。」

「おはよう。朝から元気ね。」

哀はそう言つと、コナンと目があつた。

「おはよう。」

「ああ、おはよう。」

二人は素っ気なく挨拶をした。

挨拶も終わったので、みんなは歩き出した。歩美・光彦・元太の三人が前を歩き、その後ろをコナンと哀が少し遅れて歩く。

いつもと変わらない光景だ。

前を歩く三人は、仮面ライダーの話や、学校でのことの話などで夢中のようにだ。

そんな様子を後ろで見てたコナンが、

あくびをしながら、「朝から元気な奴らだな。」と呆れていた。

「あら、随分と眠そうね。まあ、どうせ夜遅くまで、血生臭い推理小説でも読んでいたんでしょうけどね。」

「血生臭くてわるかったな。」

「別に悪いなんていつてないわ。ただ、あなたの推理オタクぶりに呆れているだけよ。」

「なんだと。」

「事実を言っただけよ。」

二人が言い争っているうちに学校に到着していた。

帝丹小学校では、クラス替えがあるのは、三年生の時と五年生の時なので、クラスはそのままなのでみんなほっとしている。ちなみに、コナンたちは2年B組であり、今は教室に入っている。

チャイムが鳴って担任の先生が入ってくると、慌てて席につく生徒が大半だ。

まあ、担任の先生といっても、小林先生なんだけどな…

「はい、みんな席について静かにしてください。それでは出席をとるので、名前を呼ばれたら大きな声で、元気よく返事をしてください。」

出席番号のはやい順から名前を呼ばれていく……………

今日は新学期なのですぐに帰ることができる。

「じゃあ僕たちはこっちなので。」

「バイバイ。コナンくん、哀ちゃん。」

「また明日な。」

「おう、じゃあな。」

「また明日ね。」

三人と別れて、今は二人つきりだ。

お互い無言で歩いている。

もともと、コナンも哀も、どちらかというとあまり口数が多い方ではない。しかし、全くしゃべらないわけではないのだが……

「じゃあ、またね。」

「ああ、じゃあな……」

博士の家の前で別れたコナンは、なにかを考えながら再び歩き出した……

第一話・新学期（後書き）

あまり恋愛要素が無くてスイマセン。これから、だんだんと増やしていく予定です。

第二話・この気持ちは一体…（コナン編）（前書き）

コナンの気持ちについてです。

第二話・この気持ちは一体…（コナン編）

この気持ちはなんだろう

灰原と一緒にいると楽しい

灰原と一緒にいるとなぜか落ち着く

それがなぜかはわからない

同じ薬を飲まれたもの同士、お互いに秘密を共有しているからか？

それとも年が近いからか？

組織を潰すために力を合わせて戦っている仲間だからか？

どれもしっくりこねえ…

ひよっとしたら、灰原の前では自分を偽る必要がないからかもしれない

蘭の前やみんなの前では、新一ではなくコナンとして、子供のふりをしなければならぬ…

だけど灰原の前では、俺は工藤新一でいられる…

灰原とは話のレベルが合うし、事件のことについて相談することもある…

だから灰原と一緒にいると楽しいし、落ち着くのか？

いや、ちがう…

それだったら阿笠博士も同じだ…

博士の前では、子供を演じる必要もないし、事件のことについて色々調べてもらうことよくある…

でも、だからといって、それで気持ちが落ち着いたりはしない…

確かに、子供のふりをしなくてもいいんだから、全く安心しないわけでもなく、落ち着かないわけではない…

だけど、灰原と一緒にいるときほど、落ち着くわけではない…

それがどうしてなのかわからない…

それに…最近、俺はなんだか変だ…

灰原と二人っきりのときは、妙に灰原のことを意識してしまったり…

自分でも気づかないうちに、灰原のことを見つめていることもしょちゆうある…

灰原にも指摘されたっけ…

そのときは、なんとか上手く誤魔化したけど…

最近はこんなようなことばかりだ…

灰原といると、胸がドキドキする…

もしかして……俺は…灰原のことが…好き……なのか？

いや、そんなはずはねえ！

だって俺は蘭のことが……好き…なんだから…

どうしてだろう？

以前の俺なら、迷うことなく好きだって言えたはずなのに…

それが今は言えない…

やっぱり俺は灰原のことが好きなのか？

そうだろうとしたら、今までのことも納得できる…

灰原のことが好きだから、一緒にいると凄く楽しいと感じるし、落ち着くんだ…

好きな人と一緒にいられるから、そんな気持ちになったんだ…

どうやら間違いないな…

俺は灰原のことが好きだ…

蘭には悪いけど…

待っててくれなんて、無責任なこと言って…

本当はもっと前から自分の気持ちに気づいていたのかもしれない…

でも俺は、蘭に待っていてくれと言った…

蘭のことを待たせておきながら、俺は別の人を好きになった…

その罪悪感から、俺は自分の、灰原に対する気持ちを認めず、逃げていたんだ…

でも、いまははっきりと言える…

俺は灰原のことが好きなんだと…

幼いころに両親を失い、唯一の肉親だった姉の、明美さんも奴等によって殺害されてしまった…

俺がもっと早くに事件の真相に気づけていたら、彼女を死なせずにすんだかもしれない…

初めて灰原と出会った日、彼女は泣きながら俺のことを責めたっけ…

そのときからだろうか…

もう灰原の涙は見たくない…

灰原には笑ってほしい…

だから俺は、絶対に灰原のことを守ってみせると心に誓った…

いつの間にか俺にとって灰原は、仲間や相棒以上に、大切な存在になっただけだ…

自分を犠牲にしても、相手のことを一番に考える…

苦しいときや、不安なときでも、周りに心配をかけないように、なんともないように振る舞う…

なんでもかんでも、一人で抱え込んでしまう…

そんな彼女を、俺は守ってやりたいし、幸せにしてやりたい…

蘭には悪いけど…やっぱり俺は灰原のことが、世界中の誰よりも好きだ

今ならはつきり言える…

本当に俺が好きなのは、灰原だということ…

これからも、俺は灰原のことを守ってみせる

明美さんのためにも、俺はあいつのことを幸せにしてみせる

俺は心の中で、そう誓った…

第二話・この気持ちは一体…（コナン編）（後書き）

以前書いた話が消えてしまったので、新しく書き直しました。

以前の話よりも長く、また文章が多少変わっています。

第三話・この気持ちは一体…（哀編）（前書き）

哀の気持ちについてです。変なところがあるかもしれません。その時は指摘してください。

第三話・この気持ちは一体…（哀編）

この気持ちはなんだろう。

工藤くんといると、とても安心する。

工藤くんといると楽しい。

彼とこうして過ごせるのが、内心ではとても嬉しいと感じていても、表情には出さず、私はいつも皮肉を言ってしまう。

そんな私に彼は、可愛くねえなとか、素直じゃねえなと言う。

そんなことはわかっている。私だって素直になりたい。でも素直になれずに、また皮肉を言ってしまう。

つくづく自分が嫌になる。こんな性格の悪い女なんて、彼は可愛いとは思っていないだろう。それがなんだか、悲しい……

どうして？

工藤くんに可愛いと思ってもらえないことが、何故こんなにも悲しいのだろう…

もしかしたら私、工藤くんのが……

いいえ、もしかしたらではなく、まちががなく私は彼のことが好きだわ。

本当はわかっていた…

彼のことが好きだということが。

でも、彼には可愛い幼馴染みがいる…

毛利蘭さん。明るくて優しく、太陽のような人。

彼女は工藤くんのが好きだ。

そして、工藤くんも彼女のが好きだ。

二人は相思相愛だ。

私の入り込む隙はない。

そもそも、そんな資格など私にはない。

私の作った薬のせいで、工藤さんと蘭さんを引き離してしまった。

私がAPTX4869なんて作らなければ、二人は今ごろ幸せだっただろう…

私は、彼にとって憎まれるべき存在だ。

もっと私のことを恨んでほしい。

罵倒してほしい。

でも彼は、私のことを責めない。

それどころか、お前のせいじゃないからと、私に優しくしてくれる…

そんなこと言われたら、ますますあなたのことが好きになってしま
うじゃない……

あなたはいつもそうだ。

杯戸シティホテルでピスコに捕まった時も、バスジャックの時も、命がけて私を助けてくれた。

あなたの優しさで、私は何度も勇気付けられた。

自分の居場所なんてないと言ったときも、あなたは居場所ならちやんとあると言ってくれた。

私は、あなたにたくさん助けられた。

あなたの言葉は、私を恐怖や絶望から救ってくれる。

あなたの優しさは、私の冷えきった心を、あたためてくれる。

あなたが居てくれたから、私は生きている。

あなたは、私に生きる希望を与えてくれた。

できることなら、このままあなたとずっと一緒に居たい…

私はなんて卑怯な人間なんだろう……

私のせいで、二人を引き離してしまったというのに……

実ることのない私の初恋……

この思いは決して届かない…届けてはいけない。

だから、私はこのおもいを封印する。

でも、せめて元の姿に戻るまでは…

あなたのことを好きでいさせて……

第三話・この気持ちは一体…（哀編）（後書き）

なんとか、書き終わりました。

次話はなんと蘭に…

第四話・蘭の恋人（前書き）

蘭の恋人が登場します。誰なのかは、読んでからの楽しみです

第四話・蘭の恋人

雲ひとつない、よく晴れた日、コナンは朝早くに起きた。

いや、起きたというより、起こされたといったほうがいいか…

それは、コナンの携帯にかかってきた、一本の電話が原因だった…

「まったく…誰だよ、こんな朝早くから…」

せつかく気持ちよく寝てたのに…

コナンはだるそうに、電話に出た。

「はい、もしもし〜」

「おおつ、工藤！元気やったか？」

電話越しから聞こえてきたやかましい声は、関西で有名な西の高校生探偵、服部平次だった。

「元気なわけねえだろ！こんな朝っぱらから電話しやがって！」

「なんや、つれないやつちやな。」

「んで、何の用だよ、服部…こんな朝っぱらから電話かけてきたんだから、何かあんだろ？」

「用なんてあらへんわ。久しぶりにお前の声が聞きたかっただけや。」

「……切るぞ。」

「冗談やて、冗談。実はな、今度の連休に和葉連れて、お前んとこに行くから、毛利のオッサンにも伝えといてくれや…
ほな頼んだで。」

「あつ、おい…」

そう言つと、平次は電話を切ってしまった。

何なんだよ…いつたい…

いきなり朝早くに電話してきたと思ったら、今度こっちにくるなんて言いやがって…

つたく…図々しいというか、なんていうか…
本当に迷惑な奴だな…

「えっ…今度の連休に服部君たちがくるの？」

「うん、そうみたいだよ…」

コナンは朝食の時に、朝の電話のことを蘭に話した。

「そっか、楽しみだねコナンくん」

「ははは、そうだね…」

コナンは苦笑した。

「どうでもいいが、お前らそろそろ学校に行かねーと、遅刻すんぞ…」

今まで黙っていた小五郎が、口を開いた。

「あつ、ほんとだ。じゃあ私、行ってくるね。」

「いってらっしゃい。」

コナンは笑顔で蘭に言った。

「いってらっしゃいって…オメエもとつとと学校へ行け!」

「今日は、創立記念日だから休みだよ…昨日ちゃんと言っただけど…」

コナンは小五郎にジト目を向けた。

「あれっ、そうだったっけか?」

「たく、このオヤジは…」

「今日はあいつらも来ないことだし…」

「久しぶりにゆっくりと、推理小説が読めるぜ」

コナンは嬉しそうに、本を読み始めた。

「ただいま、コナンくん。」

「あれ、蘭姉ちゃん…学校はどうしたの？」

「どうしたの？じゃないわよ。もう夕方よ…」

窓の外をみると、辺りは薄暗くなっていた。

「もしかして、今までずっと本を読んでいたの？」

蘭は呆れ顔で、コナンに訪ねた。

「はは、そうみたい…」

コナンは、苦笑しながら答えた。

「まあ、いいじゃないですか。本を読むのは良いことですし…」

今まで、蘭の後ろにいて、姿が見えなかった新出先生が言った。その両手には買い物袋を持っている。

「あれ…どうして新出先生が此処にいるの？」

「ああ、実はね…学校の帰りに夕飯の買い物をしたんだけど…つい買いすぎちゃてね。そしたら新出先生と会ってね…一人じゃ大変だろうからって、荷物を持ってくれたのよ。」

なるほど、それで両手に買い物袋を持っていたのか…

「わざわざすいません、新出先生…」

「いえいえ、当然のことをしたままでです。」

親しげに話す二人を見て、コナンは首をかしげた。

この二人…こんなに仲が良かったっけ？

「それじゃあ、僕はこれで失礼します。」

新出はそう言っ、探偵事務所を後にした。

「ねえ、蘭姉ちゃん。随分と新出先生と仲が良かったけど、どうしたの？」

コナンは気になっていることを、蘭に聞いた。

「実はね…私…今、新出先生と付き合っているんだ。」

えっ…

コナンは驚いた。まさか蘭が、新出先生と付き合っているとは思っていなかったからだ…

「でも、新一兄ちゃんはどうするの？」

「…私ね…もう待てないの…新一のこと…もう…待てないの…待って…待って…言われたの…限界なんだ…待っているだけ…とてもつらいんだ…私って、最低な女だよ…」

「蘭姉ちゃんは、最低なんかじゃないよ…悪いのは新一兄ちゃんの方だよ。いつまでも蘭姉ちゃんを待たせているんだから…それに新

「一兄ちゃんは、蘭姉ちゃんの幸せを一番に願っているから、きっと新一兄ちゃんもわかってくれるよ。」

この気持ちに嘘はない。

コナンは蘭に幸せになってほしいと思っているし、コナンも好きな人ができたから、蘭に恋人ができたんだったら、それを応援してやりたいと思っている…

「ありがとう、コナン君…なんか不思議だな…まるで新一に言われているみたいに感じるのは…コナン君と新一は別人なのにな…」

蘭は不思議そうに呟いた。

まあ、同一人物なんだから、そう感じるのも当たり前だろう…

そんなこと、口に出すことはできねえけど…

コナンは心の中で、そう思った。

それにしても腹減ったな…そっぴや本読むのに夢中で昼、食ってないんだっけ…

「それより蘭姉ちゃん。僕、もうお腹ペコペコだよ…」

「ああ、ごめんね。今作るから待っててね。」

「はあ〜い。」

蘭は夕飯を作るために、キッチンへと向かった…

第四話・蘭の恋人（後書き）

哀ちゃんが登場しなくてスイマセン…
次回はちゃんと登場させます。

第五話・告白（前書き）

哀とロマンの告白です。

あまりにもコナンの、階段を降りる音が凄かったのか、小五郎は見当違いなことを言った……………

ハア、ハア、ハア…

今、コナンは全力で走っている…

学校まであとちょっと…

ガラガラッ…

コナンは教室の扉を開けると、スゴイ勢いで、教室に入ってきた……………

それとほぼ同時に、チャイムが鳴った。

「ギリギリセーフね。寝坊でもしたのかしら？名探偵さん……………」

「ああ…まあな…ハア、ハア、なんとか…間に…合ったぜ…ハア、ハア、……………」

途切れ途切れに、コナンは答えた。

「はあ…い、皆さん席に着いてください。出席をとります。元気よく返事をしてくださいね。」

担任の小林が出席をとり始めた…

「では皆さん、一時間目は算数の授業なので、算数の用意をしてお

いてください。」

そういつて小林は、教室を出ていった。

「はあく、一時間目から算数の授業なんて、最悪だぜ…」

「仕方ありませんよ、元太君…」

「そうだよ、元太君。」

いつもの三人が、コナンと哀の机の周りに集まって、話していた。

「それよりコナン。オメエ今日学校に来るの遅かったけど、寝坊で
もしたのか？」

元太がコナンに訪ねた。

「ああ、まあな…」

「へえく、珍しいですね。コナンくんが寝坊するなんて…」

「まあ、どうせ夜遅くまで、推理小説でも読んでいたんでしょうけ
どね…」

「ええく。だめだよ、コナン君。夜は早く寝なきゃ。」

「そうだぞ！コナン。もっと早く寝ないと、背が伸びねえぞ！」

「そうですね。寝る子は、よく育つって言いますしね。コナン君、
ただでさえ背が低いんですから…」

「クスッ、そうね。」

「オメエらな…好き勝手言いやがって…」

コナンは、こめかみに血管を浮き上がらせながら呟いた……

……

今は算数の時間……

コナンと哀にとっては退屈すぎる授業だ。

「はあ、高校生にもなって算数の授業とは…泣けるぜ…」

「その台詞、何回目？毎日、同じようなこと聞いている気がするの
は、私の気のせいかしら…」

隣でぼやいているコナンに、哀が答えた。

「じゃあねーだろ。ほんとのことなんだから…」

「まあ、いいわ。それより、今日帰りに博士の家に来て。あなたに
用があるから…」

哀が黒板の方を向いたまま、コナンに言った。

「おい、用ってなんだよ…」

「こら、江戸川君。おしゃべりしてないで、前を向きなさい。」

「すみません……」

……

「それでは皆さん、さようなら。」

「」「さようなら。」

学校が終わり、生徒たちは、家に帰宅している。

いつもは一緒に帰っている三人も、今日は用事があるみたいで、先に帰ったようだ……

「んで、用ってなんだよ……」

コナンは勝手知ったる、阿笠邸のソファに座りながら、哀に聞いた。

ちなみに、博士は用事があるみたいで、家には居ない。

つまり、コナンと哀の二人っきりなのだ。

コナンは、内心ドキドキしているが、表情には出さないでいた。

「実は、解毒剤の試作品ができたの…」

「えっ…ほんとかよ、それ…」

「ええ、そうよ。完璧ではないけど、以前よりは長い時間、元の姿でいられるわよ…もちろん飲むんでしょ？」

「え、ああ、まあな…」

「どうしたの？あまり嬉しそうじゃないけど…」

てっきりコナンのことだから、もっと喜ぶと思ったのに…

それとも、突然すぎて言葉がでないのかしら…

どっちにしても、彼は元の姿に戻ったら、彼女に告白するのだろう…

これでよかったのよね…これで…

「さあ、早くそれを飲んで彼女のところに行ったら…告白するんでしょっ…」

本当は行ってほしくない…

でも、そんなこと、私に言えるわけない…

哀は自分の気持ちを、悟られないようにコナンに言った。

「俺、蘭に告白する気はねえぜ。」

「えっ…どうして？せつかく元の姿に戻れるのに…」

「どうしてって…蘭は今、新出先生と付き合っているんだぜ。告白したって無意味だろ。」

「そんなんっ…だって…蘭さんはあれほど工藤くんのが好きだったのに…それなのに…」

「もう、俺を待つのは限界なんだってさ。」

哀は、コナンの言葉に驚愕した。

「ごめんなさい…工藤君…私がAPT X 4869なんて作ったせいで、こんなことになってしまっ…謝って済むことじゃないけど…本当にごめんなさい…」

「灰原のせいじゃねえよ。それによく考えたら、灰原がAPT X 4869を作ってなかったら、俺はジンに撃ち殺されて、今ごろあの世にいつてたぜ…だから俺は、灰原に感謝しているんだぜ。」

「それだけじゃないわ!」

哀は少し声を荒げてコナンに言った。

「私は蘭さんに嫉妬してたのよ…あなたが蘭さんと仲良くしているところを想像する度に、私は嫉妬してたの…だから、蘭さんが新出先生と付き合っていることを知ったとき、罪悪感とともに、嬉しいとも感じたわ…これで私にもチャンスが巡ってきたんだって…蘭さんに恋人ができて、ちょっとでも嬉しいと思っ…たのよ、私は…」

コナンは、哀の言ったことに目を丸くした。

「つまり…その…灰原は俺のことが好きなのか？」

「ええ、そうよ…私はあなたのことが、好きで堪らないの…こんなこと言う権利なんて、私にはないのに…私って最低ね…」

涙ながらに、哀はコナンに告白した。

コナンはそんな哀を優しく抱きしめた。

「…工藤…君……」

「ごめんな…灰原の気持ちに気づいてやれなくて…俺、蘭に恋人ができたことを知っても、全然ショックを受けなかったんだ…それは、灰原がいてくれたからなんだぜ。もっと早くに、灰原に俺の気持ちを伝えていれば良かったな……」

「…工藤君…それって…つまり…その…」

「灰原…俺はおめえのことが好きだ。この地球上の誰よりも、おめえのことを愛している…」

コナンは、さらに哀を強く抱きしめて、言った。

哀の目から涙がまた溢れだした。

「私も……工藤君のこと……この地球上の誰よりも……愛しているわ……」

「ナンと哀はお互いに見つめあい、顔を近づけて、唇を重ねた……」

第五話・告白（後書き）

文才なくてホントすいません…
駄文ですがこれからも読んでくれるとうれしいです。

第六話・親友（前書き）

コナンが蘭に自分の気持ちを伝えます。

第六話・親友

コナンと哀は今、ソファに寄り添いながら座っている。

哀は実らないと思っていた初恋が実り、とても嬉しいと感じている。

哀はコナンの肩に頭をのせた。

コナンは、そんな哀の頭を優しく撫でた。

「ねえ、工藤くん…どうして私のことを好きになってくれたの？あなた、前まではあんなに蘭さんのことを想っていたのに…それなのにどうしてこんな可愛いげのない女を好きになってくれたの？」

哀はコナンが、自分のどういふところを好きになったのかが知りたくて、コナンに訊いた。

「そうだなあ…自分でもよくわかんねんだ…ただ、おめえと一緒に過ごしていくうちに、いつの間にかおめえのことが好きになっていったんだ…最初はおめえのことを、人殺しの薬を作っていた、最低な女だと思っていたよ…でも、今はそう思わねえよ…おめえは奴らに薬を作らされていただけで、おめえは悪くなんてないんだからな…それにおめえは、本当はすっげえ優しい奴で、それを上手く表現できない不器用な奴で、周りからは勘違いされやすいけど…自分のことよりも、他人のことを優先させる、誰よりも優しい奴…俺はそんな灰原だからこそ惚れたんだと思う…」

哀はコナンの話をきいて、涙が溢れた。

それは、悲しみの涙ではなく、嬉しくて流れた涙だ。

「……ありがとう……工藤くん……私のことをそんなふうに想ってくれて……すごく嬉しいわ……」

哀はコナンに抱きついた。

コナンも、そんな哀の背中に手をまわして抱き締めた。

「灰原……俺はおめえに出会えて本当によかったよ……」

「私も……工藤くんに出会えて本当によかったわ……」

二人は見つめ会つと、顔を近づけた。

お互いの唇が重ね合おうした瞬間……

「じゃますんで〜くど〜う!?!」

いきなり声が出たかと思うと、コナンと哀の前に、服部平次が現れた。

「おまえら……なにやっとなねん?」

そう、服部はコナンと哀が、今まさにキスをしようとしていたところを目撃してしまったのだ……

突然の服部の登場に、固まったままの二人だったが、はっとしてお互いに体を離れた。

「なっ…なんで服部がここにいんだよ！？今度の連休に来るんじゃないかったのか？」

「いや、そのつもりやったんやけど…待ちきれんかったから、早めに来たる思ってたな…ちょうど学校も創立記念日で休みやったし…」

まったく…どうしてコイツはいつもこうなんだ…

突然アポなしでやってきやがって…

本当に迷惑な奴だ…

「にしても、どういうこっちゃんや工藤…あのちっこい姉ちゃんとキスしようとしてたなんて……毛利の姉ちゃんはどうするんや？」

「そのことなんだが、服部…俺は蘭のことじゃなくて、灰原のことが好きなんだ…」

「なんやと!?!？」

服部は驚いた。

あんなに好きだったはずの蘭ではなく、工藤と同じ薬を飲んで、幼児化した姉ちゃんのことを好きになるとは…

「お前、本気でいつてんのか？毛利の姉ちゃんはずっとお前のことを待ってるんやで？」

「蘭には恋人ができたんだよ…だから、俺のことを待ってはいねえよ…それに、蘭に恋人ができたからっていう理由で、灰原のことを好きになっただんじやないぜ。たとえば、蘭に恋人ができなかったとしても、俺は灰原のことを好きになったださ…」

「ほんまにそれでいいんか？」

「ああ」

そう答えるコナンの顔には、迷いがなかった。

どうやら、工藤は本気らしい…

「そんなら、俺が口を挟むわけにはいかへんなあ…工藤、ちゃんとそのちっこい姉ちゃんのこと、大事にしたるんやで。」

「ありがとな、服部」

「ありがとう、服部くん…」

今まで黙っていた哀も、服部にお礼を言った。

「そんなん気にすんなや。親友やろ。それより、このこと毛利の姉ちゃんにもちゃんと話したんか？」

「いや、まだちゃんとは話していねえよ…あいつにもちゃんと話さなきゃな。」

「おっしや！ほんならさっそく話したるうやないか。」

そう言うと服部は、コナンにはやく電話をするようにと、急かした。

「わぁーだから、そんなに急かすなよ。」

コナンは新一専用の携帯で、蘭に電話をかけた。

プルルルツ、プルルルツ…

「もしもし、毛利ですけど。」

数回のコール音の後に、蘭が電話に出た。

「もしもし、俺だけど…」

「新一？どうしたの急に…私、新一に伝えなきゃいけないことがあって、何度も電話したんだけど繋がらなくて…」

「あ、ああ。ちょっと厄介な事件を抱えていてな…それで連絡できなかったんだ…」

「そうなの？相変わらず、事件のことばかりなのね…」

「まあな。それで、俺も蘭に伝えなきゃいけないことがあるんだ…」

「伝えなきゃいけないことって？」

電話越しに聞こえてきた蘭の声は、これから俺が言おうとしていることが、なんなのかを察しているかのようになり、落ち着いた声だった。

まあ、俺もいつもより真剣に話しているから、何かあるんだろうと、蘭が思っても不思議じゃない…

「実はな、蘭。俺は、ある事件で知り合った女性のことを好きになつたんだ…最初はそいつのことを、愛想もないし、可愛いげのない奴だと思っていた。でもそいつのことを知っていくうちに、本当はすごく優しい奴だつてわかつたんだ…自分のことよりも、周りのことをいつも考えていて…いつの間にかそいつのことを、俺が守つてやりたいと思うようになったんだ…」

俺が話し終わるまで、蘭は黙って話を聞いてくれた。

「そつか。新一が守りたいと思う人なんだから、きっと素晴らしい女性なんだね。」

「ああ」

「だったら、新一はその人のことを守つてあげて。それと、私も新一に伝えることがあるの…」

「ああ、新出先生のことだろ。」

「えっ、知っているの？」

「眼鏡のボウズにきいたんだよ。蘭が、新出先生と付き合っているつてな。」

「コナン君にきいたんだ…ごめんね、新一。待ってるって言ったの

に……」

「気にすんなよ。俺の方こそごめんな……いつまでも待たせちゃまって」

「ううん。気にしないで。それより、ちゃんとその人のこと、守ってあげるのよ。」

「わぁーてるよ。蘭の方こそ、幸せになれよ。」

「ありがとう、新一。私たち、これからも幼馴染みの関係でいられるよね？」

「あつたりめえーだろ。蘭は、これからもずっと俺の親友だよ。」

「そうだね。あつ、いけない。私、宿題やってなかったんだ。じゃあ、そろそろ電話切るね。」

「ああ。じゃあ、またな。」

「うん。またね。」

コナンは電話を切った。

その顔は、すっきりとしていた。

これからも、蘭はずっと俺の大切な親友だ。

蘭……幸せになれよ

コナンは、心のなかで蘭の幸せを願った。

ふと顔をあげると、哀がコナンに近づいてきた。

「工藤くん……………」

その表情は、少し暗かった。

「んな顔すんなよ。おめえが、蘭のことを気にする必要なんてないんだから。」

コナンはそう言いながら、哀を抱き締めた。

「工藤くん!？」

哀は突然コナンに抱き締められたので、驚いた。

「蘭には、新出先生がついているんだぜ。新出先生だったら、絶対に蘭のことを幸せにしてくれるさ。俺じゃ、蘭を幸せにすることはできない。俺が幸せにできるのは、灰原しかいねえからな。そして灰原を幸せにできるのは、俺しかいねえよ。」

「随分と、自信家なのね……………」

口ではそう言っているが、本当はすごく嬉しい。

哀の表情を見れば、一目瞭然だ。

「相変わらず、素直じゃねえな。」

「あら、ありがとう。」

「褒めてねえよ……」

まだ、気恥ずかしくて素直になれない哀だったが、それでも自分の出せる、精一杯の気持ちを出して、哀もコナンに抱きついた。

「ありがとう。工藤くん」

少しは素直になれた気がする……

「灰原……」

コナンは哀の瞳を見つめた。

「工藤くん……」

哀もコナンの瞳を見つめた。

二人は顔を近づけた。

そして、唇が重なるうとした瞬間……

「ゴホンッ。お前ら、また俺がいるってこと忘れてるやろっ。」

服部がジト目で、コナンと哀を見た。

「おめえ、まだいたのかよ……ほんつとに気が利かねえ奴だな……」

「まったくよ……せつかく良い雰囲気だったのに……」

コナンと哀は、服部を睨んだ。

「なんやと、こら。」

服部は自分が悪いみたいに言われて、怒った…

何はともあれ、これでコナンは、蘭に自分の気持ちを伝えることが出来た…

これで終わったわけではない…

これから始まるのだ…

それぞれ自分の進む道に、進んでいく…

大変なことや、辛いことがあるかもしれない…

だけど、そんなときには誰か大切な人と一緒ならば、きつとどんな困難でも乗り越えられるだろう…

灰原…おめえのことは、俺が絶対に幸せにしてやるよ。

コナンは再び、心のなかで誓った。

第六話・親友（後書き）

なんか、終わり方が最終話っぽくなってしまいましたけど……
まだまだ、このお話は続きます。

これからも、応援していただけると嬉しいです（＾Ｏ＾）

第七話・二人（前書き）

更新が遅くなってスイマセン…

一部12禁、もしくは15禁要素が含まれているかもしれません。

そういうのが苦手な人は、読まない方がいいとおもいます。

第七話・二人

「それで…おめえ一人で東京に来たのか？」

コナンが服部に訪ねた。

「いや、和葉と一緒に来たんや。探偵事務所に行ったら、お前があらへんかったから、俺一人でここに来たんや。暇だったしな。」

「ったく…来なくてよかったのに…」

コナンがぼそつと言った。

「おい…ちゃんと聞こえてんで。」

服部はコナンにジト目を向けた。

そのとき、玄関から音がした。

きつと博士が帰ってきたんだろう。

哀は玄関の方へ歩いていった。

「ただいま、哀君。」

「おかえりなさい、博士。」

「おや…だれか来ておるのか？」

玄関にある靴を見ると、あきらかに自分や、哀の靴ではないのがわかる。

博士が疑問に思っていると、奥からコナンと服部がやってきた。

「久しぶりやなあ、じいさん。」

「お邪魔させてもらってるぜ。博士」

「おお。久しぶりじゃのう、服部くん。新一も来ておったのか。」

「それより博士。遅かったじゃねえか。」

時計を見ると、既に六時を過ぎていた。

「ああ、ちょっと友人と会っておつてな。」

博士はリビングに向かいながら話した。

「いやあ、それにしてもお腹が空いたわい。」

博士は哀を見ながら言った。

「今から夕飯の準備するから待ってて。」

「哀君。できれば肉料理にしてくれると嬉しいんじゃないか……」

「しょうがないわね。今日は特別よ。」

「ほんとうか!?!」

博士は断られるとばかり思っていたので、哀の言葉に驚いた。

哀は夕飯の支度をするために、キッチンへ向かった。

「あかん。俺もめっちゃ腹減ってしもうた。姉ちゃん、できるだけはやく頼むで〜」

キッチンにいる哀に向かって服部は言った。

「あら、そんなにはやく食べたいんなら、あなたも手伝わらどつかしら?。」

服部に皮肉混じりに言った。

「いや〜、遠慮しときます…。」

「それじゃあ、俺が手伝うよ。」

コナンがキッチンに向かった。

「ありがとう、工藤くん。さすがは東の名探偵ね。どこかの色黒探偵さんとは大違いね。」

ここで、すかさず服部が反論する。

「ちよお、待て!なんで工藤が東の名探偵で、俺だけが色黒探偵な

んや!」

「あら事実じゃない。」

「俺もそう思っぜ。」

「なんやと〜!お前ら二人して俺をバカにしよって!いつか罰あたんで…って聞いているんかつ!」

コナンと哀は、一人呟いてる服部を無視して、夕飯の準備をしていた。

「くっそ〜あいつら、いつか覚えてるんやで〜。」

「まあまあ、服部くん。少しは落ち着いたらどうじゃ?」

博士は服部を宥めながら、哀とコナンを見ていた。

「それにしても仲がいいのお、あの二人は。」

コナンと哀は楽しそうに料理を作っていた。

「ああ、あの二人お互いに告白しよったんや。じいさんが帰ってくるちよつと前にな。」

「なんじゃと!?!それは本当か?」

「ほんとうや。あの二人めっちゃラブラブやったんやで〜」

服部はニヤニヤしながら答えた。

「そうか、そうか。哀君…ついに新一に告白したんじゃない。」

博士は、哀がコナンに好意を持っていることを、薄々感じていた。

そんな哀の思いが叶って、博士は自分のことのように喜んでいた。

「ほんと、羨ましすぎんであの二人…」

「それで哀君は機嫌がよかったんじゃない。おかげで今日は久しぶりの肉料理じゃ。」

二人が色々話しているうちに、キッチンにいるコナンと哀の声がした。

「二人とも、ご飯できたわよ。」

「早くしないと冷めちゃうぜ。」

「わかった、今行くぞい。」

博士と服部は急いで食卓へ向かった。

ちなみに今日の夕飯は、阿笠邸では滅多に食べることができないステーキだ。

「いや〜うまそうじゃのう。」

「ほんまやな。」

「それじゃ食べましょう。」

「……いただきます」「」「」

四人は同時に言うと、食べ始めた。

ちなみに夕飯はステーキの他に、サラダなどもあったが、博士はそれらには目もくれず、真っ先にステーキを食べようとしていた。

「それじゃあ、食べるとしようかの」

博士がステーキを口に含んだ瞬間、博士はとても幸せそうな顔をしていた。

「うまい！最高じゃ！！」

「おおげさやなあ、じいさん。」

「まあ、博士にとっては久しぶりの肉料理なんだから無理もねえよ……」

コナンと服部は、まるで天国にでもぼったかのような顔をしている博士を見て呟いた。

しかし、次の哀の言葉で、天国から地獄に突き落とされたかのように、博士の顔が恐怖に震える。

「博士……今日食べた分、明日からは毎日ジョギングよ。それから体重チェックに体脂肪チェック……その数値にもよるけど、これからは

毎日ジョギングだと思ってね。」

哀は微笑みながら博士に言うが、その目はまったく笑っておらず、博士は、これから毎日ジョギングをしなければならなくなって、大きなため息をついた。

「ハハハ、大変だな博士も……」

「ほんま、お気の毒様……」

二人は苦笑しながら、博士に同情した……

それからの博士は、なかなか箸が進まなかったとか……

あれから時間が立ち、コナンと哀は後片付けをしていた。

博士は今風呂に入っている。

そして服部は、探偵事務所に電話を掛けていた。

「もしもし、毛利探偵事務所ですが」

「おおく姉ちゃんか？俺や、俺」

「服部くん？いまどこにいるの？」

「ああ、いま阿笠のじいさんの家や。ほんでな、今日は俺と眼鏡のボウズはじいさんの家に泊まるから、和葉にも伝えといてくれや。ほな、頼んだで〜」

「ちよつ、服部くん！」

蘭が何か言おうとする前に、服部は電話を切ってしまった。

「これでよしと。ほんなら俺も風呂に入るとしよか。ちよつどじいさんもでてきたみたいやしな〜」

「まったく…さつさとでてこいよな、服部…後がつつかえてるんだから…」

「そうね、今日は色々あって疲れたから、はやく寝たいしね。」

すると突然、服部はコナンと哀の方を見てニヤニヤしだした。

「なんなら、先に入ってもいいんやで？二人一緒にな。」

「バツ、／／／バーロー、何いつてんだ／／」

「そつよ／／／変なこと言わないで頂戴！／／／」

「遠慮すんなや。はんまは一緒に入りたいんやろ？」

服部はさっきの仕返しといわんばかりに、コナンと哀をからかう。

「いいから、さつさと入ってこい！！／／」

「わかった、わかった。」

服部はニヤニヤしながら、風呂場へ向かっていった…

「まったく…あの人は何を考えているのかしら…」

「さあな…」

(……ああは言ったものの…灰原と一緒に入りたかったな……)

(……あんなふうにしたけど…工藤くんとなら入ってもよかったかな……)

お互いにそんなふうに思っていることを知らない二人は、その後、結局別々に風呂に入った…

「ほんなら、おやすみ」

只今の時刻は11時を過ぎたくらいだ…
服部は部屋に入っていった…

「それじゃ、ワシも寝るとしようかの…君たちはどうするんじゃ？」

「私はまだ起きているわ。」

「おれもまだ起きているよ。」

もともと夜型の二人にとっては、まだ寝るには早い時間だ…

博士もそのことは知っているので、特に何も言わず、自室に向かっていった…

「やっと二人つきりになれたな…」

「そうね…」

「灰原…」

コナンは哀の名前を呼んで、哀を自分の方に抱き寄せた。哀も、そんなコナンに甘えるように抱きついた。

「ずっとこうしたかった…」

「私も…」

「なあ、灰原…キスしてもいいか？」

「私も頼もうと思ったところ…」

二人はお互いに見つめ合うと、ゆっくりと顔を近づけ唇を重ねた。

三十秒くらいたった後、二人は名残惜しげに唇を離れた。

「工藤くん…今日一緒に寝てくれる／＼？」

上目遣いで聞いてくる哀に、コナンはドキツとした。

「あ、ああ／＼俺は構わないよ／＼」

コナンと哀は、哀の自室へと向かった。

「工藤くん。寒くない？」

「大丈夫。灰原がいるから温かいよ。」

コナンと哀はお互いに体を寄せあって、密着している。服部が見たら、絶対にからかわれるだろう…

万が一のことを考えて、部屋の鍵は閉めた。つまり誰にも邪魔されることはない。

二人は自然と向き合い、顔を近づけた。そのまま唇が重なる。

「んっ、んっ／＼／」

「んっ、んっふ／／」

さっきやったキスとは、くらげものにならないくらいに、二人は激しく求め合う。

コナンが舌を絡ませようとすると、哀は口を少し開ける。コナンはすかさず、哀の口に舌を入れて絡ませる。

哀も、自分からコナンの舌に絡ませる。

「んっ／＼んっ、く／＼んんっ／／／」

「んっ、ふう／＼んっ、んっ／＼／」

しばらくお互いにキスをしていたが、ここでコナンは哀から唇を離れた。

「これ以上続けたら俺…おめえを抱きたくなっちまう／＼」

「そうね…私もあなたに抱かれなくなっちゃうわ／＼」

「今日はこれくらいにしとくか…急がなくても、時間はたっぷりあるんだから、ゆっくり進んで行けばいいさ。」

「そうね。」

「でも、いつかはいいよな?」

「ええ、いつかね／＼」

そのまま、二人は抱き合ったまま眠りについた。

第七話・二人（後書き）

関西弁がおかしなところがあるかもしれませんが、その時は指摘してください。

第八話・トロピカルランド(前書き)

今回、かなり長くなってしまいました…

第八話・トロピカルランド

次の日の朝、哀はコナンよりも先に目が覚めた。

「ん…」

哀は寝返りをうち、隣で寝ているコナンの顔を眺める。

無防備な寝顔…

こうやって見ると、年相応の寝顔で可愛いわね…

「工藤くん、起きて。」

「ん…あともう少し…」

「早く起きないと、博士たちが起きるわよ。」

「キスしてくれたら、起きてもいいいぜ？」

「もう／＼しよつがないわね／＼」

照れながらも、哀はコナンに顔を近づけて、唇を重ねた。

「これだけ？」

「当たり前でしょ／＼ほらおっちゃん起きて。」

「わかったよ。」

コナンはベッドからおりて、立ち上がった。哀も同じようにして立った。

「ねえ、工藤くん。私、着替えたんだけど…」

「あん？だったら着替えりゃいいじゃねえか。」

「あのねえ…あなたがいたら着替えられないじゃない。」

「別にいいじゃねえか。着替えぐらい…」

「よくないの。ほらさっさと出て行って。」

「お、おい。」

哀はコナンの背中を押して行って、部屋の外へと出した。勿論鍵は閉めた。

「まったく…朝から変なこと考えちゃダメよ、工藤くん。」

哀は、今ごろドアの前で拗ねているであろうコナンに言った。

「別に変なことなんか考えてねえよ。」

「どつただか…」

哀は、半ば呆れたように呟いた。まあ、工藤くんの気持ちも、分かるわけではないけど…今はまだ無理だけど、いつかはきつとね……

その時まで待っててね。工藤くん。

哀がそんなふうに見えることを全く知らないコナンは、部屋の前でため息をついていた。

「まあ、しゃーねえか。まだ恋人になつたばっかだもんな…でもいつかは…」

コナンが一人でブツブツ言っていると、突然ドアが開いた。

「うわっ！！」

「あなた、まだそこにいたの…」

哀がジト目でコナンに言った。

「あ、ああ。まあ、ちょっと考え事してたんだよ。(っっていうか、着替えるの早っ！！)」

実際には、哀のことを考えていたのだが、本人には言えないなと思いい、コナンは適当に誤魔化した。

「ふーん。そうなの。それじゃ、私は先に下に行ってるから、工藤くんもさっさと着替えちゃいなさいよ。」

「おっ」

コナンは着替えるために、部屋へと入っていった。

コナンが着替え終えてリビングに行くと、すでに博士と服部がいた。

「おお、工藤！遅かったやないか。」

「朝っから元気な奴だな…」

「当たり前や。朝は一日の始まりなんやから、元気よくするのは当然やろ？」

「ハハハ…」

コナンは苦笑した。

「確かに服部くんの言う通りじゃ。朝は一日の始まりなんじゃから、新一ももつと元気よくしてみたらどうじゃ？」

「わぁーってるよ…それより服部。今日はどうするんだ？後で探偵事務所に行くんだろ？」

「ああ。そのつもりやで。和葉ら誘ってどっか行こう思てんねんけど…まあ、それは後で決めればいいやろ。ちっこい姉ちゃんも一緒に行くやろ？」

「えっ、私は…」

私はどうしようかしら…探偵事務所に行くという事は、勿論蘭さんとも会うわよね。別に彼女と会ったのが嫌なわけではないけど、私のせいで彼女から工藤くんを奪ってしまった…

「おーい、灰原？」

「えっ…何？」

「お前、もしかして蘭に申し訳ないとかって思ってるんじゃないだろうな。」

「……………」

「やっぱりそうか…言ったら？お前が気にすることねえって。それに蘭にはちゃんと恋人がいるんだから、お前が罪悪感を感じる必要なんてないんだぜ？」

「…そうね。そう言ってもらえると助かるわ。ありがとう、工藤くん。」

「べ、別に大したことは言ってるねえよ。」

コナンは照れ隠しのつもりか、そっぽを向きながら答えた。

「本当に二人は仲がいいんじゃない。」

「ほんまやな。その様子やと、昨夜はたくさんイチャイチャしてたんやろ？」

「なっ／＼別にイチャイチャなんてしてねえーよ！！！」

「まあまあ、隠さんでもええやないか」

「服部ー！！！」

コナンはそう叫ぶと、服部を追いかけ始めた。そして服部は、『捕まえられるもんなら捕まえてみる』と言いながら、逃げ回っている。

「…朝から元気な人達ね。（それにしても…服部くんには、後で新薬の実験台にでもなってもらおうかしら…）」

心の中で、なにやら恐ろしいことを考えている哀であった。

この後、服部がどうなったかは、読者の想像にお任せしよう……

「それじゃ、行ってくるわね。博士。」

「ああ。車には気を付けるんじゃぞ。」

「わかってるわよ」

そう言って玄関を出た哀たちは、毛利探偵事務所に向かうため歩き出した。ちなみに博士は用事があるとかで、来ていない。

しばらくすると、探偵事務所が見えてきた。

階段を上がって事務所に入ると、いきなり和葉のドアップ顔があった。

「平次っ！！あんた何してんの？黙ってどっか行きおって！」

「やいやい、ゆーなや。相変わらずやかましい女やな。」

「なんやと!?!」

「まあまあ、二人とも落ち着いて。」

見兼ねた蘭が、二人を宥める。

コナンと哀は、そんな二人の様子を見て呆れていた。

「あの二人って、いつもああなの?」

小声でコナンに尋ねる。

「ああ。あの二人、いつもああだぜ…まあ、喧嘩するほど仲がいいって言うしな。」

「そうね…」

哀が再び服部の方を見ると、既に言い合いは終わっており、これらの予定について話していた。

「それより、これからどうする?」

蘭が服部と和葉に尋ねる。

「せやな…映画を見に行くっちゅんはどっせ?」

服部が答える。

「そんなんだめや！どうせ平次は推理ものしか見いひんからな！」

「じゃあ、どうするんや？」

「コナンくと哀ちゃんは、どこか行きたいところがある？」

「僕はどこでもいいよ。蘭姉ちゃん。」

「コナンがいかにも子供らしく答える。

「私もどこでもいいわ。」

「コナンに比べて、哀はクールに答える。

「おい。おめえ、もっと子供らしく答えらんねえのか？」

「これでも十分子供らしく答えたつもりよ……」

「ハハハ…（どこがだよ…）」

「何か言った？」

「い、いえ何も言ってますん。」

哀が睨んできたので、コナンは適当に誤魔化した。その様子を見ていた蘭が『あの二人仲がいいな。ひよっとして付き合っているのかな？』と思っていたことは、誰も知らない……

「あゝもう！こんなんじゃ、いつまでたっても決まらんわ！」

服部が苛々しながら叫んだ。

「それなら、トロピカルランドに行くっていつのはどいつ？」

蘭がみんなに提案する。

「せやな！それだったらみんな楽しめるし、平次もいいやろ？」

「まあ、しゃーないわな。」

「コナンさんと哀ちゃんもそれでいい？」

「うん！いいよ。」

「私も構わないわよ……」

「それじゃ、決まりね。」

五人はさっそく出掛けていった。

「にしても、すごい人の数やな。」

トロピカルランドに入った服部は呟いた。

「ほんま、東京はどこへ行っても人がたくさんおるな……」

「しょうがないよ…今日は休日なんだし。それよりどこからまわる？」

「ほんなら、ジエットコースターからはどうや？」

和葉が答えると、すかさず服部が反論する。

「よせや。今の時間帯は混んでるから、待たされるで。」

「ほんならどうするんや？」

「それを今考えてるんやろ…」

「だったらこうしない？それぞれ別々にわかれて行動して、時間とか決めといて、後で集合すればいいんじゃない？」

コナンが、これまた子供っぽく提案する。

「そうだね。そうしよっか。」

「ほんなら、蘭ちゃん、一緒に行こ！」

和葉はさっそく行動しようとする。

「ちょー待て！集合時間とかどうするんや？」

「せやな…夕方くらいでええんやないか？集合場所はここってどうや？」

「ほんなら決まりやな。」

和葉と蘭はさっそく行ってしまった。

「ほんま、女うちゅうやつは勝手やな…ほんなら俺らはどっからまわる…って、二人ともいないやないか!!」

コナンと哀は、服部のことは無視して、先に行ってしまった…

「それより、いいの？服部くんを置いてきて…」

「いいに決まってるんだろ？あいつがいると、いろいろからかわれるし。」

コナンはさっそく哀の手を握る。

「あつ／＼」

「嫌か？」

「そんなわけないじゃない／＼ただいきなりだったから、ちょっとびっくりしただけ／＼」

そういって、哀もコナンの手を握り返した。

「そういえば、初めてね…あなたとデートするの／＼」

「ああ、そうだな／＼それよりどこからまわるっ？」

「どこでもいいわよ?」

「それじゃあ、お化け屋敷なんてどうだ?」

「いいわよ。」

哀がにつこりと笑いながら答える。

「あっ／＼」

哀が、あまりにも可愛く笑うものだから、コナンは思わず見とれてしまった。

「どうしたの?」

哀がコナンの顔をのぞきながら尋ねる。

「いや、灰原の笑顔があまりにも可愛かったから、見とれてた／＼」

「なっ／＼なに言ってるのよ／＼ばかなこと言ってるで、早く行きましよう／＼」

哀は恥ずかしくなってしまう、先にお化け屋敷に向かっていった。

「あ、おい。待てよ」

コナンもその後を追う。

お化け屋敷はそんなに混んでなく、すぐに入れた。

途中でお化けが驚かしてくるが、勿論コナンと哀は怖がらない。そんなとき、お化けが哀の肩を掴んだ。

「きゃっ!」

さすがの哀もそれにはびっくりして、思わずコナンに抱きついてしまった。

「は、灰原ノノ」

「えっノノあ、ごめんなさいノノ」

哀がコナンから離れようとしたが、コナンが哀の肩に腕を回し、哀を抱き寄せる。

「別に謝る必要なんてないよ。」

コナンが優しく答える。

「あノノありがとうノノ」

そのまま二人は、出口へと向かっていった。さすがに外でもくっついてたままではいられないので、お互いに体を離すが、その代わりに腕を絡ませながら歩くことにした。

「ねえ、工藤くん。次はどうするの?」

哀がコナンの肩に頭をのせて、甘えるような声で尋ねた。

「あ、ああ／＼次はジェットコースターに乗ろうぜ／＼」

コナンが照れながら答える。二人はさっそくジェットコースターの乗り場に向かった。

「結構並んでるな。こりゃ一時間以上は待つようだぜ。どうする？」

「並ぶしかないんじゃない？」

ちなみにコナンと哀は、今は腕を組んでいない。さすがにここでは人目につきすぎるといふ理由だ。しかし手は繋いでいる。これくらいなら問題ないだろうと思ったからである。

二人が並び始めてから、だいぶ時間がたち、やっと順番がまわってきた。二人はさっそく乗り込む。

「やっと乗れたな。んっ、灰原？」

ふと哀の方を見ると、体が強ばっているように見える。

「ひょっとして、怖いのか？」

「べっ、別に怖くなんてないわよ！」

そんなふうにいっているが、どうみても怖がっているように見えるんだけど…

心の中でそう思ったが、口には出さず、代わりに哀の手を握る。

「灰原：無理しなくてもいいんだぜ。笑ったりなんてしないから、素直になっただいいんだぜ？」

「…うん／＼ありがと／／」

哀はコナンの優しさが嬉しく、素直に頷いた。そしてジェットコースターが動きだし、だんだんと加速していった。始めは怖がっていた哀も、だんだんと慣れたのが、最初よりは体がリラックスしていた。

「どうだった？ジェットコースターは。結構楽しかったろ？」

「そうね…工藤くんがいてくれたから楽しかったわ／／」

「そうか／＼それはよかった／＼それよりそろそろお腹空かないか？」

「そういえばそうね…それじゃあ、お昼にしましょうか。」

「そうだな」

コナンと哀は近くの店に入っていった。しばらくして、注文した料理が運ばれてきた。

「ほら、灰原。ア～ンして。」

「ちょっと工藤くん／＼恥ずかしいわよ／＼」

「いいだろ？俺ら恋人同士なんだし。」

「もう／＼しょうがないわね／＼」

哀は素直にアーンした。

「どうだ？おいしいか？」

「ええ、工藤くんが食べさせてくれたから、とってもおいしいわ／＼」

「すっげえ、嬉しいこと言うんだな／＼」

コナンは哀が普段よりも、素直になっていて、とても可愛いなと思っっている。

「ほら、工藤くんもアーンして。」

「あ、ああ／＼」

コナンが口を開けて哀に食べさせてもらっつ。

「どう？おいしい？」

「ああ／＼灰原の愛情がたっぷりこもっているから、すごくおいしいよ／＼／＼」

「もう／＼」

二人はその後も仲良く食事をした。その様子は、まさに恋人同士だ
という感じがした。

昼食後も、二人はいろいろな乗り物に乗り、デートを楽しんだ。

「そろそろ、集合場所に戻った方がいいんじゃない？」

既に日が沈み始めている。

「それじゃあ、最後にあれに乗ろうぜ？」

コナンが言うあれとは、観覧車のこと。

「いいわよ。」

「よし。決まりだな。」

さっそく二人は観覧車に乗った。

「今日は楽しかったか？」

コナンが哀に尋ねる。

「ええ、とっても楽しかったわ。」

ちなみにコナンと哀は、一緒に座っている。観覧車からはちょうど
夕日が見える。哀の顔が夕日に照らされて、とても綺麗に見える。

「綺麗だな……」

「そうね…」

「灰原のことを言ったんだけど？」

「なっ／＼なにいつてるのよ、工藤くん／＼」

「なあ、灰原…俺のことは名前で呼んでくれねーか？」

「…新一くん…」

「ありがとな、志保…」

「私の本名、覚えててくれたんだ…」

「あたりめえーだろ。愛している女の名前を忘れるわけないだろ？」

「新一くん…」

「志保…」

二人は見つめ合うと、顔を近づけ唇を重ねた。

「んっ／＼」

このままキスをしていたいが、観覧車が下までいったので、二人は名残惜しげに唇を離す。

「この続きはまた後でな。」

「うん／＼」

二人は観覧車をおりて、集合場所に向かった。既に蘭と和葉が待っていた。

「あれ、平次と一緒にやったんやないの？」

「あ、いや、それが…」

「もしかしてコナンくん…哀ちゃんとデート？」

「え〜！そうなん!？」

「ちがうよっ…僕は別に哀とデートしてたわけじゃないよ。なあ？」

「…コナンくんの言う通りよ…私たちは別にそんなんじゃない…」

二人とも名前で呼びあっている時点で、誤魔化しようがないと思うのだが…

「それじゃあ、どうして名前で呼びあってるのかな？」

「せやせや。恋人でもないかぎり、コナンちゃんと哀ちゃんが名前で呼びあうなんて変や？」

「…うっ…それは…」

絶妙なコンビで、コナンと哀を追い詰める、蘭と和葉。そこに服部がやって来た。

「こらーお前ら。二人して俺を置いていきおつて…そんなに二人でイチャイチャしたかったんか？」

服部がニヤケ顔でコナンと哀に尋ねる。

「平次、二人が付き合ってるってこと知ってたん？」

「まあな。この二人が付き合いだしたのはつい最近やけどな。」

「そうだったんだ。おめでとう、哀ちゃん、コナンくん。」

「ハハハ、こりゃあ、もう誤魔化せねえな…」

「そうね…」

その後、五人は毛利探偵事務所に帰っていった。

第八話・トロピカルランド（後書き）

関西弁って難しいですね…

どこか変なところがあるかもしれませんが、おおめに見てください…

第九話・お泊まり（前書き）

服部の扱いが少しひどいかも？

第九話・お泊まり

コナンたちはトロピカルランドから帰ってきたあと、蘭の家で食事をしていた。ちなみに小五郎は、事件の調査で朝からいない。

「どお？哀ちゃん。お口にあうかわからないけど…」

「とってもおいしいわ。」

哀は蘭に微笑む。

「ほんま、和葉とは大違いで、めっちゃうまいで。」

「どういう意味やそれ!」

「そのまんまの意味や。」

「なんやとー!」

たちまちに喧嘩を始める二人を蘭が止める。

「まあまあ、二人とも落ち着いて…」

(ハハハ、相変わらずだな…)

コナンが心の中で呆れていると、隣にいる哀が呟いた。

「まあ、たまにはいいんじゃない？こつこつ賑やかな食事も…」

「そうだな。」

その後も賑やかな食事は続いた。

「それで、哀ちゃんはこの後どうする？」

食事が終わり哀が一休みしていると、蘭が話しかけてきた。ちなみにコナンは、ソファの上で推理小説を読んでいる。服部と和葉は、向こうでまた何か言い合っている。

「どうするって…勿論帰るけど？」

「でも、哀ちゃんはもっとコナンくんと一緒に居たいでしょ？」

「わっ／＼／＼私は別に／＼」

「哀ちゃん、顔真っ赤よ？」

言われて哀は、さらに顔が真っ赤になる。

「よかったら泊まっていつて。」

「でも、迷惑がかかるし…」

「迷惑だなんてとんでもない。寧ろ泊まっていつてくれたほうが、コナンくんも喜ぶと思うし…それに、私も哀ちゃんともっと話した

いしね。」

「ありがとう…蘭さん。」

哀はなるべく笑顔で答えた。

「哀ちゃん、笑うと可愛いわね。コナンくんが、哀ちゃんのことを好きになった理由がわかった気がするな。」

「なっ／＼」

哀は可愛いと言われて、顔が赤くなる。そこに推理小説を読み終えたコナンがやってくる。

「どうした、哀？顔が赤いぞ？」

「な、何でもないわよ。それより私、今日ここに泊まるからね。」

「えっ、本当か？」

「ええ、本当よ。迷惑だったかしら？」

「とんでもない。すっげえ嬉しいよ。哀が泊まっていてくれて…」

「コナンくん…」

そのままお互いに見つめあう。もし、二人つきりだったら、確実にキスをしていただろう…

「二人とも、相変わらずラブラブね。」

「／／／／」

そんなこんなで、泊まっていくことになった哀は、とりあえず博士に電話することにした。

「もしもし、阿笠ですが……」

「あ、博士？私だけど……」

「おお、哀くんか。どうしたんじゃ？」

「実はね、今日は毛利探偵事務所に泊まることになったから……」

「そうか、わかったわい。それじゃあ、新一と仲良くするんじゃぞ？」

そう言っつて、電話が切れた。

まったく、博士ったら……

「志保、風呂が沸いたから先に入っていいぞ。」

「それじゃ、お先に入らせてもらっわよ。」

「おう」

「覗いちゃダメよ？新一くん。」

「の、覗かねーよ／／／」

「クスツ、冗談よ。」

哀は風呂場へと向かっていた。

「あいつ…俺をからかってやがるな…まっ、いつか。」

コナンはまた推理小説を読み始める。勿論さつき読んでいたのとは別の奴だが…

あれからしばらくして、ようやく全員風呂に入り終わった。

「なんや、今日は疲れたな〜」

和葉が呟いた。

「それなら、今日はもう寝ちゃっつ〜?」

「せやな。明日は俺らも大阪に帰るし…」

「私と和葉ちゃんは、私の部屋で寝るとして…服部くんはどつする?」

「俺らは、このボウズと、ちっこい姉ちゃんと一緒に寝るから心配せえへんでもええで」

その瞬間、コナンと哀はあからさまに、嫌な顔をする。

「なんや、おまえら…そんなに嫌がらんでもええやろ？」

「あなた、コナンくと哀ちゃんと一緒に寝たいのに、あなたがいたら邪魔やる！」

「せやったら、俺はどこ寝ればいいんや！」

服部がムスツとしながら答える。

「ソファで寝ればええやん。」

「お前、俺に風邪を引かせる気なんか？」

「大丈夫やろ。ほら、なんとかは風邪を引かないって言うやろ？」

「なんやと、コラ！」

「ハハ、また始まったよ…！」

「今のうちに行きましょ？」

「そうだな。」

コナンと哀は、コナンの部屋に行った。そして、当然だが鍵を閉める。

「これで、邪魔されねえな。」

「そうね…」

「ほら、志保もこっちに来いよ。そんなところに立っていたら、寒

いだろ？」

コナンは、ベッドの中に入り、哀を呼ぶ。哀もベッドに入る。

「志保…その…寒くないか？」

コナンが何を言いたいのかわかり、哀はコナンに抱きつく。

「そんなに遠回しに聞かなくても、私はいつでもあなたを受け入れるわよ…」

「志保…」

コナンも志保を抱き締める。

二人はお互いに背中に手をまわして、抱き合う。そして哀を組み敷くように、コナンが哀に跨がる。そして唇を重ねる。

「んっ／＼く、んっ／／」

「んっ／＼ふ／＼ん／／」

お互いに舌を絡めて、濃厚にキスをする。

「んっ／＼んっ／＼ふう／／」

「んっ／＼うん／＼く／／」

しばらくお互いに求めあっていたが、ここで哀がコナンの両肩を、そっと押し返す。コナンは哀から唇を離す。

「はあ、はあ／＼はあ、」

哀はコナンのキスの激しさに、思わず息があがってしまった。上気した顔と、少し潤んだ目を見て、コナンは哀のことを可愛いと感じた。

「はあ、はあ…ずいぶんと激しいキスね／＼」

「ごめん、苦しかったか？」

「謝ることなんてないわよ…それだけ私のことを愛してくれているってことが、伝わっているから／＼」

「ありがとな、志保。愛してる…」

「私も愛しているわ…新一。」

二人は、お互いに本名で呼びあい、そしてまた唇を重ね、その後抱き合ったまま眠りについた…

二人にとって、今までで一番熱い夜を過ごした…

その頃、服部はというと……

「ふえーくしょん！！なんで俺がソファで寝なきゃあかんのや…俺はお客やで？」

結局服部はソファで寝ることになり、一人で嘆いていた。

まだ夏ではないので、夜は冷え込む。

寒い夜を、一人で過ごす服部であった……

第九話・お泊まり（後書き）

やっぱり、服部平次というキャラはいじりやすいですね

ちょっと間抜けな感じがするけど、いざというときには、かっこよく決める…

だから、私は結構好きです。

いつか、服部も和葉ちゃんと幸せになれるといいですね (^o^)

第十話・お別れ（前書き）

この話で服部たちは大阪に帰ります。

第十話・お別れ

翌日。

目が覚めたコナンは、哀と密着しながら寝ていたので、ドキツとした。哀の寝息が、コナンの顔にあたるくらい、至近距離に哀の顔があり、その寝顔の可愛さに見とれてしまう。

志保って、こうしてよく見ると結構美人だな…

コナンは、志保に見惚れていた。

「ん。」

しばらくすると、志保が目を覚ました。

「おはよう。目が覚めたか？」

「…まだちょっと眠いわ…」

「それなら、もうちょっと寝ててもいいぞ？…どうせ今日は休日だし…」

ちなみにまだ二人は、抱き合っただまだ。

「…やっぱり、起きるわ。」

「そうか。」

コナンはベッドから起き上がるつもりだったが、哀に服の袖を引っ張られた。

「どうした?」

「朝の挨拶はしてくれないの?」

「あいさつならさつきしたじゃねえか?」

ここで哀がため息をつく。

そういえば彼…超がつくほど、恋愛には鈍感だったわね…

「まったく…恋人同士の朝の挨拶っていったら、あれに決まってるでしょ?」

「?」

コナンはまだわかってないらしい…

「もう…キスのことに決まってるでしょ?」

「えっ／＼」

「してくれないの?」

哀が上目遣いでコナンを見る。コナンはそんな哀の表情に、またドキッとした。

「そんなわけないだろ／＼」

コナンは哀に顔を近づけ、唇を重ねた。どれくらい、時間がたっただろうか…

二人は顔を離れた。

「愛してるわ、新一／＼／」

「俺も、愛してるよ志保／＼」

その後二人は着替えて、下の事務所におりていった。事務所のドアを開けると、既に服部が起きていて、コーヒーを飲んでいた。

「おお、工藤！それにちっこい姉ちゃんも、ずいぶん早起きなんやな？」

「そう言う服部こそ、早えーんじゃねえか？」

「ああ。本当はもっとゆっくり寝たかったんやけど、ソファの上やとけっこう寒くてな…それで起きて、コーヒーを飲んでいるんや。」

「それは、悪いことをしたわね…」

「そんなを気にすんなや！お前らの邪魔をするわけにはいかんしな。」

「服部…」

普段はお調子者だけど、なんだかんだいって、いい奴だよな…

コナンがそう思っていると、服部がニヤニヤしながらコナンに聞いてきた。

「ほんで？お前ら、どこまでいったんや？キスはしたんやろ？ひよつとしてその先まで……っぐ……」

その先までいったんか？と続けようとしたが、コナンに足の甲を踏まれて、続けることができなかった…

「なにするんや、このドアホー!!」

服部は痛みのみあまり、ぴよんぴよんとびまわっている。

「アホはお前だろ！変なこと聞くからだ！」

前言撤回…やっぱり、こいつはただのお調子者だな…

それからしばらくして、蘭と和葉が起きてきた。

「あれ、服部くんたちもう起きてたの？」

「まあな。ほんまは、もうちょい寝よ思たんやけどな…なんせ、ソファの上やから寒くてな。」

服部が和葉の方を見ながら、嫌味のように言う…

「そら、悪かったな平次…」

和葉は苦笑しながら、呟いた。

「それより、コナンくんも哀ちゃんも早起きでえらいなあ」

「うん。なんだか早くに目が覚めちゃったんだ。」

コナンが無邪気な笑顔で答えた。その様子を横で見ていた哀は、コナンの子供の演技に思わずクスツと笑ってしまう。

「それじゃ、私は朝御飯の準備するね。」

「ほんなら、アタシも手伝うよ蘭ちゃん。」

二人はさっそく朝食の準備を始めた…

「それにしても、相変わらず子供の振りが上手いのね。」

「もう慣れたぜ。幼児化してから、けっこう経つからな…」

「……………ごめんなさい…」

哀が突然謝ってきたので、コナンは慌てて哀に言葉をかける。

「あ、いや、別にそういう意味で言ったんじゃないから…だから志保が気にすることねえよ。」

「……………新……………」

哀はコナンの気遣いが嬉しく、思わずコナンに抱きついた。コナンも哀を抱き締める。お互い、背中に手を回し強く抱き締め合う…しばらくそのままの状態であった二人だったが…

「おまえら…仲がいいんはけっこうなんやけど、イチヤイチャするのは誰もいない所にしてくれへんか？」

服部が呆れながらジト目を向けて呟いた。慌ててコナンと哀は離れた。

「ま、まだいたのかよ、服部ノノ」

「本当ノノタイミングが悪いわよ…」

「そらあ、悪かったな。けど、残念やったな？イチヤイチャできなくて」

「イチヤイチャって、オメーなあ…」

コナンが服部にジト目を向けていると、キッチンから声がした。どうやら朝食ができたらしい…

「それで、和葉ちゃんたちはいつ大阪に帰るの？」

「アタシらは、午後の便に乗って大阪に帰る予定なんや。」

「そうなんだ。じゃあ私、空港まで見送りにいくね。」

「ほんま、ありがとな蘭ちゃん！」

「それじゃ、またね服部くん、和葉ちゃん。」

「うん。またね、蘭ちゃん。今度は蘭ちゃんたちが、大阪にきてね。そのときは、大阪案内してあげるさかい。」

「うん。楽しみにしてるね！」

「約束やで、蘭ちゃん。それより平次はどこにいったん？」

和葉は辺りをキョロキョロ見渡しながら言った。

「服部くんなら、あそこでコナンたちくんと、話しているよ。」

蘭が指をさした方を見ると、何やら話をしている三人がいた。

「ほんなら工藤、それにちっこい姉ちゃんも、ここでお別れやな。」

「どうでもいいけど、そのちっこい姉ちゃんていうのはやめてくれない？私、あなたのお姉ちゃんじゃないんだけど……」

「ええやないか。その方が言いやすいんやから。」

「ハハハ…こいつには何をいっても無駄だぜ？」

「そうみたいね…」

「なんやとー」

「へーじー。あんた何しとんの！そろそろ出発すんでー」

少し離れたところから、和葉の声がした。

「まったく、やかましい女やなあ…」

（オメエの方がやかましいと思うけど…）

（あなたの方がやかましいと思うけど…）

コナンと哀が、二人してそう思っていたことを、服部は知る術もなかった……

「行っちゃったわね、服部くんたち…」

「ああ、そうだな…」

「寂しい？」

「まさか。俺には志保がいるから寂しくなんてないぜ？」

「ありがとう。それよりこの後どうする？」

「そうだな…どっか二人で行かねえか？」

「いいわよ。」

「決まりだな。」

コナンは蘭のところに向かっていくと、これから哀と出掛けてくると
いうことを伝えた。

そして二人は出掛けていった。

その後ろ姿を見ていた蘭は、二人を温かい目で見ていた。

（本当にあの二人仲が良いわね。）

蘭は心の中で呟くと、家に帰っていった。

第十話・お別れ（後書き）

次回はコナンと哀について、色々書くつもりです。

第十一話・デート（前書き）

久しぶりに、あの三人が登場！？
…

第十一話・デート

蘭と別れた後、コナンと哀は歩きながら、これからどこに行くかを考えていた。

「それで、これからどこに行くの？」

隣に歩いているコナンに尋ねた。

「そうだな…デパートに行かねえか？なんか欲しいものがあつたら買ってやるぞ？」

「買ってやるぞつて…あなたお金持っているの？」

「それなら心配すんな。父さんのカードがあるから。」

コナンが哀にカードを見せながら、笑顔で答える。

「小学生がカードなんて使つたら、怪しまれると思うんだけど…」

「大丈夫だろ。怪しまれたら、適当に誤魔化せばいいだろ…ほら、早く行こうぜ。」

「あつ…」

コナンが哀の手を繋いで、ゆっくりと歩き出したので、哀も遅れないうように歩き出す。

「そつといえば、志保とデートするのは、これで二度目だな。」

「そうね。それだったら、手を繋ぐよりこっちの方がいいんじゃない?」

哀がコナンから繋いでいた手を離すと、代わりに腕を絡める。

「あっ／＼／」

「このほうが、恋人って感じでしょ?」

哀は、普段見せることのない、極上の笑顔でコナンに言った。勿論、その笑顔を見たコナンは、さらに赤くなる。

「志保、マジで可愛すぎ／＼その笑顔は反則だぜ／＼」

「そ、そんなことないわよ／＼」

哀も、思わず赤くなってしまい、そっぽを向きながら答えた。勿論それは、照れ隠しである。コナンと哀は、お互い赤くなりながら、デパートに向かった。勿論腕は絡めたままで…

デパートに着いた二人は、最初に洋服売り場に行くことにした。そして、その姿を目撃していた人物たちがいた。

「おい、あれコナンと灰原じゃねーか?」

「本当ですね…しかもあの二人、腕を組んで歩いていますよ!」

「…コナンくん、哀ちゃん…」

その人物とは、元太・光彦・歩美の三人だった。なぜこの三人がこ

ここにいるかというと、新しいゲームソフトが発売されたので、デパートのゲーム売り場を見に来ていたからだ。元太だけは、食品売り場にある試食品も目当てだったのだが……
そして家に帰ろうとしていたところ、偶然コナンと哀を見かけたわけである。

「気になりますね、あの二人……」

「うん……コナンくと哀ちゃん、腕組んでたし……やっぱり付き合っているのかな？」

歩美は、少し寂しそうな顔で呟いた。

「ここはやっぱり、確かめてみましょう。」

「確かめるって……どうすんだ？」

「決まってるじゃないですか！あの二人のあとを、こっそりつけるんですよ。」

「なんだかそれ、面白そうだね！それに歩美も、コナンくと哀ちゃんの関係が気になるし……」

歩美は、光彦の意見に賛成した。

「でもそれ、ストーカーなんじゃねーか？」

元太はどうやら反対のようだ。もともと恋愛事にはさほど関心のない元太には、コナンと哀の仲が多少気になるにしても、光彦や歩美ほどではないらしい。

「ストーカーとは人聞きの悪い……僕たちは、あの二人を調査する

だけです。少年探偵団なら、気になったことは徹底的に調査する……断じてストーカーなどではありません！」

「そうだよ、元太くん！ストーカーじゃなくて、調査をするだけなんだから問題ないよ。」

「わ、わかったよ……」

二人の気迫にたじろいた元太は、そう答えるしかなかった。

「そうと決まったら、さっそく尾行をしましょう。」

三人は、こっそりとコナンと哀のあとをつけた。

そして、その二人は今……

「ねえ……今、誰かの視線を感じなかった？」

「いや……特に感じなかったけど……ひょっとして、組織の奴らか！」

コナンが辺りを見渡しながら、答えた。

「心配しないで。彼らの気配ではないから。それに、私の気のせいかもしれないし……」

そう言って、コナンと哀は、再び歩き出した。まさかその気配が、光彦たちだとはまだ気づいていない二人であった……

第十一話・デート（後書き）

今回はコナンたちに尾行が!?!?
…

…バレるかどうかは、次回のお楽しみです。
（笑）

第十二話・尾行（前書き）

コナンたちを尾行をしている三人が、笑えるんじゃないかなと思います。（笑）

第十二話・尾行

洋服売り場に着いたコナンと哀は、さっそく洋服を見て回ることにした。

「志保。なんか欲しい服があったら、遠慮しないで言っていていいぞ。」

「そうね…それじゃあ、新一が私に似合いそうな服を選んでくれる？」

「ああ、任せてくれ。」

コナンは、哀に似合いそうな服がないか、探し回っている。しばらくして、コナンは手にいくつか服を持って、哀の所に戻ってきた。

「これなんか、いいんじゃないかねえか？」

そう言っただけで渡してきたのは、ピンクのワンピース。彼がその服を選んだ理由は、普段黒などの暗い色の服を着ている私を見て、たまには明るい色の服も着てみたらどうだとのことらしい。

「私には、似合わないんじゃない？」

コナンから洋服を受け取りながら、哀が呟いた。

「そんなことねえって。志保だったら絶対似合うぜ？」

コナンは笑顔で言いながら、哀に試着するように促す。哀は試着室に入り、さっそくその服を着てみた。哀は、鏡に映る自分を見ると、普段着ることのないような服を着ていて少し顔が赤くなった。そして試着室のカーテンを開けて、コナンに自分の姿を見せる。

「ど、どう／＼似合ってる？／＼」

哀が照れながら、コナンに聞いた。そしてコナンはというと…

「あっ／＼／…」

口をぽかんと開けて、コナンは哀の姿に目が釘付けになっている。

「…やっぱり、似合わないかしら？」

「いや、そんなことねあって／＼すっげえ、可愛いよ／＼」

「あ、ありがとう／＼」

哀はコナンに可愛いと言ってもらえて、とても嬉しく思ったが、同時に恥ずかしくもあり、少し俯きながらお礼を言った。

その様子を見ていた光彦・歩美・元太は、コナンと哀から目が離せないでいた。

光彦は、哀のワンピース姿にいちころになってしまった。

「は、灰原さん／＼あんな服も着るんですね／＼とっても可愛いです！／＼」

光彦の顔は、火が出そうなくらいに真っ赤だ。

「うん、そうだね。いつもはクールな哀ちゃんだけど、なんか今日の哀ちゃんはすごく可愛いね！」

同性の歩美も、思わず見とれてしまうくらいの可愛さだ。そして、恋愛事にたいして関心のない元太も、哀に見とれていた。

「灰原って、ああ言う格好もするんだな／＼」

「そうですね。それにしても、羨ましいですね…コナンくんは。」

「やっぱりあの二人、付き合ってたんじゃないか？」

「まだ決まったわけじゃありませんっ！！」「まだ決まったわけじゃないもんっ！！」

二人が凄い勢いで、反論した。

「わ、わかったよ…」

ここで、コナンと哀の方を見てみると、コナンが、先程哀が着ていた服に加えて、他にもいくつか洋服を買っていた。

「なんだか悪いわね…こんなにたくさん買ってもらっちゃって…」

ざっと5着以上はあるだろうか…

哀は、コナンが最初に選んでくれた1着だけを買ってもらったつもりだったが、コナンが他にも買ってあげるぞと言ったので、お言葉に

甘えることにした。

「気にすんなって。俺も志保にいろんな服を着てもらいたかったし。今度また着てみてくれよな？」

「勿論よ。大切にするわね。」

二人はまた腕を組んで、歩き出した。

「そろそろ、お昼にしねえか？」

時計を見ると、12時を少し過ぎたくらいだった。

「そういえば、お腹も空いてきたわね。」

「じゃあ、決まりだな。」

二人はレストランに向かっていった。その後を、歩美・元太・光彦の三人は追いかける。二人にはれないように、物陰に隠れながら追う姿は、周りから見ればかなり怪しく見える……

「あつ、レストランに入っていきましたよ。どうします？」

光彦が小声で呟いた。

「決まってるんだろ！俺たちもいこうぜ。もしかしたら、あの二人が何かうまいもんご馳走してくれるかもしれないし……」

どんな想像をしているのか、元太の口からはヨダレが垂れそうだ。

「元太くん。私たちは二人のことを尾行してるんだよ？だから、ご馳走は食べれないと思うよ？」

「歩美ちゃんの言う通りですよ。僕たちの目的を忘れていませんか？」

「忘れてなんかいないよ！ただ、もしかしたらなんか食えるかもしんねーだろ？」

相変わらず、どこに行っても食べることにしかないのだろうか？光彦が密かに心の中で思っていた。

「とにかく、僕たちも入りましょう。」

光彦が、コナンたちの入ったレストランに入ってしまった。その後、歩美と元太も入ってしまった…

第十二話・尾行（後書き）

いまだコナンたちに尾行がバレていない元太たちですが……

たぶん次回では、バレると思います……

第十三話・大切な存在（前書き）

コナンたちと、少年探偵団の友情物語みたいな、内容です。たぶん
：

第十三話・大切な存在

「それにしても、やっぱり小学生二人だけで入ると目立つわね…」

「まあ、そんなに気にすることないんじゃないかねえか？」

コナンと哀は、注文した料理を食べながら話している。

最初に店に入ったとき、当たり前だが「君たち二人だけかい？」と店員に聞かれた。

「それよりほら志保、アーンして。」

コナンが、哀の口に料理を運びながら言った。

「ちよつと、新一ノノ周りが見ているわよノノ」

「大丈夫だって。それに、前も同じことしただろ？」

「もうノノしようがないわねノノ」

哀は照れながら、アーンをして料理を食べる。口ではそう言っているが、勿論照れ隠しである。コナンも、最近はそれが照れ隠しかどうか、すぐにわかるようになった。

「ほら、新一もアーンしてノノ」

「お、おうノノ」

自分が哀に食べさせるときは、さほど照れたりしないコナンでも、食べさせてもらうときには、やっぱり少し恥ずかしい気持ちがあり、赤くなってしまう。

「どっ、おいしい?」

哀が、これまた可愛い顔でコナンに聞いてくる。

「相変わらず可愛い笑顔だなノノそれにしても、本当に志保は、よく笑うようになったよな。」

「私が、こんなに笑えるようになったのは新一のおかげよノノ新一のことを愛することができて、そして愛してもらえてノノ…新一が居てくれるから、私はこんなに変わることができたのよ?だから、新一にはとても感謝してるの。私に生きる希望をくれて、そして私を愛してくれて…」

哀の話を聞いたコナンは、自分のことをそんなふうに想ってくれていることを知り、素直に嬉しいと思った。

「俺の方こそ…志保が居てくれたから、俺は小学生の姿になっても、ヤケにならないで居られたんだと思うよ…俺のことを一番に理解してくれて、そして俺のことを愛してくれて…俺、志保と出会って本当に良かったよ。これからも、俺は志保のことをずっと愛し続けるからな?」

哀は、コナンの言葉に涙が溢れそうになったが、お店の中だったのでそれを堪えた。

「…私も…新一のこと、これからもずっと愛し続けるからね…」

「ああ。これからもよろしくな。」

「ええ。」

二人はまた、お互いの絆を強く、深いものにすることができた。

一方、光彦たちはと言うと…

「あの二人、お互いに料理を食べさせあっていましたね…」

「うん。そうだね…それに、なんかコナンさんと哀ちゃん、いい雰囲気だね…」

光彦と歩美が、二人の様子について話していた。そして、元太はと言うと……

「あの二人、旨そうなもん食ってるな。なんだか俺、腹減ってきたぜ…」

完全に本来の目的を忘れて、食べ物のことを考えていた。光彦と歩美は、もはや呆れるしかなかった。

「それにしても……やっぱりあの二人は付き合っているんでしょうか？」

さすがの光彦も、今までのコナンと哀の様子を見て、そう思わざるをえなかった…

「なあ、いつそのことあの二人に聞けばいいんじゃないかねーか？その方

が楽しよ…」

「ちょ、直接聞くんですか？」

さすがに、直接は聞きにくいですよと言った光彦だったが、歩美は…

「元太くんの言う通りだよ…やっぱりここは、本人たちに直接聞くべきだよ。あの二人だったら、本当のこと話してくれそうだし…それに、例えあの二人が付き合っていたとしても、歩美あの二人を応援してあげたいの…」コナンくんも哀ちゃんも、大切な友達だから。

「

「そうですね…あの二人は、僕たちの大切な友達なんですから、いつまでも二人のあとを、こっそりつけるのはよくありませんね。」

元太と光彦と歩美は、コナンと哀に、直接聞く決心をした。

例え二人が付き合っていたとしても、大切な友達に変わりはないから…

そう心の中で思いながら、二人のもとに向かった。

食事も終わり、コナンと哀が一息ついていると、そこに光彦たちがやってきた。

「お、お前ら…どっしょしてここにいんだよ？」

「たまたま、僕たちもこのデパートに来ていたんですよ。」

「そしたら、偶然コナンさんと哀ちゃんを見かけて…」

「こっそり、あとをつけてたんだよ。」

三人が、コナンと哀に説明した。

「こ、こっそりって…あなたたち、どこから見てたの？」

「うーんとねー……コナンさんと哀ちゃんが、洋服売り場に行くところからだよ。」

「勿論、レストランに入ったところもです。」

「お前らが、お互いに料理を食べさせあつてるところも、バッチシ見たぞ！」

「じゃあ、私を感じた視線って…」

「こいつらだったみてえだな…」

コナンと哀は、三人に聞こえないように、小声で呟いた。

「それで、単刀直入に聞きますが…お二人は付き合っているのですか？」

「付き合っているのですか？って、言われても…」

「隠さないで本当のこと言って、コナンくん、哀ちゃん…！」

「僕たちは、本当のことが知りたいんです。」

光彦と歩美の様子を見て、コナンと哀は本当のことを話すことにした。

「わかったわ…本当のことを話すわ。」

「その前に、とりあえず場所を変えねえか？」

そうですねと光彦が言い、コナンたちは場所を変えることにした。

「それで、さっきの話を続きなんですが…」光彦が、コナンたちに尋ねた。

コナンたちはデパートから出て、近くの公園で話すことにした。

「ああ、俺と灰原は付き合っているよ。」

「やっぱり、そうだったんだ。」

「ごめんなさい…江戸川くんのことを、恋愛対象として見てないって、あなたに言ったのに…」

哀が申し訳なさそうに、謝った。

「ううん。哀ちゃんが謝ることなんてないよ。人の気持ちは、変わるものだからね。それに、哀ちゃんとコナンくんだったら、すっこ

くお似合いだし。」

「ありがとう、吉田さん……」

「ありがとな、歩美……」

コナンと哀は、心から感謝した。

「コナンくん、灰原さん。本当のことを話してくれて、ありがとうございます。大事にしてくださいよ。」

「わぁーてるよ。ありがとな、光彦。」

「ありがとう。円谷くん。」

「よしってくださいよ。お礼を言われるようなことはしてませんから……」

光彦は照れながら、言った。

「なにはともあれ、これで一件落着だな！」

今まで黙っていた元太が、コナンたちに言った。

「元太くん、居たんですか？」

「なんだと！光彦！」

自分の存在を忘れられて、元太は怒っている。

「まあまあ、元太くん落ち着いて…」

歩美が、苦笑しながら元太を宥める。

その様子を見ていたコナンと哀は、思わず笑みがこぼれた。

「みんな、良い子たちね…」

「ああ、そうだな。あいつらは、俺たちにとってかけがえのない存在だよ。」

「そうね。あの子達と出会えて、本当に良かったわ。」

コナンと哀は、歩美・光彦・元太の方を見て呟いた。その表情は、三人を温かく見守っているように見えた…

第十三話・大切な存在（後書き）

コナンたちが尾行に気がつくのではなく、光彦たちから、尾行をばらすというふうになりました。

第十四話・お誕生日（前編）

キンコーンカーンコン。

「それではみなさん、明日からはゴールデンウィークです。どこかへ遊びに出かける人も多いと思いますが、くれぐれも、怪我や事故のないように、気をつけてくださいね。」

帝丹小学校2ーB組担任の、小林澄子が、生徒たちに言った。生徒たちは、元気よく返事をした。

「……はい。」

コナンと哀だけは、普段と変わらない態度でいた。

「それではみなさん。ゴールデンウィーク明けにまた会いましょう。」

さようならの挨拶をして、生徒たちは帰路についた。

「ねえねえ、5月4日ってコナンの誕生日だよ。みんなでコナンのお誕生日会をやらない？」

歩美がみんなに提案した。

「いいですね、やりましょー！」

「そうだな。食いモンも、いっぱい食えるかしんねーしな!」

「哀ちゃんも、コナンくんのお誕生日会やるでしょ?」

歩美が、哀の方を見て尋ねる。

「ええ、もちろんよ。(新一って、5月4日が誕生日だったのね…初めて知ったわ。博士ったら、何も教えてくれないんだから…)

心の中でいろいろ思った哀だが、表情には出さずに答えた。ちなみに、今この場にはコナンはいない。今日発売の推理小説を買ったために、本屋へと向かっていった。

「それじゃあ決まりだね!場所は博士の家でもいい?哀ちゃん」

「いいわよ。博士にも伝えとくわね。」

いつもの曲がり角で、哀は歩美たちと別れた。いつもは一緒のコナンも、今日はいないので一人で帰ることになる。

(まったく…相変わらずの推理好きね…)

心の中で呟きながら、哀は家に帰っていった。

「ただいま。」

哀は玄関を開けて、博士に言った。

「おかえり。哀くん。」

奥から博士が歩いてきながら答えた。

哀は靴を脱いで、リビングへと向かう。

「博士。今度の5月4日、あの子達とここで、新一の誕生日会をやることになったから…」

「おお、そういえばもうすぐ新一の誕生日じゃったな。」

博士が、カレンダーに目を通しながら答えた。

「博士つたら、何も教えてくれないのね…あの子達に聞いて、初めて知ったわ。」

哀がジト目で博士を見る。

「ハハハ、いやあスマンのう…すっかり言い忘れておったわい…」

「まあ、いいけどね…」

哀はキッチンに向かって、コーヒーを淹れた。

「それより、新一の誕生日プレゼントはもう決めたのか？」

博士もコーヒーを淹れて、リビングに戻っていく哀に尋ねた。

「まだ決めてないわ。彼の誕生日を知ったのは今日だし、それに何

をプレゼントすればいいのか、わからないし…」

哀はコーヒーを一口飲むと、博士にそう答えた。

「わしは何でもいいと思うがのう。哀くんの気持ちがかもっていれば、新一はどんなプレゼントでも喜ぶと思うぞい？」

「そうだといいけど。」

哀はファッション雑誌を手に取り、読み始めた。

(本当に、何にしようかしら…彼の誕生日プレゼント…)

「ただいま。」

コナンは探偵事務所のドアを開けて、子供らしく言った。

「あ、お帰りコナンくん」

蘭は笑顔で答えた。

コナンはさっそく買ってきた推理小説を読み始めた。

しばらくすると、事務所の机に顔を伏せて寝ていた小五郎が起き出し、テレビをつけた。

「やっと始まったぞ。」

小五郎は、テレビに食い入るような勢いで言った。

「ゴーゴーヨーコちゃん」

(ハハハ…いい歳して、何やってんだか、このオヤジは…)

コナンは呆れていた。そして、ここでは小五郎がうるさすぎて、集中して本を読むことができないので、別の部屋に移動した。

「もーお父さん！みつともないからやめてよね！！そんなんだから、お母さんに愛想つかされちゃうのよ！」

蘭が、すごい剣幕で小五郎に言った。

「別にいいじゃねーか。普段仕事でストレスが溜まってんだからよー…」

(その分、たくさん寝かせてやってんだろ…)

コナンがボソツと呟いた。ふとカレンダーを見ると、5月4日に印がついていた。

(なんだ、この印…なんかあったっけ、この日…)

相変わらず、推理力は抜群だが、自分の誕生日を忘れているという、なんとも不思議なコナンだった。

「ねえー蘭姉ちゃん。5月4日に印がついているけど、この日何かあるの？」

小五郎を叱り終えて、戻ってきた蘭に、コナンは尋ねた。

「えっ、コナンくん、この日がなんの日かわからないの？」

言われて、いろいろ考えたコナンだが、思い付くことがないので、『わからない』と蘭に答えた。

「本当にわからないんだ…」

蘭は少し呆れ気味に言った。普通自分の誕生日を忘れるかしら？と疑問に思った。

「ねえ、教えてよ。この日がなんなのか。」

「内緒よ。その日がくれば、きっとわかると思うわよ。」

「？」

コナンは首を傾げた。

(いったい何の日なんだ?)

コナンはしばらく考え込んでいた。

その頃、阿笠邸のチャイムが鳴り、中から博士が出てきた。そして博士がその人物を見て言った。

「おお、いつ日本に来たんじゃ？」

博士はその人物に尋ねた……

第十四話・お誕生日（前編）（後書き）

博士の家を訪ねた人物とは、いったい誰なのか？大体想像がつくと
思います…

次回その人物の正体が！

第十五話・お誕生日（中編）（前書き）

あまり、うまく話がまとまっていないかもしれません…

第十五話・お誕生日（中編）

「おお、いつ日本に来たんじゃ？」

博士は目の前の人物を見て尋ねた。

「ついさっきなの。空港から直接ここにきたのよ。」

「しかし、久しく会っておらんかったが、相変わらず有希子さんは美人じゃのう。」

「まあ、やっぱりそうかしら？」

博士を訪ねてきた人物とは、工藤有希子のことだった。

「そう言う博士は、ちょっと痩せたんじゃない？」

有希子は、博士のお腹をみて言った。

「ああ。近頃は、哀くんが高カロリーの物は食べさせてくれんでお。いつも腹ペコじゃよ…おまけに、毎日ジョギングをさせられるしのう…」

「へえ〜。あの茶髪の女の子、哀ちゃんって言ったわよね。今、家に居るの？」

有希子が、博士に尋ねた。

「ああ。哀くんなら、家に居るぞい。とりあえず立ち話もなんじやから、あがったらどうじゃ?」

「それじゃあ、お邪魔します」

「それにしても、新一ってどんなものをプレゼントしたら、喜んでくれるのかしら…考えてみたら私…彼の好みとか、あまり知らないわね…本人に直接聞くわけにもいかないし…困ったわね。」

哀は、コナンの誕生日プレゼントを何にするか考えていた。なので、背後からこっそり近づいてくる有希子の気配に、気がつかなかった。

「あ〜いちゃん」

「うひゃあ!?!」

あれこれ考えていたところに、いきなり両肩を掴まれ、哀は思わず変な声をだしてしまった。

「あ、あなたは…ゆ、有希子さん!?!」

哀は、振り返った先にいた人物を見て、驚きながら言った。

「お久しぶりね 哀ちゃん。」

「どうしてここに居るんですか?」

「実はね、もうすぐ新ちゃんの誕生日でしょ？それで、最愛の息子の誕生日を祝いに来たってわけ」

有希子は満面の笑顔で答えた。

「そうだったんですか…」

「それより、哀ちゃんは新ちゃんに誕生日プレゼントをあげるの？」

「えーと、まあ、その一応…」

実際には、まだ何をあげるのかは、まったく決まっていない。それよりも前に、哀は新一と、恋人として付き合っているということをも、まだ有希子に言っていない。

「ひょっとして哀ちゃん…新ちゃんに、何をプレゼントしたら喜んでくれるのか、悩んでいたんじゃない？」

哀は凶星をさされ、言葉がでなくなった。

「その様子は凶星みたいね」

「どうしてわかったんですか？私、そんな素振りしてませんでしたけど…」

普段敬語は使わず、相手が大人だろうとなんだらうと、普通に話している哀だが、なぜか有希子には敬語で話している。

「理由はいくつがあるわよ　ひとつ目は、私が最初ここにきて、哀

ちゃんにこつそり近づいたけど、哀ちゃんは私の気配に気がつかなかった…普段の哀ちゃんなら、すぐに気づくと思うのに、今日は気づかなかった。これは、何かを考えていた証拠。それも、周りの音が耳にまったく入らないくらいにね」

有希子は、まるで探偵のように答えた。

「…それだけですか？」

「それと、もうひとつ…女の子が、男の子のためにそこまで真剣に考えているってことは……哀ちゃん、ひょっとして新ちゃんに恋してない？」

哀は思わず頬を赤くした。

「……………」

「やっぱり私の勘は当たったわけね　それで、どこまでいったの？　もうコクっちゃったりしたの？」

哀は、有希子に質問攻めされた。

「はい、一応……」

哀は有希子に、新一と両想いになったことを、最初からくわしく話した。

「へえ、よかったわね　哀ちゃん。新ちゃんと両想いになれて」

「ありがとうございます／＼」

「そうとわかったら、哀ちゃんにいろいろと教えてあげるわ 新ちやんの好みとかをね」

「ほ、本当ですか？」

それは願ってもないチャンスだ。本人に聞くのが一番ベストなのかもしれないが、やはり直接聞くのは恥ずかしいという思いがあり、聞くことができなかった。しかし、本人に聞くことはできなくても、彼の母親だったら、息子の好みとかはよく知っているだろう。

「それじゃあ、まずは新ちゃん好きな食べ物からね 新ちゃんはね、レモンパイが大好物なの。それも、味にはすごくうるさくてね。なかなか、美味しいって言わせることができないのよ」

哀は、有希子の話を真剣に聞いていた。一言も聞き逃すまいと、耳を傾けていた。そして、聞いたことを全て、頭の中に記憶していた。

「よければ、哀ちゃんにもレモンパイの作り方を教えてあげるわよ」

「本当ですか！？是非お願いします。」

哀は頭の中で、新一の誕生日プレゼントにレモンパイを作って、食べてもらうことにした。それなら、新一も喜んでくれるだろう。

「それじゃあ、さっそく材料を買いに行きましょう」

「はい。」

有希子と哀は、レモンパイの材料を買いに出かけていった。

「はて？二人ともどこへ行ったのかの……」

新発明のメカを、二人に見てもらおうと思い、研究室へ発明品を取りに行った博士だったが、発明品をどこにしまったか忘れてしまい、ようやく見つけてリビングに戻ってきたが、既に二人の姿はなく、一人取り残された博士であった……

第十五話・お誕生日（中編）（後書き）

今回はグダグタになっちゃいました…

細かいところとか、色々変なところがあるかもしれませんが、勘弁してください……

第十六話・お誕生日（後編）（前書き）

誕生日編完結です。

第十六話・お誕生日（後編）

5月4日。

いよいよ今日が、工藤新一こと、江戸川コナンの誕生日だ。

哀は今日のために、有希子からレモンパイの作り方を教わり、何度も作り直しをしながらも、なんとか納得のいくものを作ることができた。

誕生日プレゼントも、ちゃんと買ったし…

準備オーケーね。そろそろかしら…

哀が、阿笠邸のリビングで考えていると、チャイムがなった。

哀はモニターで相手を確認した後、玄関のドアを開けた。

「そろそろ来る頃だと思ってたわ…」

哀は例の三人組を見て言った。

「それじゃあ、さっそく飾りつけをやっちゃいませう。」

「…ったく、一体何のようなんだ？博士のやつ…」

ブツブツと文句を言っているのは、江戸川コナンだ。

なぜ、彼がブツブツ言っているのかというと、つい先ほど博士から電話が掛かってきて、『今すぐ、ウチにきてくれんか？』とそれだけ言うなり、電話を切られてしまった。

阿笠邸の前に来たコナンは、チャイムを鳴らした。

「おーい、博士、来たぞ。」

しかし、中から反応はない。

「おいおい…まさか人を呼んどいて、留守だって言うんじゃねえだろうな…」

コナンはためしに、ドアノブに手をかけてドアを開けてみた。

「開いてんじゃねーか…しかし、真っ暗だな…」

コナンは靴をぬいで、奥に進んでいった。

パンツ！パパンツ！パンツツ！

「な、なんだあ！？」

突然部屋の電気がつき、クラッカーが鳴った。

「」「お誕生日、おめでとう」「」「」

歩美・光彦・元太の三人は、声を揃えながら言った。

「さあ、江戸川くん。こっちに来て。」

哀は、コナンに手招きをしながら言った。

「誕生日って……そうか！今日は俺の誕生日か。」

「やっぱり、歩美たちの思った通り、コナンくん、自分の誕生日忘れてたね。」

「普通は、自分の誕生日を忘れないと思いますけどね……」

「オレでも忘れねーぞ。案外ドジなんだなオメー。」

「わ、悪かったな……」

コナンは少し照れながら言った。

「コナンちゃん」

「うわあっ！」

いきなり、有希子が後ろから抱きついてきた。どうやら今まで隠れていたみたいだ。

「ちよっ……く、苦しいって……」

有希子が、あまりにも思いっきり抱き締めてくるもんなので、思わ

ず呻き声みたいなのを出してしまった。

その様子を見ていた他のみんなは、それぞれ口々に何か言っていた。

「相変わらず仲が良いね。コナンちゃんと、コナンくんのお母さん。」

「そうですね。なんだかんだいって、コナンくん、お母さんに甘えている感じがしますね…」

「マザコンなんじゃねーか？」

「オレは別に甘えてなんかいないし、それにこの人はオレの母さんじゃなくて、親戚のオバサン…」

コナンは途中で言葉を切った。正しくは、言葉を切らざるを得なかった。有希子が、ものすごい形相で睨んできたからだ。

「いやっ…オレの母さんじゃなくて、親戚のお姉さんだって…」

コナンは、お姉さんと言い換えた。お姉さんという言葉に、機嫌を良くした有希子であったのは言うまでもない。

その後は、ケーキを食べたり、トランプをしたりと、色々楽しんだ。

そして、いよいよ誕生日プレゼントを送ることになった。

「コナンくん！歩美からは、これをあげるね」

そう言って歩美がくれたのは、マグカップだった。

「僕からは、これを差し上げます。」

光彦がくれたのは、シャープペンシルなどの、文房具一式だ。

「オレからは、これをプレゼントするぜ！」

元太がくれたのは、食べ物だった。元太らしいといえば、元太らしい……

「江戸川くん。私からは、これをプレゼントするわ。」

哀は、コナンにキーホルダーを渡した。勿論、これとは別にちゃんとしたプレゼントを用意している。

「私からはこれよ。」

有希子がくれたのは、推理小説だった。

「ワシからはこれじゃ。」

博士がくれたのは、自動で家の掃除をしてくれるという発明品だった。コナンは、苦笑しながらそれを受け取った。

(…本当に掃除できんのか?)

博士の発明品を、いまいち信用していないコナンであった……

「みんな、ありがとうな。俺のために、色々してくれて……」

コナンはみんなにお礼を言った。

光彦たちは、コナンにお礼を言われて、照れくさそうにしていた。

あれから元太たちは帰っていった。博士と有希子は、二人の邪魔をしたら悪いと行って、どこかへ出掛けていった。

「志保：今日は本当にありがとうな。」

「お礼なんていいのよ。それより、新一に食べてもらいたいものがあるんだけど…」

そういつて、哀は新一の前にレモンパイを出した。

「これは、レモンパイか。志保が作ったのか？」

「ええ、そうよ。新一がレモンパイが好きだって聞いたから…」

「ありがとな、志保。俺マジで嬉しいよ。」

コナンは、笑顔で言った。

「あつ／＼」

哀は、思わず新一の顔に、見とれてしまった。

「どづかしたか？」

「い、いえ／＼何でもないわ／＼それより、食べてみて。お口に合うかは、わからないけど…」

コナンは、さっそくレモンパイを食べてみた。

「どう?」

「ああ、めっちゃ旨いよ!さすがは、志保だな。」

「喜んでもらえて良かったわ。」

その後もコナンは、レモンパイを食べ続けた。

しかし、途中で手を止めて食べるのを止めた。

「どうしたの?」

「いや、その…志保が食べさせてくんねえか?」

「えっ／＼／」

哀は予想外の言葉に驚いた。

「やっぱり、ダメか?」

コナンが上目遣いで聞いてきた。

「ダメなわけじゃない／＼ほら、アーンして／」

哀は照れながらも、コナンのお願いを聞いた。普段、誰かに甘えたりしないコナンが自分にだけは甘えてきてくれて、それが哀には嬉しかった。

その後も、哀はコナンに食べさせていた。時々哀も、コナンに食べさせてもらっていた。

「今日は、最高の日だったぜ。」

「それは良かったわ。」

「なあ、志保。もうひとつ、誕生日プレゼントをちょうだい。」

コナンはそう言って、哀の頬に両手を優しく添えて、顔を近づけた。

哀はゆっくりと目を瞑り、コナンを待つ。

そして二人は口付けをした。

最初は、唇と唇が触れるだけの軽いキスだったが、徐々に深いものになっていく。

コナンは、哀の口に舌を入れようとすると哀は入れやすいように、口を少し開けた。

「んっ、んふ／＼んんっ／／」

「んっ／＼く／＼んふっ／／」

お互いに、激しく舌を絡ませ合う。二人はしばらくキスを続けていた。そして、ゆっくりと唇を離すと、二人の唾液が混じり、銀の糸を引いていた。

「志保、愛してるよ／＼」

「私も愛しているわ／＼それと、お誕生日おめでとう。新一／＼」

哀は改めて、笑顔でコナンに言った。その後も二人は、仲良く過ごした。

第十六話・お誕生日（後編）（後書き）

少し、グダグダになってしまいましたが、これで誕生日編は終わりです。

次回もお楽しみに〇（＾－＾）〇

第十七話・気配（前書き）

急いで書いたので、誤字・脱字があったりするかもしれませんが…

第十七話・気配

人々も寝静まったであろう、深夜：

一台の黒い車が道路脇に停まっていた。その黒い車は、不気味なほどに夜の暗さとマッチしていた。その黒い車……：ポルシェ356Aに乗っている二人の黒づくめの男がいた……：

運転席に座っているのは、夜中だというのに、サングラスをかけている……：コードネーム、ウオツカ。

「……それで、例の女の行方はわかったんですかい兄貴？」

ウオツカは助手席に座っている、同じく全身黒づくめの男……：ジンに尋ねた。

「いや、まだだ……」

ジンは煙草に火をつけながら答えた。

「そういえば、バーボンの奴も調べてましたね……：シェリーの行方を……」

「フン……：奴は秘密主義者だからな。たとえシェリーの居場所を突き止めたとしても、俺たちに報告したりはしねえだろうな……」

何れにしても、裏切り者のシェリーは俺が必ず見つけ出して、処刑してやるさ……」

「ずいぶん、あの女に入れ込んでやすね兄貴……：あの女となんかあったんですかい？」

ウォツカは、車のエンジンをかけながら聞いた。

「フン…なんにもねえさ。裏切り者は、必ず始末する…それが組織の掟だ。」

「そうでやしたね…」

ウォツカは車を走らせ、ポルシェは漆黒の闇にへと消えていった……

コナンの誕生日から、数週間が経った。

この日、哀は家で特にすることもなく、ファッション雑誌を読んでいた。

博士は、急な用事で出掛けている。なので家には、哀一人しかいない……

「ふあゝあ…それにしても暇ね…この時間は、見たい番組もないわね……」

哀は軽く欠伸をしながら、テレビのチャンネルをまわして呟いた。

ふと時計を見てみると、もつすぐお昼の時間になるところだ。

「そろそろ、お昼ね……」

哀はソファから立ち上がり、冷蔵庫の中を見た。

「なんにもないわね……」

冷蔵庫の中を見たが、なにも食べるものがなく、仕方がないので哀は、近くのスーパーに買いに行くことにした。

スーパーで一通り食材を買った哀は、人通りの少ない道を歩いていた。こっちの道の方が、大通りを歩くよりも近道だからだ。

哀が歩いていると、突然後ろから、哀がもっとも恐れている奴らの気配がした。

「……………つつ！！？」

哀はすぐに後ろを振り向いた。しかし後ろには、誰もいなかった。

(今の感じ…獲物を射竦めるような視線…腸まで抉り取られるようなプレッシャー…まちがないわ…あの時と同じ…あの火事の現場で最初に感じた、彼らの気配…)

哀は歩く速度を速めた。時々後ろを振り向いては、だれかに、あとをつけられていないか確認する。

(…この近くに彼らの仲間がいるわ…確証はないけど…あの気配はまちがないく彼らのもの……)

もうすぐで博士の家に着く。哀はさらに歩く速度をあげた。

(あともうすこし…あの曲がり角を曲がれば…)

哀が曲がり角を曲がった瞬間、誰かにぶつかった。

「きゃっ!?!」

哀は小さく悲鳴をあげて、尻餅をついた。

「大丈夫かい?」

哀とぶつかった人物が、哀に手を差しのべながら声をかけてきた。

哀は顔をあげて、その人物を見た。

「つつ!?!?!」

哀はその人物を見た瞬間、全身が凍りついたように体が動かなくなった。

「おや…君は確か阿笠博士のところの…」

哀とぶつかった人物…沖矢昴は、哀を見ていった。

(ど、どうしてこの男がここに!?!さっき感じた気配は彼だったのね…)

哀は急いで立ち上がった。

「博士に頼まれたのかい?」

沖矢は、哀の持っている買い物袋を見て、哀に尋ねてきた。

「ち、ちがうわ。お昼に食べる物がなかったから、買いに行っただ

けよ…」

哀は今すぐにも、この場から立ち去りたかった。

「それじゃ、私は急ぐから…」

哀が立ち去ろうとした時、再び沖矢が声をかけてきた。

「そういえば、博士にちょっと用事があるんだけど…寄っていてもいいかな？」

冗談じゃないわ…私はあなたを、彼らの仲間なんじゃないかと疑っているのよ…」

「生憎、博士は今家にいないから、用事があるならまた今度にして…」

哀は、ポーカーフェイスを装いながら話しているが、内心ではとてもヒヤヒヤしていた。

「それじゃあ、君一人で留守番なのかい？何かあったら大変だし、僕も一緒に留守番をしようか？」

「だっ、大丈夫よ！私一人で…それじゃ、私はやることあるから、帰るわね…」

哀はその場から走って、逃げ出した。

沖矢は、走り去っていく哀の後ろ姿を眺めていた。

(やはり、まちがないな……)

沖矢は不敵に笑い、その場を立ち去っていった……

第十七話・気配（後書き）

今回はコナンが登場しませんでした。次回は登場させます。

第十八話・疑惑（前書き）

前回の続きです。

第十八話・疑惑

博士の家に着いた哀は、急いで家の中に入り鍵を閉める。

「ハア…ハア…」

息も絶え絶えにしながら、哀はリビングのソファに座った。

しばらくして、息も落ち着いてきた哀は、水を飲むためにキッチンに向かった。

「ふう…ようやく落ち着いたわ…」

哀は、コップに注いだ水を半分くらい飲んで呟いた。

プルルルッ…

突然電話が鳴った。哀は、先程のこともあり、電話に出るか迷ったが、いつまでも電話が鳴り止まないの、出ることにした。

「……………もしもし…」

哀は恐る恐る言った。

『もしもし、俺だけど。』

電話相手の声を聞いて、哀はホッとした。その声の主が誰なのか、

哀にはすぐにわかった。

「新一…」

「志保か。今、博士いるか？」

「いないわ。どこかに出かけてるみたい…」

「それじゃあ、志保一人なのか？一人で大丈夫か？なんなら、俺もそっちに行こうか？」

普段の哀だったら、留守番くらい一人で出来ると答えただろうが、先程沖矢と会ったので、かなり不安だったので、コナンが来てくれると助かる。

「すぐに来て…一人じゃ、心細いの…」

哀は消え入りそうな声で言った。

「ああ。すぐに行くから待ってる。」

普段よりも弱気な哀の声を聞いて、コナンはすぐに博士の家に向かった。

電話を切ってからすぐに、チャイムが鳴る音がした。哀はチャイムを鳴らしたのが、コナンであることを確認して、ドアを開けた。

「志保…」

「新一……」

哀はコナンに抱きついた。

「しっ、志保、いきなりどうしたんだ？／＼」

コナンは、いきなりの哀の行動に驚きながら言った。

「お願い……少しの間でいいから、抱き締めて？」

「志保……」

コナンは、哀の様子がいつもと違うことに気づき、特に訳を聞いた
りせず、哀の背中に手をまわして、優しく抱き締めた。

哀は、コナンに抱き締められて、さっきまで不安でしろうがなかつ
た気持ちだが、どこかへいってしまった。

しばらく二人は抱き合っていた。

「落ち着いたか？」

コナンと哀は、ソファに寄り添いながら座り、コナンは哀を抱き寄
せながら聞いた。

「ええ……ありがとう」

「なにかあったのか？」

コナンは、哀を抱き締めたまま尋ねた。

「さっきね…スーパーに買い物に行った帰り道で、彼らの気配を感じたの…」

「彼らって…ひょっとして黒ずくめの奴らか！」

哀は軽く頷き、話を続けた。

「それでね…早く家に帰ろうと思って、急いで歩いてたの…そして、次の曲がり角を曲がれば博士の家だから、さらに歩む速度を上げたの…そこで誰かにぶつかって、顔を上げたら、沖矢昴がいたの…」

哀は、さっきの出来事を一通りコナンに話した。

「昴さんにあつたのか？」

「ええそうよ…私が感じた気配は、まちががなく彼のものよ…」

「昴さんが、奴らの仲間だって言いたいのか？」

「前から言っているじゃない。ひょっとしたら、私たちの正体が既にバレているかもしれないわ…」

「ハハハ、んなばかな。だとしたら、俺たちはとっくに奴らに殺されているって。」

コナンは笑いながら答えた。

「どうしてそう言いきれるの！彼が組織の一員じゃないって！」

哀はついカッとなってしまった。

「志保……」

「ごめんなさい……」

哀は、ついカッとなってしまったことを謝った。

「確かにあなたの言っていることも、一理あるわ……でも、私にはやっぱり沖矢昂は、組織の一員なんじゃないかって思うの……そう思うと、体が震えてくるの……」

哀は、俯きながら話している。コナンは黙って、哀の話を聞いている。

「もう、こんな生活嫌だわ……組織の奴らに怯えて、ビクビク生活するなんて……」

コナンは、俯いている哀の顔を上げさせ、優しく抱き締めた。

「……新一？」

「心配すんなよ、志保。なんかあったら、俺が必ず守ってやつから。だから、そんな顔しないで、笑顔でいろよな？志保は笑顔が一番似合っただからさ。」

コナンは優しく哀に言った。

「うん／＼ありがとう／＼」

哀は、コナンの優しさに、とても嬉しく思った。そして、コナンの胸に顔を埋めた。コナンはそんな哀を優しく抱き締め、頭を撫でた。

「新一……」

哀は顔を上げて、コナンに顔を近づけた。そして、哀から唇を重ねた。

コナンは突然のことで驚いたが、すぐに我に返った。

二人はしばらく、そのままキスを続けていた。そしてどちらともなく、舌を絡ませ合った。

「んっ／＼」

「んふっ／＼」

二人は、かなり濃厚なキスをした。しばらくして、お互いに唇を離れた。

「新一／＼」

「志保／＼」

お互いに名前を呼び合い、そして抱き締め合った。

第十八話・疑惑（後書き）

一応これで、組織のことはひとまず終わりにしようかなと思ってます。でも、また組織は登場させようと思います（^ - ^）”g

これからも宜しくお願いします

第十九話・キャンプでの災難（前編）（前書き）

誤字・脱字があるかもしれません。

そのときは、指摘して下さい。

第十九話・キャンプでの災難（前編）

あれから数日が経った。哀は、沖矢のことを完全に信用したわけではないが、なにかあったらコナンが守ってやると言っていたので、安心していた。

そして今は、学校が終わってその帰り道。いつものように、歩美・光彦・元太の三人が前を歩き、その後ろをコナンと哀が歩いている。

「ねえ、今度の連休にみんなでキャンプに行かない？」

「いいですね！行きましょう！」

「決まりだな！」

元太と光彦は、歩美の意見に賛成した。

「コナンさんと哀ちゃんも行くでしょ？」

「まあ、俺は別に構わないけど……」

「私も構わないわよ。」

「本当！それじゃあ、さっそく博士に頼もう！」

「なるほど。今度の連休にみんなでキャンプに行きたいから、ワシ

に引率を頼みたいんじゃない…そういうことなら、ワシに任せなさい
！」

「ほんとですか！」

「ありがとうございます」

「これで決まりだな！」

三人は喜んだが、コナンと哀はその様子を呆れて見ていた。

「ハハ…相変わらず元気な奴らだな…」

「まあ、仕方ないんじゃない？彼らはまだ小学生なんだし…」

キャンプ当日。

コナンたちは、阿笠博士の家の前に集合していた。

「それにしても、遅いですね…元太君。」

「元太君、どうしたんだろうね…」

集合時間になっても、元太はまだ来ていない。

「寝坊したんじゃないか？」

「有り得るわね。小嶋くんのことだし…」

みんなで色々話していると、元太が走ってこっちに向かってきた。

「ハア…ハア…間に合った…」

息を切らせながら、元太は呟いた。

「全然、間に合ってますんよ！集合時間はとっくに過ぎてますけど
！」

「わ、悪かったって…ちょっと寝坊しちまってよぉ」

元太は頭の後ろに手を回し、苦笑しながら答えた。

「まあまあ、これで全員揃ったんじゃし、そろそろ出発するぞい。」

「…はい。」

三人は元気よく返事をして、車に乗り込んだ。

ちなみに、元太は車の前に乗り、後部座席には光彦・歩美・哀・コ
ナンの順に乗り込んだ。

「博士、今日はどこのキャンプ場に行くの？」

「今日行くキャンプ場は、君たちがまだ行ったことのない場所じゃ
よ。」

「それは楽しみですね。」

それから数時間くらい経って、ようやく目的のキャンプ場に着いた。

「見てみて、川があるよ!」

そのこのキャンプ場には、周りにきれいな川があり、車から降りた歩美たちは、川に向かっていった。

「魚もいますね。」

「うまそうな魚だな!」

三人はさっそく水遊びを始めてしまった。

「あいつら…まずはテントを張ってからにしろよ…」

コナンは、ため息をつきながら呟いた。

「まあ、しょうがないんじゃない? 私たちだけで、テントを張りましょう。」

コナンと哀は、テントを張るために博士のところに行った。しかし、なにやら博士が探し物をしているようだった。

「なあ、志保…今、俺…すっげえ嫌な予感がしたんだけど…」

「奇遇ね…私も新一と一緒にで、すごく嫌な予感がするわ…」

二人は博士に近づいて、声をかけた。

「何を探してるんだ？博士…」

「あ、いや…それが、その…」

博士は、おろおろしながら言った。

「まさか、テントを忘れたって言うんじゃないでしょうね？」

哀は、腕を組みながら尋ねた。

「それが、そのまさかでな…ハハハ…」

嫌な予感が当たった…

コナンと哀は深くため息をついた。

「ったくよー。せつかくキャンプを楽しみにしていたのによー。」

「まさか、テントを忘れるとは…」

「なんか、前にもこんなことがあったよね…」

三人は口々に文句を言い始めた。

「おまけに、完全に道に迷ってしまいましたしね…」

光彦は、車の窓から外を見て呟いた。

そこは、来た時とはまったく違う景色で、辺り一面には木が生い茂っていた。

「なんでいつもこうなるんだろ…」

歩美は、ため息をついた。

「まったく、カーナビくらいつけとけよな！」

元太は、運転している博士に言った。

「いや、本当にすまんのう。まさか、テントを忘れてしまつとは思っても見なかったわい…」

「これからは、ちゃんと確認することね…」

哀はジト目で、博士を睨んだ。

博士は苦笑しながら、運転を続けた。

「にしても、博士…こりゃ、完全に道が違つぜ…来た道を引き返した方がいいんじゃないかねえか？」

「そ、そうじゃのお…」

博士がコナンに言われて、道を引き返そうとした時、パンツという何かが破裂したような音がした。

それと同時に、博士は車を止めた。

「い、今の音って、もしかして…」

「パンクしちゃったの!？」

「マジかよ…」

元太たちはため息をついた。コナンと哀も思わずため息をついた。

「テントは忘れるし、道には迷うし、おまけに車はパンクするし…
最悪ですね…」

「こりゃあ、車の中で、野宿するしかねえな…」

「えー」

歩美は、コナンの発言に声を上げた。

「しゃーねえだろ…博士がテントを忘れちゃったんだから…」

みんなで博士を睨んだ。

博士はといつと…

「ま、まあ、良いんじゃないかのう、野宿というのも…」

博士は苦笑しながら、言った。

あれから、野宿することに反対していた三人だが、どうすることもできないので、取り合えず食事にすることにした。

そのために、それぞれ係を分担した。

博士と哀が、料理を担当し、残りの四人が薪拾いというふうになった。

「それにしても、疲れましたね……」

「本当……歩美、お腹空いちゃったな……」

「んじゃあ、とつとと薪を集めちゃおうぜ……」

コナンたちは、薪を集め始めた。

「ところで、元太君はどこに行ったんでしょ……」

光彦の言葉に、コナンと歩美も辺りを見るが、元太の姿はどこにもない。

「おい。ちよつとこつち来てみるよ！」

遠くの方から、元太の声がしたので、コナンたちは声がした方向に走っていった。

「どうしたんだ、元太。」

「なにかあつたんですか？」

「ああ、これ見てみるよ。」

元太は、指を指しながら言った。コナンたちは、元太の指を指した

方を見た。

そこには鍾乳洞があった。

「これは…鍾乳洞ですね…」

「面白そうだから、ちょっと探検してみようぜ！」

「そうだね！」

「まあ、すこしくらいなら、問題ないでしょう。」

「お、おい、お前ら！薪拾いはどうすんだよ！」

コナンは元太たちに叫んだ。

「ちょっと、見るだけだから、コナンくんも行くようよ！」

どんどん奥へ行く三人を見て、コナンも仕方なく後を追った。

「おい、もう帰ろうぜ…前みたいに、殺人犯に会っちまうかもしれねーし…」

「平気だって！そう何度も、殺人犯に会うわけねーだろ！」

元太はそう言いながら、さらに奥へと向かっていった。その後に、光彦と歩美も続いた。

(まったく、しょうがねえな……ん、)

コナンは何かを見つけて、その場にしゃがみこんで、調べてみた。

(これは…血痕!?!しかも、まだ乾ききってねえ…どうしてこんなところに血痕が…まさか!!!)

コナンはハツとして顔を上げた。

それとほぼ同時に、奥から元太たちの悲鳴が聞こえた。

(しまった!)

コナンは、急いで悲鳴の聞こえた方向に向かった。

(頼む、みんな無事でいてくれ…)

第十九話・キャンプでの災難（前編）（後書き）

ちょっと長くなってしまいましたね…

次回、なんとコナンが!?!…

どうなるかは、楽しみに待っていてください（^o^）

第二十話・キャンプでの災難（後編）（前書き）

誤字などがありましたら、遠慮なく言ってください。

第二十話・キャンプでの災難（後編）

（みんな、無事でいてくれよ…）

コナンは、心の中で祈りながら、走った。

「どうした、みんな！？無事か！」

「コ、コナンくん…」

歩美は、目に涙を浮かべながら、コナンの名前を呼んだ。

元太と光彦も、同じようにガクガク震えていた。

そしてその先には、死体を運んでいる二人組の男がいた。

「見たな…」

二人組の男は、死体を置き、懐から拳銃を取りだし、銃口を向けてきた。

「おめーら！早くこっちに来い！！」

コナンは叫んだが、元太たちは腰が抜けてしまったのか、その場から動かない。

「ほら、早く立って逃げるぞ！」

コナンはみんなを立たせて、逃げ出そうとした。その瞬間、二人組

のうち一人が発砲した。

パンツ！！

「危ない！！」

コナンたちは、間一髪で避けた。

「チツ……」

男は舌打ちをしたが、すぐにもう一人の男が、発砲してきた。

「伏せる！」

コナンは元太たちに、銃弾が当たらないように体制を低くさせた。

そして、コナンたちは走り出した。

しばらく走っていると、近くに隠れる場所があったので、一先ず隠れることにした。

「あのガキ共、どこへ行きやがった……」

「いいか、絶対に生かしておくなよ。見つけたら、必ずブチ殺してやる。」

男たちの会話を聞いていた三人は、叫び声を上げないように、必死に口を押さえていた。

（犯人は二人……どちらも拳銃を持ってやがる……俺一人ならともかく、

元太たちも一緒だから、迂闊に行動するわけにもいかねえし…どうする…）」

「コナンくん、これからどうする…」

「まさか、また殺人犯に遭遇するとは思っていませんでしたね…」

「こんなことになるんだったら、探検なんてするんじゃないかな…」

…」

三人は、犯人たちに聞こえないように、小さな声で呟いた。

「歩美たち、ここで殺されちゃうのかな…」

歩美は、涙を浮かべながら言った。

「大丈夫、心配すんな！俺たちはこんなところで、死ぬわけにはいかなーだろ？」

きつとチャンスはある。だから、最後まで諦めちゃダメだぜ。」

コナンはみんなを励ますように言った。

「うん。そうだね。」

「ここで諦めたら、終わりですね。」

「ああ、きつと俺たちは助かるぜ！」

「よし、その調子だぜみんな。それより、このことを博士に伝えなきゃ…」

コナンは探偵団バッジを取り出した。

「博士、聞こえるか、博士……」

コナンは何度か呼び掛けてみた。

「おお、コナンくん。どうしたんじゃない？ずいぶんと、帰ってくるのが遅いようじゃが……」

「それどころじゃねえんだよ……実は……」

コナンは、今までのことを博士に詳しく伝えた。

「なんじゃと！？それは、本当か！」

「ああ。だから、すぐに警察を呼んでほしいんだ……」

コナンは、なるべく小声で話した。

「それで、みんなは無事なの？」

哀は冷静に、コナンに尋ねた。しかし、実際にはとても心配そうな顔をしていた。

「ああ、みんな無事さ。心配すんな……」

コナンには、できるだけ優しく答えた。

ここで、再び奴らがこっちに来た。

「まずい！奴らが来たから切るぞ。」

「お、おい……」

コナンはバツジを切った。男たちの足音は、徐々にこっちへ近づいてくる。

コナンたちは、息を潜めた。

「残るは、そこだけだな……」

男たちは、不敵に笑い、銃を構えた。

「いいか、おめえら。俺が合図したら、全速力で走るんだぞ。」

コナンは小さな声で話した。元太たちは頷いた。

コツ…コツ…

コナンは腕時計型麻醉銃を構えた。

(チャンスは一度きり…慎重にやらねーとな…)

「フンツ、これで終わりだな……」

男の一人が、コナンたちの隠れているところに近づいたその瞬間、コナンが合図を出した。

「今だ！！」

コナンは男に麻醉針を撃ち、出口に向かって走り出した。

麻酔針をくらった男は、変な声をだし、その場に倒れた。

「お、おいっ、どうした!？」

もう一人の男は、突然の出来事に混乱していた。その際に、コナンたちは逃げていった。

しかし、すぐに男も追いかけてきた。

その距離はだんだんと縮まっていった。

さすがに、子供よりも、大人の方が断然走るのが速い。

「お前ら、覚悟しやがれ！」

男は拳銃で発砲してきた。

「グッ……」

「コナンくん！」

歩美が、悲痛な叫び声を上げた。

「しっかりしてください！大丈夫ですか！」

「ああ、心配すんな。右足、かすっただけだから……」

コナンは、痛みに顔を歪ませながら、答えた。

（クソッ……この足じゃあ、キック力増強シューズが使えねえ……）」

コナンは、なんとか立ち上がり、再び走り出した。

「おい、あれ見るよ！出口みたいだぜ！」

元太は指を指しながら、言った。

「本当ですね！」

「よし、あともう少し…！」

コナンたちが、あと少して出口に出ようとしたところで、後ろから悲鳴が聞こえた。

「キヤア！離して！」

「歩美！」

男は歩美に、銃を向けながら、勝ち誇ったような笑みを向けてきた。

「ここまでだな、ガキ共…動くなよ。動いたら、このお嬢ちゃんの命はないぜ。」

男は不気味に笑った。

(クソツ、右足は奴に撃たれたから使えねーし…残るは左足だけだけど…歩美が人質に取られているこの状態で、犯人にサッカーボールを蹴るのは危険すぎる…せめて、犯人の気をそらさせなきゃならねえ…)

コナンが考えていると、男は銃口をコナンたちに向けてきた。

「さーて。だから、あの世に送ってやるつか？」

元太たちは、ガクガク震えていた。

「そんなに恐がらなくても、すぐに楽になるから心配しなくてもいいぜ。」

男は笑いながら言った。

「決めたぜ…まずは眼鏡のボウズ、お前からあの世に送ってやるぜ…」

銃口をコナンに向けた。

(クソツ！ここまでか…)

コナンが、諦めて目を瞑った瞬間、洞窟内に無数のライトが照らされた。

「警察だ！お前は完全に包囲されている！銃を捨てて、おとなしく投降しろ！」

「な、何で警察がここに!？」

男は、突然のことに動揺していた。コナンは、その一瞬の隙を突いて、キック力増強シューズの威力を最大にして、サッカーボールを出し、カ一杯蹴った。

「くらえっ!!！」

コナンの蹴ったボールは、見事に犯人の顔面に命中した。

「ぐはっ！」

犯人はそのまま、後ろに吹っ飛んだ。

歩美は、その衝撃で地面に落ちそうになったが、元太と光彦が間一髪のところまで受け止めた。

「大丈夫ですか！？歩美ちゃん！」

「うん、大丈夫だよ！ありがとう、元太くん、光彦くん。コナンくんもね！」

歩美にお礼を言われた元太と光彦は、少し照れていた。

「君たち、怪我はないかい？」

高木が尋ねてきた。

「歩美たちは大丈夫だけど、コナンくんが怪我をしているの……」

「大丈夫かい？コナンくん……」

高木が、心配そうな顔で覗き込んできたので、コナンは笑顔で答えた。

「大丈夫だよ、高木刑事。右足をちよつとかすっただけだから……」

「それならいいんだけど……とにかく、救急車を呼ぶからちよつと待

「つててね。」

高木は電話で救急車を呼んだ。

「いや、君たちが無事でなによりじゃ。」

博士が安心した顔で、こっちに来た。

「ほんと、大きな怪我をしなくてよかったわ…」

哀は、ホッとしながら呟いた。

「博士！哀ちゃん！」

歩美は、哀に泣きながら抱きついた。

哀は歩美を、優しく抱き締めた。

「ほら、さっさと立て！」

目暮警部は、気絶している犯人を起こして連行していった。もう一人の犯人も、別の刑事が連行していった。

なにはともあれ、これで一件落着だな…

第二十話・キャンプでの災難（後編）（後書き）

今回、あまり恋愛要素がありませんでしたね…

次回からは、なるべく恋愛要素を多くします（＾o＾）／

第二十一話・風邪（前書き）

いつもより、ちょっと短いかもしれません

第二十一話・風邪

コナンと哀は、いつものように学校に行って、退屈な授業を受けていた。

コナンは、ふと隣の席の哀を見たときに、哀の顔色が良くないことに気がついた。

「おい、志保大丈夫か？」

コナンは、周りに聞こえないように小さな声で訊いた。

「…えっ……大丈夫って…何が？」

「いや、だからおめえ、顔色が悪いから大丈夫かって訊いたんだけど。」

「……だ、大丈夫よ！…心配しないで…」

哀は、コナンに心配を掛けないように、なるべく笑顔で答えた。

「それならいいんだけど…でも、あまり無理はすんなよ？」

「わかってるわ…心配してくれてありがとう…」

哀は、コナンが自分のことを気遣ってくれたことが嬉しかった。

学校が終わり、コナンと哀はいつものように帰っていた。しかし哀の顔色は、さっきよりもさらに悪くなっている。

「志保、おめえ熱があるんじゃないか？」

コナンは心配そうな顔で、哀を見た。

「…だ…大丈夫よ…」

そうは言っているが、体がふらついている。

「どこが大丈夫なんだよ…無理すんなっていったろ？」

コナンは、ふらついている哀を支えながら博士の家に向かった。

博士の家に着いたコナンは、すぐに哀をベッドに寝かせた。

コナンは哀の額に、自分の額をくっ付けた。

「おい、すげえ熱じゃねーか！ちょっと待ってる！」

コナンはそう言い残して、部屋を出ていった。

しばらくしてコナンは、薬と、冷たいタオルを持ってきた。

「ほら、濡れタオルと、薬を持ってきたぞ。」

コナンは、哀の額にタオルを置いた。

「薬、飲めるか？」

「……………うん……………」

哀は『うん』と答えたつもりだったが、思うように声が出ない。

「その様子じゃあ、薬を飲むのも大変そうだな……………」

哀はなんとか薬を飲もうと、身体を起こすが、すぐに後ろに倒れてしまう。

「志保、口を開けて。」

哀は言われた通りに、口を開けた。

すると哀の唇に柔らかいものが触れ、口のなかに、温かい水と薬が流れ込んできた。

コナンは、哀の唇を塞いで薬を飲ませた。

「……………んっ……………うん……………」

その後、コナンは哀に毛布をかけ直した。

「なんか、お粥でも作ってきてやるよ。」

「……………ありがとう……………迷惑かけて、ごめんなさい……………」

「気にすんなよ。」

コナンは、哀の頭を優しく撫でながら言った。

コナンは部屋を出て、キッチンに向かった。

それからしばらくして、コナンはお粥を持ってきた。

「志保、お粥作ってきたけど、食べれるか？」

「……あまり……食欲がないわ……」

「でも、ちょっとは食べねえと……」

「……じゃあ……食べさせて……」

人間、身体が弱ると甘えたくなくなるというのは、本当のようだ。

「わかったよ。ほら、アーンして。」

コナンは、お粥が熱すぎないように、少し冷ましてから、哀に食べさせた。

「おいしいか？」

「……おいしいわ……」

哀は、微笑みながら答えた。

その後も、コナンは、哀にお粥を食べさせた。

「それじゃあ、ゆっくり寝ているんだぞ?」

コナンは、哀にお粥を全部食べさせて、部屋を出ていこうとしたら、服の裾を引っ張られた。

「ん、どうした?」

「…寝るまで…一緒にいて……」

哀は、コナンに甘えてきた。

熱で上気した顔と、少し潤んだ目をは、とても可愛いくて、愛しいと、コナンは思った。

「ああ、ずっと一緒にいてやるから、安心していいぞ。」

コナンは、哀の手を握りながら、優しげな表情で言った。

「…ありがとう…新一……」

哀は安心したのか、すぐに寝息をたて始めた。

「おやすみ、志保。」

コナンは哀の唇に、自分の唇をそっと重ねてキスをした。

次の日、哀はコナンの看病のおかげで、熱は平熱まで下がった。

しかし、今度はコナンが風邪をひいてしまい、熱が下がった哀に看

病されることになってしまった……

第二十一話・風邪（後書き）

最近忙しく、更新が遅くなってしまうことがあると思います。

本当にすみません（<|>）

なるべく早く、更新できるように努力します。

第二十二話・暗殺計画（前編）（前書き）

再び組織が登場！？

第二十二話・暗殺計画（前編）

「…はあ…はあ…ここまでくれば…もう大丈夫だろう…」

深夜の人気のない廃ビルで、男は息を切らせながら呟いた。

「フン…そいつはどうかかな？」

突然聞こえてきた声に驚き、慌てて声がした方を振り向くと、長身で全身黒づくめの男が、不敵に笑いながら銃を構えて立っていた。

「ジ、ジン！」

男は後ろを振り返り、ジンとは反対の方向へ逃げようとしたが、その先にはウォッカがいた。

「…クツ…」

男は、自分の置かれている状態に、絶望的になった。

「俺たちから、逃げられるとも思っているのか？」

ジンは、男の額に拳銃を押し付けながら言った。

「ま、待ってくれ！これからは、ちゃんと組織に忠誠を尽くす！だ…だから、殺さないでくれ！！」

男は、必死で命乞いをしたが、ジンは鼻で笑った。

「フンツ…組織を裏切ったものが、どうなるかわかっているんだろ…」

ジンは、拳銃の引き金を引きながら、冷たく言い放った。

「た、頼む！助けてくれ…」

「フン、組織を裏切ったことを、あの世で後悔するんだな…」

「パーン…」

一発の銃声がした後、男は地面に倒れて、そのまま動かなくなった。

「しかし、こいつも馬鹿な奴ですね、兄貴。俺たちを裏切ったりしなければ、死なずにすんだものを…」

ウォツカは、地面に倒れている男を見ながら言った。

「そういえば、近々組織が消すことになっている人物がいやしたね…」

ウォツカは、煙草に火をつけているジンに言った。

「そいつは、組織にとって目障りな存在だから…」

ジンは、ポルシェに乗りながら答えた。

「確か、そいつを殺す（バラす）のは、どっかのパーティー会場でやしたね…」

「ああ。今度、鈴木財閥が開くパーティーの会場で、そいつを始末

する計画だ……」

ジンは、不気味に笑いながら言った。

「そこが、そいつの墓場つてわけですよ……」

ウォツカは車を走らせ、ポルシェは漆黒の闇へと消えていった。

『次のニュースです。今朝6時30分頃、米花町の廃ビルで、拳銃で頭を撃たれて死亡している男性が発見されました。男性の身元は今のところわかっておらず、警察は目撃者がいないか、聞き込みをしているようです。』

「それにしても、相変わらず事件が絶えねえなあ。」

小五郎は、事務所のいつもの場所でニュースを見て呟いた。

すると、事務所の電話が鳴った。

小五郎は、すぐに受話器に手を伸ばして電話に出た。

「はい こちら毛利探偵事務……」

『毛利探偵事務所』と言おうとした小五郎だったが、電話相手の発した言葉により言えなくなってしまうた…

『もしもし、出前を頼みたいんだが…ラーメン一つと餃子…』

「ふざけんじゃねー！！ここはラーメン屋じゃねえぞツ！！ちゃん
と番号確かめろオ！！！」

小五郎は、乱暴に受話器を置いて、電話を切った。

「くそ！事件の依頼かと思ったのに、あんなふざけた電話だったとは…」

「事件の依頼じゃなくて残念だったね。」

蘭は、怒りながら電話を切った小五郎を見て言った。

「全くだぜ…世の中、物騒な事件が絶えねーって言うのに、どうして探偵事務所の依頼がゼロなんだ…」

小五郎は、競馬新聞に目を通しながら嘆いた。

（ハハハ、確かに…ここ一週間依頼ゼロだったっけ…）

コナンは苦笑しながら、心の中で思った。

「そう言えば、さつき園子から電話があったんだけどね…今度、鈴木財閥が開くパーティーに参加しないかって言われたんだけど…」

蘭は、小五郎とコナンに、園子からの電話の内容を話した。

「そついやあ、久しくパーティーに行つてなかつたから、たまには悪くねえーかもな。」

どうやら、小五郎はパーティーに参加することにしたようだ。

「コナンくんはどうする？園子が言うにはね、参加人数とかは限られていないから、博士や少年探偵団も誘つていいって言ってたわよ。」

「それじゃあ、僕はみんなにパーティーのことを、電話で伝えてくるよ。」

コナンはさつそく携帯を取りだし、みんなに電話をした。

パーティー当日。

コナン・哀・歩美・光彦・元太・博士・小五郎・蘭・園子は、パーティー会場に来ていた。

「わあ~~~~!!すつ~~~~い!!」

歩美は、会場にある料理を見て言った。

「料理いっぱいあるねー!」

「ええそうですね。よりどりみどりですー!」

「これ、みんな食い放題か!？」

「ええ、そうよ。だから、遠慮しないでたくさん食べていいわよ。」

園子は、子供たちに向かって言った。

「……はい……」

三人は声を揃えて返事をし、自分の皿に料理を乗せた。

特に元太は、皿から料理が溢れだしそうなほど、料理を乗せていた。

「元太くん、いくらなんでもそれは乗せすぎだよ……」

歩美は苦笑しながら言った。

「いーじゃねえーかよ。たまには、たくさん食べたってよ……」

「元太くんは、いつもたくさん食べているじゃないですか……」

光彦は呆れながら呟いた。

「うつ……」

光彦の言っていることは本当なので、元太は何も言えなくなってしまう。

「たまには、こういうのも悪くないわね……」

哀は、楽しそうな三人の様子を見て、コナンに言った。

「そうだな。来て良かっただろ？」

コナンは笑顔を向けて哀に尋ねた。

「ええ、そうね。」

哀もコナンに笑顔で返した。

「それじゃ、わしもたまには肉料理でも……」

博士が肉料理を取ろうとしたら、哀に睨まれてしまい動けなくなっていました。

「博士……わかっているとは、思っけど……」

哀は、ジト目を向けながら博士に言った。

「や、やっぱし……」

博士はシヨボンとなった。

「ハハ……ちょっとぐらい、食べさせても良いんじゃないか？」

「ダメよ。ただでさえ、博士は太っているんだから、少しはダイエットしないと、健康に良くないわ。」

コナンは、自分も将来、食事を制限されるのではと、不安になっていたとか……

パーティー会場のビルの前に一台のポルシェが停まっていた。

「俺だ…準備は出来ているか？」

ジンは、車の中から無線で呼び掛けた。

「こっちはいつでも準備OKだよ…」

キャンティは、ビルの屋上でライフルを構え、標的の写真を口でくわえながら答えた。

「それで…^{ターゲット}標的は、いつ現れんのさ…さっきから退屈すぎて、マジ死にそう…」

「まあ、待て…始末するのは、ターゲットがみんなの前で、スピーチをしている時だ…変装したベルモットが、そいつを上手く所定の位置に誘導することになっている…」

「またあの女かい…」

ベルモットの名前が出た途端、キャンティは唇を噛み締めた。

「どうでもいいけど、早くしないと、アタイのライフルが火を吹くよ…」

「くれぐれも、関係ねえー羊を狩るんじゃないぜ…」

ジンは無線を切った。

「そういえば、バーボンの野郎も、パーティー会場に来るみたいでやすね……」

ウオツカは、助手席に座っているジンに言った。

「そのようだな…奴は今回の作戦に加わってねーはずだが、自分の好きなようにやるとか言っていたな……」

ジンは、煙草に火をつけて言った。

「一体、奴は何を考えているんでやすかね……」

その頃、哀はトイレに行っていた。

トイレから出てパーティー会場へ戻ろうとした時、背後から気配がした。

(こゝ、この気配は!?)

哀は慌てて振り返ったが、後ろには誰もいなかった。

(今は、間違いなく彼らの気配…どうして、こんなところで…と
にかく、このことを新一に知らせなきゃ…)

哀は、急いでパーティー会場に戻っていった。

その後ろ姿を、顔に火傷の跡がある男が目撃していた。

(似ている…まさか、な…)

男は不敵に笑い、その場を去っていった。

第二十二話・暗殺計画（前編）（後書き）

ちょっと長くなっちゃいましたね…

次回も頑張るので、宜しくお願いします。

第二十三話・暗殺計画（後編）（前書き）

いつもに比べるとかなり長いです…

第二十三話・暗殺計画（後編）

哀はパーティー会場に戻ると、すぐにコナンの所に駆け寄った。

「どうしたんだ志保？血相なんか変えて…」

コナンは、蒼い顔をしている哀に尋ねた。

「じつは、さっきトイレにいった時に彼らの気配を感じたのよ…」

「ほ、ほんとなのか!？」

コナンは驚きながら言った。

「間違いないと思うわ…でもどうして彼らがここに…」

「…奴らの目的はわかんねえーけど、取り合えず奴らを探そうぜ。」

コナンと哀は、一先ずパーティー会場から出ることにした。

「ここで、奴らの気配を感じたのか？」

コナンは、哀が組織の気配を感じたというトイレの近くに來ていた。

「ええ、そうよ…気配は感じたけど、姿は見ていないわ…」

「そっか…」

（一体、奴らは何をしようとしているんだ？もし、奴らの狙いが俺が志保だったら、今ごろとつくに始末されているだろうし…となる
と、なにかの取引か…それとも暗殺が目的なのか？）

コナンは、組織の目的について色々考えていた。すると哀がコナンに話しかけた。

「ねえ、新一…このまま、私たちだけで彼らを追跡するのは危険なんじゃない？パーティー会場には、子供たちや、博士もいるし…それに彼らの目的が、組織を裏切った私だったら…間違いなく殺されるわ…」

哀は、不安な気持ちでいっぱいになりながらコナンに言った。

コナンはそんな哀の様子を見て、優しく微笑むと哀を抱き締めた。

「ちよっ、ちよっと新一！？」

哀は突然の出来事に驚き、コナンからすぐに離れようとしたら、コナンはさらに強く抱き締めてきた。

「心配すんなって、志保。奴らの目的は志保じゃないって。もしそうなら、今ごろとつくに奴らに殺されているだろ？それに、たとえどんなことがあっても、俺が絶対に守ってやつから。」

コナンは優しく微笑みながら言った。その表情は、哀の一番好きな笑顔だった。

「……………うん／＼……」

哀は小さく頷いたあと、コナンに抱きつき、その胸に顔を埋めた。

さっきまで、不安でいっぱいだった気持ちも、コナンのおかげで不安な気持ちが消えた。

しばらく二人は、そのまま抱き合っていた。

「どうだ？少しは落ち着いたか？」

「ええ、あなたのおかげだね。ありがとう、新一。」

哀は、極上の笑顔でコナンに言った。

「お、おう／＼」

そんなコナンを見て、哀はクスツと笑っていた。

すると、コナンと哀の後ろから聞き覚えのある声がした。

「クールキッド？」

コナンと哀が後ろを振り向くと、そこにはFBI捜査官のジヨデイがいた。

「ジヨデイ先生！？どうしてここに？」

「それは、こっちの台詞よ。君たちこそ、どうしてここに?」

逆にジヨディに質問されたので、コナンと哀は、事情を話すことにした。

「なるほど…どうやら、あの情報は間違いないみたいね。」

「あの情報って?」

コナンはジヨディに質問した。

「実は、私たちがここに来た理由は、FBIがある情報を手に入れたからなの。その情報というのが、組織がここのパーティー会場である人物を暗殺するというものだったの。」

ジヨディは、自分達がここへ来た理由を二人に話した。

「それで、ある人物って一体誰なの?」

今度は、哀がジヨディに質問した。

「情報によると、その人物の名前は、本田正人…テレビや新聞などで、犯罪や暴力に対して、過激な発言を繰り返している、正義感の強い人間よ。」

「そういや、テレビで見たことがあるな…その過激な発言に、恨みを買うことも多く、命を狙われたことが何度かあったみたいだけど…」

コナンは、ジヨディの話を聞いて呟いた。

「でも、どうして彼らは、その人を暗殺しようとするのかしら？」

哀は、二人の話を聞いて、疑問に思いながら呟いた。

「きっと彼が、組織にとって煩わしい存在なんじゃないかしら？土門さんの時みたいだね……」

「なるほど……自分達に抗う若い芽は早い内に摘んでしまおうってわけね……」

哀が納得していると、コナンが口を再び開いた。

「そついやその人、鈴木会長と知り合いみたいで、ここのパーティー会場に来ていたな……」

コナンは、顎に手を置きながら答えた。

「とにかく、私は他の捜査官たちと一緒に彼らを探してみるわ。おそらく彼らは、ライフルで狙撃するつもりだろうから、この近くのビルとかをね……」

ジョディはそつ言つと、携帯で他の捜査官に連絡をした。

「それで、あなたはどうするの？」

哀は、なにやら考え込んでいるコナンに尋ねた。

「ん？ああ……俺は取り合えず、その本田さんって人の所へ行ってみるよ……志保、ここにはFBIの人もいることだし、おめえはここで

待っていてもいいんだぜ？」

いくら、奴らの目的が哀でないとしても、必ず奴らに姿を目撃されないとは言い切れない。

仮に見つかったとしても、コナンは命に代えても哀を守るつもりでいる。

しかし、そんな危険がある場所に哀を連れていくということは、彼女にとっては不安で仕方がないだろう。

これ以上、哀に不安な思いをしてほしくないと思い、コナンは哀にFBIの人たちと一緒にいるようにと勧めた。

しかし、哀は首を横に振り、コナンの手を握った。

「私たちは、運命共同体なんですよ？たとえ、どんな危険が待ち構えていようとも、私はあなたについていくわ。」

哀は、優しく微笑みながらコナンに言った。

「そうだったな…」

コナンも哀の手を握り返し、お互いに見つめ合った。

そのまま、顔が近づき合おうとした瞬間…

「きみたち、いつの間にそういう関係になったの…？」

電話が終わったジョディが見たのは、コナンと哀が見つめ合って、

キスをしようとしていた所だった。

ジヨディは、啞然としながら二人に質問した。

コナンと哀は、すぐに離れた。

「いやっ／＼これは、その、なんと言うか……」

コナンは、適当にはぐらかすことにした。

「まあ、いいわ……とりあえず、私は他の捜査官たちと合流するわ。

きみのことだから、おとなしくしているつもりはないんだろっけど……くれぐれも、無茶だけはしないようにね……」

「わかってるよ。」

ジヨディは、二人に気を付けるようにと念をおした後、その場から去っていった。

コナンと哀は、ジヨディたちと別れた後、再びパーティー会場に戻っていた。

「ちょっとあなたたち！！一体どこへ行ってたのよ！」

背後からいきなり怒鳴られたので、後ろを振り向くと、そこには園子が立っていた。

「あつ、ちょうどよかった。園子姉ちゃん、本田正人さんって人、どこにいるか知らない？」

「ちょっとあんた、私の質問に答えなさいよ……」

園子は、コナンに質問をしたのだが、軽くスルーされてしまい、ジト目になりながら言った。

「いいから、どこにいるのか知っているんだったら教えなさい。」

哀が、小学生とはとても思えないような口調で訊いてきたので、さすがの園子も怯んでしまった。

「はっ、はいっ……その、本田正人って人なら、向こうで私のパパと話しているわよ。」

園子の指を指した方を見ると、鈴木会長と話している本田正人がいた。

「なんでも、この後本田さんが、壇上に乗って何かを話すそうよ……」

コナンは、壇上の方を見た。

（あの場所は、狙撃するのに絶好の位置だな……）

その壇上は、窓側に面していて、ビルから狙撃するには、絶好のポイントだった。

「それより、何であんたたちは本田さんを探しているのよ……って、

どこへいったのよ!？」

コナンと哀の姿は既になく、園子は一人取り残された。

「彼らが狙撃をすればしたら、おそらくあのビルね…」

哀は窓の方へ行き、狙撃場所の見当をつけた。

「だろうな…」

コナンも哀の意見に賛成のようで、ポケットから携帯を取り出し、ジヨデイに電話した。

「もしもし、コナンだけど…」

『あら、どうかしたの?』

コナンはジヨデイに、奴らが狙撃をしようと、待ち構えているビルのことを話した。

『なるほど。わかったわ。すぐにそのビルに行ってみるわね。』

コナンが電話を切ると、なにやら鈴木会長と本田正人が、壇上に上がっていた。

「まずいぞ…ジヨデイ先生はまだビルに到着してねえし…このままじゃ、奴らの計画を阻止できねえ…」

コナンは焦りながら辺りを見渡した。

(なにか…なにかねえのか?)

その様子を、壇上上がるうとしていた鈴木会長が見ていた。

(あれは、シルバーブレット…それに、シェリー…フツ、面白くなりそうね…)

実はこの鈴木会長は、ベルモットが変装しているものだった。

鈴木会長に成り済まして、本田正人を壇上まで誘導することになっていたのだが、コナンたちの姿を目撃したベルモットは、多少の間稼ぎをすることにした。

「どうしたのかしら?」

哀はその様子に疑問を持った。

「さあな…だが、これで時間が稼げる…」

コナンは祈るように、その様子を見ていた。

一方、キャンティたちがいるビルの屋上では、ライフルを構えながら、その様子を見ていた。

「あの女は一体何をしているんだい? さっさと、狙撃場所に誘導しな…」

キャンティは、イライラしながら呟いた。

「あの女、何か話している」

その隣でコルンが呟いた。

「あーもう、限界だよ…もう狙撃しちゃっていいかい？」

キャンティは、インカムでジンに尋ねた。

「まだまだ…ベルモットが例の位置まで誘導するのを待て…」

別の場所にいるジンが答えた。

「チツ…」

キャンティは舌打ちをすると、再びスコープを覗いた。

その頃、ジョディたちは数名の捜査官と共に、キャンティたちのいるビルの屋上まで来ていた。

ジョディは、屋上のドアを少しだけ開け、様子を確認した。

「いた！間違いないわ。」

ジョディは拳銃を構え、仲間らに合図を送って、扉を勢いよく開けた。

「動かないで！」

ジヨディは、キャンティたちに銃を向けながら叫んだ。

「FBI!?!どうなってんだい!?!」

キャンティは、突然の出来事にかなり焦っている。

「かなり、ピンチ…」

コルンは、口調こそいつもと同じだが、キャンティと同じように焦っていた。

「あなたたちに逃げ場はないわ!銃を捨てて、おとなしくしなさい!」

ジヨディを含めて、FBI捜査官は六名ほどいる。

「フンツ、相変わらず鼻がきくねえ…」

キャンティは、既に体制を整え、不敵に呟いた。

絶対的に不利な状態でも、キャンティとコルンは余裕の表情をしていた。

「さあ、おとなしく投降しなさい!」

ジヨディは、二人の余裕の態度に、嫌な予感がしたが、銃を構えたまま再び叫んだ。

「悪いけど、そう簡単に捕まるわけにはいかないんでね…」

キャンティは懐から閃光弾を取り出して、ジヨディたちに向かって投げた。

その瞬間、あたりはものすごい光に包まれた。

眩しさに、思わずジヨディは目を塞いだ。

その隙に、キャンティとコルンはビルから飛び降りた。

「しまった!!」

ジヨディは急いでビルの下を覗き込んだ。

キャンティとコルンは、用意していたパラシュートで、難なく地面に着地した。

そして、あらかじめ準備していた車に乗り込み、走り去っていった。

ジヨディは、すぐに他の捜査官に追跡を命じた。

「それ、本当!?!」

コナンは、ジヨディからの電話で、暗殺計画をなんとか阻止できたことを知った。

コナンは電話を切って、哀のところに行った。

「志保、奴らの計画はなんとか阻止できたみたいだぜ。肝心のキャンティとコルンには逃げられちゃったけど、今追跡をしているみたいだぜ…」

「それは、良かったわ。でも、まだ彼らの計画が完全に終わったわけではないわよ…今回は失敗に終わったけど、彼らは諦めないわよ。」

哀は険しい表情で、コナンに言った。

「ああ、わかってる…まあ、取り合えず、しばらくは平気だろ…」

「それにしても兄貴…どうして、FBIの連中がいやしたんですかね…」

ポルシェの運転をしながら、ウオツカはジンに訊いた。

「…おそらく、組織の人間の誰かが、奴らに情報を漏らしたところだろっぜ…」

ジンは、シガーライターで煙草に火をつけながら答えた。

「組織に裏切り者がいるってことですかい？」

ウオツカは驚きながら呟いた。

「おそろくな…」

「一体、誰なんですかね？その裏切り者は…」

「フンッ…目星はついているさ…」

ジンは不敵に笑いながら言った。

「そういやあ、あの本田正人って野郎、殺り損ねちゃいやしたね…」

「その男なら、あの方の命令で始末しないことになったらしい…」

ジンは煙草を吸いながら、冷静に言った。

「どういつつもりなんですかい？」

ウォツカは、意外だったのか、少し声を大きくしながら言った。

「さあな…あのお方にも考えがあるんだろう…」

「どうやら、組織は本田正人の暗殺を中止したそうよ。」

ジヨディは、コナンと哀に言った。

「どうしてまた急に？」

「詳しいことは分からないけれど、組織のボスの命令らしいわよ…」
ジヨディは、何かを考え込みながら言った。おそらく、暗殺を中止した理由についてだろう…

「ねえ、その情報って誰からのの？」

哀は、ジヨディに尋ねた。

「水無怜奈よ。彼女が、隙を見て私たちに情報を教えてくれたのよ。」

「なるほど…」

「まあ、取り合えず私たちは一旦引き上げるわね。何かあったら、連絡してちょうだい。」

そう言って、ジヨディは帰っていった。

その日の深夜…

ある部屋で、ある人物がパソコンでなにかを調べていた。

(やはり、似ている…調べてみる価値はありそうだな…)

その人物…バーボンは、一枚の写真を手に取り、不敵に笑った。

その写真に写っている、赤みがかった茶髪の少女…灰原哀の写真を
見ながら…

第二十三話・暗殺計画（後編）（後書き）

ぐだぐだな文章でスイマセン…

いろいろ、突っ込むところがあるとは思いますが、その辺は多目に見てください…

また、誤字などがありましたら、指摘していただけると嬉しいです。

次回も、よろしくおねがいします。

第二十四話・映画（前編）（前書き）

コナンと哀のデート話です。

第二十四話・映画（前編）

「なあ、志保。今度の土曜日に、一緒に映画でも観に行かねえーか？」

それは突然の誘いだった。

学校が終わり、いつもの場所で探偵団の三人と別れ、これまた、いつもと同じように二人で仲良く歩いていた。

学校での事や、サッカーの事、ホームズの事など他愛ない話をしていたときに、コナンが哀に映画に行かないかと訊いてきた。

「映画って、まさか推理ものじゃないでしょうね？」

哀は、コナンにジト目を向けながら言った。

「ちげえーよ。推理ものじゃなくて、恋愛ものだよ。」

「あなたが恋愛もの!？」

哀は、推理以外に興味のないコナンが、恋愛ものの映画を観ようと言ってきたものだから、少し驚いてしまった。

「んだよ…そんなに驚かなくてもいいじゃねえーか。」

コナンは不貞腐れながら言った。

「ごめんなさい。ただ、推理以外に興味のないあなたが、恋愛映画を観ようって言ってきたから、思わず驚いちゃったのよ。」

「どーせ、俺は推理オタクですよ…」

コナンはさらに不貞腐れた。

本当は高校生であるコナンだが、今は小学生の体なので、不貞腐れているコナンの姿は、なんだか可愛らしいなと思う哀であった。

(可愛いなんて言ったら、怒られるわね。)

「それで、どうするんだ？」

さっきまで不貞腐れていたコナンが、再び哀に訊いてきた。

「いいわよ、映画に行っても。私も、久しぶりにあなたと一緒に、どこかへ出掛けたかったしね。」

哀は微笑みながらコナンに言った。

「それじゃあ、土曜日の朝10時に博士の家に迎えに行くよ。」

「わかったわ。遅れないですよ？」

「わあーってるよ。それじゃ、またな。」

博士の家に着いたので、ここでコナンとは別れることになる。

「ええ、またね…」

正直、哀としてはまだコナンと一緒にいたいのだが、今は小学生の

姿なので、あまり帰宅するのが遅くなると、コナンは蘭に叱られてしまうため、哀はコナンを引き留めることができない。

哀は、少し寂しそうな表情をした。

コナンは、寂しそうな表情をしている哀に近づくと、哀に優しく口付けた。

「ん!？」

哀は、突然の出来事に驚いた。

「そんな寂しそうな顔すんなよ。」

哀から唇を離れたコナンは、哀の顔を見ながら言った。

「えっ?私、そんなに寂しそうな顔してたの?」

「おいおい…自分でも気づいてなかったのか?」

コナンは呆れながら言った。

「まあ、以前に比べたら、志保も表情が豊かになったよな。」

初めて出会った頃は、無表情で可愛いげのなかった哀が、今は表情も豊かになり、感情を顔によく出すようになった。

「私が、こんなに表情豊かになれたのは、新一がいてくれたからよ。あなたには、感謝してもしきれないわね。」

「志保…」

良い雰囲気になったコナンと哀は、お互いに顔を近づけ、キスをよ
うとした時…

「ウオツホン！／＼君たち、わしの家の前で一体何をしておるんじ
や…／／」

天才発明家（自称）の阿笠博士が、咳払いをしながら、コナンと哀
に言った。

「は、博士！なんでここにいんだよ！／／」

コナンはすぐに哀からすぐに体を離し、博士を睨んだ。

「なんでって…ここはわしの家の前なんじゃから、いて当然じゃろ
？」

博士はジト目で言った。

「まったく…もう少し気を遣ってほしかったわ…」

哀は、軽くため息をつきながら呟いた。

「ハハハ…すまんかったのお、気が利かなくて…」
博士は苦笑しながら言った。

「それじゃ、俺はそろそろ帰るとするよ。土曜日楽しみにしている
ぜ志保。」

「私も楽しみにしているわ。」

二人の会話に、博士はなんのことかわからず、首を傾げていた。

コナンが帰った後、哀は博士から色々と質問されたが、哀の頭の中では土曜日のことばかりで、博士の言ったことはほとんど聞いていなかった。

(どんな服を着ようかしら。新一好みの服装って、どんなのかしら？下はやっぱりスカートよね。ロングにするかミニにするか、迷うわねえ…)

「哀君…そろそろ夕飯の準備をしてほしいんじゃないが…」

博士は哀に呼び掛けてみるものの、返事がなかった。

(やっぱり、スカートはミニね。それでもって、上は…)

博士の声は哀に届いてなく、哀は土曜日のデートで着る服のことを考えていた…

その姿は、まさに恋する乙女と言う感じがしなくもない。

「お〜い、哀君………」

結局その日はほとんど、哀に話しかけても返事が帰ってくることはなかった……

土曜日。

コナンは、予定よりも少し早くに博士の家を訪れた。

「あら、早いわね。まだ、10時まで30分くらいあるわよ?」

哀は玄関のドアを開けて、コナンを家の中に入るようにと促しながら言った。

「ああ。早く志保に会いたかったから、思わず早く来ちまったぜ。」

「もう／＼／」

コナンの言葉に、哀は照れたが、顔は嬉しそうだった。

「私も、あなたに早く会いたかったわ／＼」

顔を真っ赤にしながら、哀も自分の気持ちを素直に言った。

「や、やけに素直じゃねえーか／＼」

今度は逆にコナンが照れてしまった。

「私だって、少しは素直になろうと努力しているつもりよ?」

哀は、甘えるような声で言った。

早くも良い雰囲気になった二人だったが、ここで博士がやってきた。

「おお、新一。もう来ておったのか。」

せつかく、良い雰囲気だったのに……とでも言いたげな表情で博士を見た。

「ん？どうしたんじゃ、二人とも？」

「なんでもねえーよ。」

コナンはため息をつきながら言った。

「??？」

博士は頭の上に？マークを浮かべた。

「それじゃあ、ちょっと早いけどそろそろ行くか？」

コナンは時計に目を向けながら、哀に尋ねた。

ちなみに只今の時刻は、9時50分くらいだ。

「そうね。ちょっと早いけど行きましようか。その前に、着替えてくるわね」

「え？着替えてくるって、その格好で行くんじゃなかったのか？」

「そんなわけないじゃない。せつかくのデートなんだから、もっと可愛い服を着たいのよ。」

「なるほど……」

デートか…あいつの口からそう言われると照れるなあ…などと、思っているコナンであった。

「お待たせ。」

哀が着替え終わって、コナンのところに来た。

「どっ、似合ってる?」

しかし、コナンは黙ったままだである。コナンは、哀の姿に目が離せないでいた。

哀の服装は、上は水色のワンピースで、下はミニスカート。そして軽く化粧もしている。

その容姿は、小学生とは思えないくらいに魅力的で、暫くの間、コナンは哀に見とれていた。

「変かしら?」

「そんなことねえーってノノすっげえ、似合ってるよノノ」

コナンは顔を赤くしながら言った。

「あ、ありがと／＼」

哀は下を向きながら、小さく答えた。

「それにしても／＼ちよつと短くねえか？／＼」

コナンは、哀のスカートを見て言った。昔の哀だったら、絶対にしないような服装である。コナンとしては、哀のミニスカート姿が見れて嬉しいのだが、自分以外の人には見せたくないと言っような、独占欲が働く。

「そうかしら？嫌だったら、もう少し長くするけど…」

「べ、別に嫌じゃねえーよ。その方が可愛いからな／＼」

結局、コナンは他人に見せたくないと言う思いよりも、このまま自分が見ていたいという思いの方が強かったので、そのままの格好でいいと、哀に言った。

（まあ、実年齢はともかく、今は小学生の姿なんだから、ナンパされる心配はないな…ホントは、他人に見せたくないけど、しゃーねえか…）

相変わらず、独占欲がとても強いコナンであった……

第二十四話・映画（前編）（後書き）

またまた、前・後編になってしまいました
文章を短くまとめるのって難しいですね。私にもっと文才があれば
いいのですが…

今回は、組織の奴らが出てきませんでしたが、忘れたわけではあり
ませんのでご心配なく。(^-^)

次回も宜しくお願いします

第二十五話・映画（後編）（前書き）

今回はコナンと哀が甘々（？）かどうかはわかりませんが、私的には甘めだと思います。

たぶん……

第二十五話・映画（後編）

映画館に着いたコナンと哀は、さっそく館内に入っていった。

土曜日ということもあり、館内は結構大勢の人がいたが、なんとか座って観ることができた。

しかし、映画が始まって30分もしないうちに、哀の隣から寝息が聞こえてきた。

哀が隣を見ると、そこには気持ち良さそうに眠っているコナンの姿があった。

まったく、自分から誘っておきながら、寝ているとは…

まあ、予想はしていたけどね…

哀は心の中で呆れていた。

それからしばらく時間が経ち、映画が終わった頃にコナンは目を覚ました。

「あら、ようやく目が覚めたみたいね？名探偵さん…」

「ん…？あれ？映画は？」

コナンは目を擦りながら哀に訊いた。

「もう、終わったわよ。あなた、上映中ほとんど夢の世界だったわ

よ……」

哀は呆れ顔で言った。

「……わりい……」

コナンは罰の悪そうな顔をした。

「まあ、いいわ……こうなることは、ある程度予想してたし……やっぱりあなたには、恋愛系よりも、血生臭い推理系の方があつてるみたいね……」

哀は皮肉たつぷりとコナンに言った。

「ハハハ……」

コナンは苦笑した。

「それで、この後はどうするの?」

映画館を出た哀は、隣を歩いているコナンに尋ねた。

「そうだなあ……取り合えず、なんか食べに行こうぜ?」

コナンは腕時計を見ながら、哀に訊いた。

「そうね。そろそろお腹も空いたことだしね……」

二人は、近くにあるレストランへと入っていった。

「店の中は涼しいわね。」

店内は冷房が効いており、とても涼しかった。コナンも哀の言葉に頷いた。

「志保は何を食べる？」

コナンはメニューを見ながら、向かい側に座っている哀に訊いた。

「そうねえ…色々あるから迷うわね。」

哀はメニューに目を通しながら呟いた。

「新一は何にするか決めたの？」

「俺？そうだなあ…俺もどれにするか迷うけど、ここは定番のカレーにするかな…」

「それじゃあ、私もカレーにするわ。」

哀はメニューを閉じて、テーブルの端に置いた。

コナンは、店の人にちょうど注文しているところだった。

その後、二人で楽しく会話をしていると、注文した料理が運ばれてきた。

「うまそくだな！いただきます。」

コナンはさっそく、カレーを口にする。哀も続けるようにしてカレーを食べる。

「旨いな！」

コナンは、本当の小学生のようにカレーを食べている。

その様子を見て、哀はクスツと笑った。

「なんだよ、人の顔見て笑いやがって…」

コナンはジト目で哀を見た。

「あら、ごめんなさい。あなたがカレーを食べている姿って、本当の小学生みたいに、無邪気だなんて思っただけよ。」

哀は微笑みながら言った。勿論、コナンはさらにジト目で哀を睨んだ。

「悪かったな、子供っぽくて…おめえこそ、もっと女の子らしく、可愛く食べねえのかよ？」

コナンは、哀のことだから、すぐに言い返してくるんだろうなと思っていたのだが、彼女が発した言葉は、コナンにとって予想外のものだった。

「じゃあ、食べさせて？」

「へ？……」

予想していなかった言葉に、コナンは目が点になってしまった。

「今、なんて言った？」

「だから、食べさせてって言ったのよ。」

哀は甘えた声でコナンに言った。

「あなたが食べさせてくれるんだったら、私も女の子らしく、可愛く食べられるんだけど……」

哀は上目遣いでコナンに言った。

勿論、コナンはそんな哀の可愛さに、顔が真っ赤になる。

「わ、わかったよ／＼ほら、ア～ンして／＼」

コナンは照れながらも、カレーをスプーンですくって、哀の口に持っていった。

哀は、少し恥ずかしそうにしながらも、口を開けて食べた。

「ほら、今度は新一がア～ンして？」

哀は笑顔でコナンに言った。

「お、おう／＼」

その後も、二人は仲良く食べさせ合いながら、甘い時間を過ごした。

「今日は楽しかったな、志保…」

「ええ、そうね…」

食事が終わった後も、二人は色々買い物をしたりして、楽しい時間を過ごした。

そして今は、手を繋ぎながら帰り道を歩いている。

「それに今日の志保、すっげえ可愛かったぜ／＼」

「あ、ありがと／＼」

二人の顔は、夕日のように真っ赤になっている。

「やっぱり、素直で甘えてきてくれる志保が一番だぜ。でも、俺以外の奴には甘えるなよ？」

「クスッ、あなたって独占欲が強いよね。」

「うっせい…」

「安心して。私はあなた以外の異性には、興味がないから。」

哀は微笑むと、コナンの頬にキスをした。

「しっ、志保！？／＼」

コナンはいきなりのことだったので、顔を赤くした。

「顔、真っ赤よ。名探偵さん？」

哀は悪戯っ子のように微笑んだ。

「バーロオ／＼夕日のせいだっつーの／＼」

「そう言うことにしておいてあげるわ。」

「だから、ほんとだってば／＼」

その後も、二人はじゃれ合いながら帰っていった。

（本当に幸せね、私。新一と一緒にいられて…どうか、この幸せがずっと続きますように……）

哀は心の中で祈った。

しかし、既に組織の魔の手は、もう、すぐ近くまで来ていることを、コナンと哀はまだ知らない……

第二十五話・映画（後編）（後書き）

どうも、駄文になってしまって、ホントスイマセン…

それはさておき、最近は組織が出たり、出なかったりで、色々と文句があるかと思えます。

なので、いよいよ本格的に組織との対決話にしていきたいと思えます。もちろん、コナンと哀の恋愛甘々要素もちゃんと入れるので、心配しないで下さい。…誰も心配してないか（笑）

もしも、組織との対決はこう言うのが良いというリクエストがあるのなら、遠慮せずに言ってください。まだ、どういうラストにするか決めてないので…

なんだかいつもより、後書きが長くなってしまいましたね。（笑）

それでは今後とも、コスモスの小説を宜しく願います（^| ^）

v

第二十六話・誘拐！？（前書き）

どうも、久しぶりの更新です。

今回は、ついに哀に魔の手が！！？

第二十六話・誘拐！？

黒ずくめの組織の本拠地にある、最深部辺りの部屋に一人の男がいた。ここは、限られた人間しか立ち入ることができず、組織の末端の人間は、足を踏み入れることは愚か、近づくことすら出来ない。そのような場所で、その男は、パソコンで何かを調べているようだった。そのパソコンの画面には、誰かの指紋と照合しているのが映っている。そして、パソコンの画面に、『98%』という文字が浮かび上がった。

「フンツ、思った通りだ……」

男は不敵に笑いながら、パソコンの画面に映っている人物を見た。一人は赤みがかった茶髪で、白衣を着ている、成人に近い女性。もう一人は、前者と瓜二つの人物。違うところと言えば、その人物が小学生だというくらいだ……

「まさか、小学生の姿になって生活していたとはな…あの薬の副作用ってところか…そして、もう一人……」

その男、バーボンは机の引き出しから拳銃を取りだし、冷笑した。そして、バーボンはシェリーの他に、もう一人の人物の写真も見ていた。その写真には、工藤新一こと江戸川コナンが写っていた。

「二人仲良く、あの世に送ってやるぜ……」

バーボンは、パソコンの電源を切って、部屋を後にした……

「はあ…それにしても重たいわね。」

哀は夕飯の材料が入っているスーパーの袋を両手にぶら下げ、溜め息混じりに呟いた。本来の宮野志保の姿ならともかく、今は灰原哀の姿なので、買い物をするのも一苦労だ。

いつもだったら、コナンが荷物を持ってくれるのだが、今日はコナンはいない。

それもそのはずである。学校が終わっていつもと同じように帰っていたら、不意にコナンが用事があると言って先に帰ってしまったのである。大方、新発売の推理小説でも買いに行ったのだろうと、哀は予想した。

「やっぱり博士にも、一緒についてきてもらえばよかったわね…」

そんなことを考えていると、背後から誰かにつけられている気配を感じた。

(どうやら、跡をつけられているみたいね……)

哀は、後方から感じる気配に身体を強張らせた。

(三つ数えたら走りだそう……一、二、三……)

哀は心の中でカウントをし、三と言った瞬間に全速力で走り出した。そして、すぐ先にある曲がり角を曲がり、追いつかれないようにと、

懸命に走り出した。

「はぁ…はぁ、はぁ…」

さすがに両手に荷物を持った状態で走るのは厳しい。哀はそう思いながらも、一生懸命に走った。

「はぁ…はぁ…ここまでくれば…安全ね…はぁ、はぁ…」

哀は息を切らせながら呟いた。後ろを見ても、誰かがついてきている気配はしない。

しばらく休んだ後、哀は立ち上がり再び歩き出した。この時、哀は追っ手を撒いたと思って油断していた。だから背後から近づいてくる人影に気がつかなかった。

「つつ……」

哀は背後から、薬品の染みついたハンカチを口にあてられた。

「…こ、れは…クロ…ロ…ホルム……」

哀は、意識を失わないようにしたが、やがて視界がぼやけ始め、そのまま地面に倒れた。

「フツ…油断したな、シェリー…」

哀を気絶させた人物、バーボンは、哀を担いで近くに停めてあった車に乗り込んだ。そして車を走らせた。

哀が気絶させられた場所には、スーパーの袋が落ちて、中にあった野菜などが無造作に散らばっていた。

「これは、一体……」

ちよつどその道を通つた、一人の眼鏡をかけた大学生ぐらいの男が、地面に散乱したスーパーの袋を見て怪訝な表情をした。

地面にはスーパーの袋の他に、携帯電話も落ちていた。

「この携帯は確か……あの少女の……これは、彼女に何かあつたと思つてみて、まず間違いないな……」

その男：沖矢昴は、近くに目撃者がいないか聞き込みをした。もちろん、阿笠博士にも、哀が誘拐された可能性が高いということを手話で伝えた。

そして沖矢が聞き込みをしていると、有力な情報が入つた。その情報をくれた人は、黒い帽子を被り、右の頬に火傷のある男が、小学生ぐらいの茶髪の少女を抱えて、車に乗り込んだのを目撃したらしい。

その話を聞いて沖矢は、

「右の頬に火傷のある男……まさか!？」

沖矢はすぐに、犯人が誰なのかがわかつた。

「無事でいてくれ……」

沖矢は祈るようにながら、呟いた。

第二十六話・誘拐！？（後書き）

会話が少なく、読みづらかったかもしれません。それにコナンも出ないし、登場人物も少なくてスイマセン…

次回は、哀の救出に成功するのか！？

もちろん、コナンは登場させますよ

それでは、これからよろしくお願いします (^| ^) v

第二十七話・信じてるから…（前書き）

どうも。組織が絡む話を書くのは難しいですね。駄文になってしまいましたが、それでも構わない人はどうぞ。

第二十七話・信じてるから…

「それ、本当なの!？」

コナンは驚いた。それはそうだろう。あのあと、沖矢はすぐコナンに、哀が誘拐されたことを電話で伝えた。それもただの誘拐ではなく、誘拐した犯人が組織の一員の可能性が高いということを知ったからだ。

「灰原を誘拐した奴は、今どこにいるかわからないの?」

「すまない。私も直接、彼女が誘拐されたところを見たわけではないからね…」

「そっか…」

コナンは携帯電話を持ちながら、自分の不甲斐なさに腹を立てた。

(絶対守ってやるって、約束したのに…それなのに…それなのに俺は、あいつのことを守ってやることができなかった…ホント情けねえーな俺…クソッ…)

コナンは齒軋りをしながら、拳を何度も壁に叩き付けた。

コナンが頂垂れていると、電話口から沖矢の声がしてきた。

「そこで諦めたら終わりだぞ。彼女はきつと君が助けに来てくれると信じている。それなのに、君が諦めてしまっただけは、彼女の想いが

無駄になるぞ。」

沖矢は、普段とは違う口調でコナンに言った。いや、正しくは、本来の口調で喋ったと言っべきだろうか…

「そうだ…あいつは、きっと助けがくるだろうと、信じて待ってた…それなのに俺が、こんなところで諦めるわけにはいかねえ…」

コナンも、子供の口調ではなく、工藤新一の口調で話していた。

「フツ、その意気だ。」

コナンは、項垂れていた頭を上げ、力強く呟いた。その瞳には、先程まではなくなっていた、強い光が宿っていた。

(…うんっ…あれ、私は一体、どうしたのかしら…)

哀は、まだ完全に覚醒していない頭で、何があったのかを思い出そうとしていた。

(…そうだわ！たしか私、背後から誰かに薬を嗅がされて、そして…)

哀は嫌な予感がして、すぐに自分の身体を見た。

そして、哀の嫌な予感は的中した。自分の身体は、ロープで頑丈に

縛られている。もちろん、腕もロープで縛られているため、動かすことはできない。

哀は、なんとかロープをほどこうと腕を動かしたが、全くほどける気配がしない。しばらくの間、ロープをほどこうと必死になっていた哀だが、どうやってもほどけないので諦めた。

その時、哀が監禁されている部屋の扉が開いた。

「目が覚めたようだな…」

「あ、あなたは!?!」

哀は、目の前にいる男の顔を見て驚いた。その男の顔には火傷の跡があり、なによりも哀が組織にいた頃に、見た覚えのある顔だったからだ。

「あなた…ライなの?」

「残念だが俺はライじゃない。バーボン…それが俺のコードネームだ。」

哀は身震いした。組織の一員であるバーボンが、自分を拐ったという事は、自分がシェリーだということも、組織にばれてしまっているはず…

(なんとかして、ここから脱出しなきゃ…)

哀は辺りを見渡してみるが、脱出できそうな場所は、バーボンが入ってきたドアぐらいしかない。

「フッ、ここから脱出しようとしても無駄だぜ。なぜなら…お前はここで死ぬからだ。」

バーボンは拳銃を取り出して、銃口を哀に向けた。

哀は眉ひとつ動かさず、バーボンを睨み付けている。

「この状況が怖くないのか？」

「怖くないわ。きつと、助けが来てくれるわ」

(そう、きつと新一が助けに来てくれる…信じてるから…)

「残念だが、助けがくる前に貴様はここで死ぬ…」

バーボンはゆっくりと引き金を引いた。

第二十七話・信じてるから…（後書き）

中途半端なところで終わってしまったってすみません。

駄文ですが、これから応援していただけると嬉しいです。

次回もよろしくお願いします。

第二十八話・救出（前書き）

相変わらず駄文になってしまいました

第二十八話・救出

バーボンが哀を撃とうとしたとき、扉が勢いよく開く音がした。

「そこまでだ！」

扉を開けたのは、哀が信じて待っていたコナンだった。

（新一！来てくれたのね。）

哀は、コナンが助けに来てくれたことが嬉しかった。しかし同時に、銃を持っている相手に一人で挑むのは危険すぎる。そう思ったから、哀は叫んだ。

「早く逃げて！」

しかしコナンは逃げるどころか、余裕の笑みをバーボンに向けた。

「ずいぶんと余裕だな、工藤新一…それとも、逃げ切れないと観念したのか？」

「フツ、バーロオー…逃げ切れねえーのはお前の方だぜ？」

「何だと…？」

コナンの言葉とほぼ同時に、FBIの捜査官が部屋に突入してきた。

「そこまでよ！あなたは完全に包囲されているわ！銃を捨てて、お

となしくしなさい！」

ジヨディがバーボンに銃を向けながら叫んだ。

「おっと、こいつがどうなってもいいのか？」

バーボンは哀を人質に取った。

「くっ…」

ジヨディはしまったと思いながらも、銃は構えたままだ。

「私のことはいいから、こいつを捕まえて！」

「黙ってる！いいか、お前ら。シェリーを殺されなくなったら、道を開ける。」

バーボンの言葉に、ジヨディたちは道を開けた。コナンは、バーボンを睨み付けた。

「お前も一緒に来るんだ。」

バーボンはコナンに銃を向けた。銃を向けられたコナンは、怯むどころか、不敵に笑った。

そう コナンには全て計算通りだった。バーボンが哀を人質に取ることも、自分も必ず人質に取ろうとすることも…

「掛かったな…」

コナンは落ち着いた口調で呟いた。

その瞬間、コナンは腕時計型麻醉銃でバーボンを撃った。それと同時に、バーボンは床に崩れ落ちた。哀も、地面に落下したが見事にコナンが受け止めてくれた。

「大丈夫か、志保！」

先程の、バーボンと対峙していた時とは違ってかわり、コナンは焦った口調で哀に尋ねた。それほど、哀のことが心配だったのだろう…

「ええ、私は大丈夫よ。」

哀にも、コナンの気持ちが痛いほど伝わったの、優しくコナンに抱きついた。

「無事でよかった。」

コナンも哀を優しく抱き締め返した。そして安堵の息をついた。

「あのー…お取り込み中のところ、悪いんだけど…」

ジヨディは言いにくそうに、二人に声をかけた。

その声にハツとなって、コナンと哀は、すぐに体を離れた。

「な、何？ジヨディ先生？」

コナンは、恥ずかしさからなのか、少し声が裏返った。

「良い雰囲気になるのもいいんだけど、時と場所を考えてちょうだいね……」

ジヨディは苦笑いをしながら言った。その言葉に、コナンと哀は赤面した。

あの後、バーボンはジヨディたちによって連行されていった。哀も大した怪我がなかったので、今は博士の家にいる。

「それにしても、私の居場所がよくわかったわね……」

哀は、ソファに座っているコナンの肩に、頭をもたれさせながら訊いた。

「ああ、それは……」

「なんじゃと！！哀くんが誘拐されたと言うのは本当か！？」

「ああ本当だ……それも、ただの誘拐じゃなくて、奴らの仕業だ。」

「奴らって、組織のことか！？」

沖矢との電話の後、コナンは博士に哀が捕まったことを知らせた。

「ああ、間違いないと思うぜ……」

「なら、早く助けにいかんと哀くんが…」

阿笠は、あたふたしながら言った。

「わぁってるよ…俺だってそうしてえけど、志保の居場所がわからないことには、助けようがねえ…」

コナンは唇を噛み締めながら、悔しそうに呟いた。

「新一………」

阿笠は、コナンの肩に手を置いた。

「哀くんならきつと大丈夫じゃよ。」

「そうだな…」

その言葉に、コナンは少しは元気を取り戻した。

「せめて、志保が探偵団バッジを持っていてくれたら、内蔵されている発信器で居場所を特定できるってーのに…」

コナンの呟きに、阿笠は何かを思い出したのか、大きな声を出した。

「そうじゃ！その手があったたではないか！なんで、わしはこんなことに気がつかなかったんじゃ！」

その声に、コナンは顔を上げて尋ねた。

「一体どうしたんだよ、博士？」

「ああ、実はな…万が一の時に備えて、哀くんの服のボタンに発信器をつけておいたんじゃないよ。彼女には内緒でな。」

「マジかよ、それ！？もつと早くに気がついてくれよ…」

コナンは阿笠にジト目を向けた。

「いやー、すまん…」

「それで…どうやって、志保の居場所を知ることができるんだ？」

「その発信器は、わしが新しく開発したものでな…」

阿笠はコナンに説明しながら、机の引き出しを開けて、何かを取り出した。

「このメガネで、哀くんの居場所を知ることができるんじゃない。今までの追跡メガネよりも、さらに機能が上がっておるぞい。」

阿笠は、コナンにメガネを手渡した。

「哀くんを頼んだぞい…」

「ああ、任せてくれ…」

「っていうわけで、志保の居場所がわかったってわけさ。後は、ジロディ先生にもこの事を伝えて、FBI捜査官を集めてもらったんだ。」

コナンは哀の肩に手を回して、自分の胸に哀の顔を埋めさせた。

「そうだったの…それじゃあ、博士に感謝しなくちゃね。おかげで助かったんだもの…」

「おいおい…俺には感謝しねーのか？」

コナンは拗ねながら呟いた。そんなコナンの様子に、哀は微笑みながらコナンの耳元でささやいた。

「冗談よ。あなたにも、もちろん感謝してるわ。助けてくれて、ありがとう。すごく格好良かったわよ、新一。」

チュツと、哀はコナンの頬にキスをした。

「なっ／＼し、志保／＼／」

コナンの顔は、真っ赤っかだ。まさに、ゆでダコ状態。

そんなコナンの様子に、哀はクスツと笑って、コナンに呟いた。

「顔、真っ赤よ？」

「なっ／＼しやーねーだろ／」

コナンの顔はさらに赤くなった。哀はそんなコナンが可愛くて、さらにはからかった。哀は哀の方で、コナンの頬にキスをしたことに、コナンほどではないが、顔を赤らめていた。しかし、コナンはそれに気がつかなく、哀にからかわれるのであった。

(わしは一体、どうすればいいんじゃない?)

地下室から上がったってきた阿笠が見たのは、哀がコナンの頬にキスをしているところだった。その後、二人はイチヤイチャしだったので、完全に二人のところに行くタイミングを失ってしまった。

(仕方がない…地下室に戻るとしようかのう)

今、ここで二人のところへ行ったら、確実にジト目を向けられるだろう…

阿笠は、苦笑しながら地下への階段を降りていった。

「ウオツカ…大至急、マウスにAPTX4869を投与するようにと、研究員に伝える…」

「わかりやした。」

ジンは煙草に火をつけて吸いだした。その顔は何かを考え込んでいるようだった。

（俺の考えが正しければ、恐らくバーボンは何かを知っていたはずだ：奴からの連絡が途絶えたとなると、何かあったとみて間違いないだろう。）

バーボンの部屋には、何かの実験をした痕跡があり、マウスの死骸もたくさん見つかった。そして、その傍には、APTX4869があった。

「アニキ、研究員たちに伝えてきやした。けど、なんでまた、あんなことを…」

「フツ、ちょっと気になることがあるもんでな…」

先日、シェリーによく似た小学生を目撃したというのを、ジンは部下から聞いた。

（まさかな…）

ジンは不敵に笑った。

第二十八話・救出（後書き）

なんだか、バーボンがあっけなかったですね…原作では、頭の切れる人物みたいですが…

私個人としては、バーボンはどうでも良い存在なので、こんな呆気ない捕まりかたになってしまいました。

スイマセン（<|>）

次回からは、もっと頑張りますので、どうか許してください（<|>）

第二十九話・動き出した黒の気配

「アニキ…どうやら、例の実験が終わったようですね。」

「…それで、結果はどうなった？」

「APTX4869を投与したマウスは、ほとんどが死にやした…」
ウオツカは、ジンに実験結果を報告した。

「ほとんどってことは、死ななかったマウスもいるんだな？」

ジンは、ウオツカの言った『ほとんど』という言葉聞き逃さず、すかさずウオツカに質問した。

「それが、あり得ないことに…薬を投与したマウスは、ほとんどがすぐに苦しみ出して死んだんですが、一匹だけ死なずに体が縮んだそうですぜ…」

「フツ、やはりな…ウオツカ、このことをあの方に報告してこい…」

「わかりやした。」

ウオツカは部屋を出ると、『あの方』のいる部屋へと向かっていった。

「よつやく拝めそうだぜ…テメエの死に顔がな…シェリー…」

「ほら、早く起きなさい新一……」

阿笠邸の、哀の部屋のベッドで、気持ち良さそうに寝息を立てているコナン。それを哀が揺さぶって起こそうとしている。

「……んー、ん……………」

しかし、いくら揺さぶっても、コナンが起きる気配はない。

ちなみに、なぜコナンが哀のベッドで寝ているかと言うと、昨日二人一緒に寝たからである。哀の方が、コナンより早く起きたのである。目が覚めたとき、最初に哀の目に映ったのは、コナンの超ドアップ顔だった。思わず哀は赤面してしまったが、すぐに落ち着きを取り戻した。

しばらくの間、哀はコナンの寝顔を眺めていたが、そろそろ起きなくてはならない時間帯なので、コナンを起こすことにしたのだ。

「まったく……いい加減に起きなさいよ……」

哀は軽いため息をつきながら言ったが、相変わらずコナンが起きる気配はない。

ここで、哀にある考えが浮かんだ。もちろん、コナンを確実に起こせるであろう方法である。その方法とは、

「ねえ…キスしてあげるから、早く起きて新一？」

小学生とは思えないほど色っぽい声で、哀はコナンの耳元で囁いた。

その瞬間コナンは勢いよく起き上がった。

「マ、マジで？」

そんなコナンの様子に、哀は思わず笑みを溢した。

「ほら、目を瞑って…」

言われた通りに目を瞑ると、すぐに哀の柔らかい唇が、自分の唇に押し付けられるのを感じた。

「どう？目が覚めた？」

哀は、悪戯っ子のような表情でコナンに訊いてきた。

「朝から可愛すぎたぜ、志保ノ！」

もちろん、そんな哀の表情にコナンが見とれてしまったのは言うまでもない…

「それで…組織の方はどうなってるの？」

今は阿笠邸のリビングで、博士とコナンと哀の三人で話し合っている

る。

「ああ…今はジヨディ先生たちが、奴らの手掛かりを追っているみたいだぜ。」

コナンは、先程哀から受け取った珈琲を一口飲みながら言った。

「しかし、そのバーボンという組織のメンバーには君らの正体がばれてしまったんじゃない？ だったら今頃、組織全体に…」

「いや…それはないだろうぜ？」

コナンは阿笠の言葉を遮った。

「あの場所には、バーボン以外の組織のメンバーは居なかったし、それに奴らに俺たちの正体がばれてんだったら、すぐにでも俺たちの所へ来てるだろうぜ…少なくとも、今の所は大丈夫だと思うぜ？」

大丈夫だと言うわりには、コナンの表情は険しかった。

「しかしのお、そのバーボンという男は何故君たちの正体を知っておったんじゃない？」

「恐らく私の顔を見られたのよ…裏切り者のシェリーによく似たこの顔をね…」

先程から黙っていた哀が口を開いた。

「たぶん、志保を見たのはあのパーティー会場ってとこだな…」

阿笠は納得したような顔で、珈琲を一口飲んだ。

哀は黙ったまま下を向いている。そんな哀の様子に気づいたコナンは、哀の隣に腰掛け、哀を自分の方に優しく抱き寄せた。

「そんな暗い顔すんなって？心配しなくても、何かあった時は俺が絶対守ってやつからさ…」

コナンは哀を安心させるため、優しく呟いた。コナンの言葉に哀は安心したのか、顔を上げてコナンを見つめた。

「ありがとう。頼りにしてるわよ、名探偵さん…」

そのまま二人は顔を近づけたが、近くからわざとらしい咳払いが聞こえてきて、ハツとしたように思い出す。

「君たちノノいい雰囲気になるのも構わないが、わしがいることを忘れるでないノノノ」

その言葉に、コナンと哀は赤面した。

ピンポーン…

コナンたちがリビングで話していると、玄関の方からチャイムを鳴らす音がした。

「誰か来たようじゃな…」

阿笠は玄関の方へ向かった。玄関の扉を開けると、見知らぬ青年が

立っていた。

「えーと、どちらさんですか？」

阿笠は青年に尋ねたが、その青年は質問には答えずに、辺りを見渡した。

阿笠は怪訝に思いながらも、もう一度声を掛けようとしたら、奥からコナンと哀がやってきた。

「博士、誰か知ってる人でも来たのか？」

コナンは玄関の方へ歩きながら尋ねた。

「いや、別に知り合いではないんじゃない？」

青年はコナンと哀の姿を見ると、フツと笑った。そんな青年の姿に、コナンと哀は怪訝な顔をした。

「ところで、わしに何か用でもあるのかのう？」

「用があるのはあなたじゃなくて、あの二人よ……」

青年は姿に相応しくない声色で言った。

その瞬間、コナンと哀はすぐに青年の正体がわかった。

「ベルモット……」

その言葉に、阿笠も驚いた。

「どうしてオメエーが此処にいるんだ？」

「あらご挨拶ね…今日はあなたたちに悪い知らせを持ってきたのよ。」

ベルモットは、表情を変えずに二人に言った。

「悪い知らせ？」

哀はベルモットを睨み付けたまま、聞き返した。

「そんな怖い顔しないで頂戴…別にあなたたちに、危害を加えるつもりはないんだから。」

「それで、悪い知らせってなんだよ。」

「ばれたわよ、あなたたちの正体…」

「!?!」

コナンと哀は目を見開いた。

「なんじゃと!?!」

あまりにも驚いたのか、阿笠はかなり大きな声を出してしまった。

「とにかく、伝えることは伝えたわ。くれぐれも気を付けることね…近いうちに、組織はあなたたちを、抹殺しに来るだろうから…」

「ま、待て！ベルモット！！」

コナンはベルモットを追いかけようとしたが、ベルモットは既に車に乗っていた。

「グッドラック クールガイ……」

最後にそう呟いた後、ベルモットは走り去っていった。

コナンたちは、まだその場に立ち尽くしていた。

第二十九話・動き出した黒の気配（後書き）

ついにコナンたちの正体が、ばれてしまったあ！

次回は組織と対面！？

更新が遅れてしまいかもしれませんが、次回も宜しくお願ひします

m () () m

第三十話・コナンの決意（前書き）

誤字・脱字がないように心がけてはいますが、完璧とは言えません。

もしも誤字などがありましたら、指摘していただけると嬉しいです。

第三十話・コナンの決意

「しかし、これから一体どうするんじゃない？早く何とかしないと……」

阿笠は、深刻な顔をしているコナンと哀に言った。

「わあーってるよ……取り合えず、このことをジョディ先生に伝えるか……」

コナンは、ポケットから携帯電話を取り出した。

「あ、もしもしジョディ先生？僕だけど……」

「あら、コナン君。何かあったの？」

「実は、組織のことについての話なんだけど……時間取れる？」

コナンは、声のトーンを低くしながら喋った。組織絡みの話だとわかると、ジョディも真剣な口調になった。

「ええ、大丈夫よ。今は大した仕事ではないから……それで、そっちへ行けばいいのかしら？」

「うん。阿笠博士の家に来てもらえると助かるよ……」

「わかったわ。すぐに向かうから、待ってて。」

そう言って電話を切り、ジヨディは急いで車に乗り込んだ。

「お待たせ、コナン君。」

電話を切ってから、20分もしない内に、ジヨディは阿笠邸に到着した。

「それで、組織絡みの話って？」

ジヨディは、早速コナンに尋ねた。

「その事なんだけど、実は……………」

コナンは、これまでの出来事をジヨディに話した。そして悩んだが、自分達の正体も話すことにした。

組織を潰すには、FBIの協力がなければ、まず無理だろうし、それにジヨディは恐らくコナン達の正体を知っている。確信はしてないだろうが…

そう思ったからこそ、コナンはジヨディに全てを話すことにした。哀も、コナンと視線があったときに頷いた。

「…やっぱりね。予想はしてたわ。小学生にしては頭が良すぎるから、もしかしたら思ってたけど…」

ジヨディはコナンの話を聞いても、それほど驚きはしなかった。

「今まで騙してて、ごめんなさい。」

コナンはジヨディに謝った。

「気にすることはないわ。私もコナン君たちと同じ立場だったら、きっと同じことをしてただろうから……」

そう言ってジヨディは、コナンたちに軽く微笑んだ。

「ありがとう、ジヨディ先生……」

「それより……これからどうするの？彼らには、私たちの正体が既にばれてしまっていると言うのに、こっちは彼らの本拠地すらわかっていないなんて……」

哀は重苦しい表情で呟いた。

「それなら、わかるわよ。」

哀の言葉に、ジヨディが答えた。

「えっ！？どういうことなの？」

コナンは驚いた顔で、ジヨディに尋ねた。

「実はね、組織に潜入した水無怜奈から電話があったの。そして、組織のアジトの場所を教えてもらったわ。」

「よくそんな情報を教えてくれたね!？」

コナンは目を丸くしながら言った。隣にいる哀も、目を丸くしていた。

「私も最初は驚いたわ。彼女もかなり危険を犯して、電話をしきたみたいよ……」

「それで、その組織のアジトは一体どこにあるんじゃない？」

今まで黙って話を聞いていた阿笠が、ジヨデイに尋ねた。

「組織のアジトの場所は、米花町の町外れにある山の中……そこに組織の本拠地があるみたいよ。」

「案外、遠くない場所にあるのね……」

哀は、自分の想像していたのよりも、ずっと近い所に組織の本拠地があることを知って、鳥肌が立った。

まあ、遠くないといっても、ここからだと車で数時間の距離があるのだが……

「私たちFBIは、近いうちに組織に突入するつもりよ……それで、君たちはどうするの？」

ジヨデイは、コナンと哀を見て尋ねた。

「……………」

コナンは黙り込みながら、何かを考えている。しかし、そんなコナ

ンを見て、ジヨディはコナンの答えがわかった。

「…その顔は、私たちと一緒にいくつもりね。」

「うん…」

コナンは静かに、そして力強く頷いた。

「ダメよ…」

哀は消え入るような声で呟いた。

「えっ？」

「行っちゃダメよ！今度こそ、本当に死ぬかもしれないのよ！！あなたがわざわざ行かなくても、FBIの人たちがきつと組織を潰してくれるわ…だから…だから、工藤君がそんな危ないことをする必要なんてないのよ！」

哀は大声でコナンに叫んだ。そして、コナンに考え直すように説得した。

「……わりいな灰原。俺はどうしても、この手で決着を着けたいんだ…危険なのはわかってるさ。でも、いつまでも逃げてばかりいるわけには行かねえんだよ…」

「あなたの気持ちは良くわかったわ…でもね、今のあなたは小学生の姿なのよ。あなたが行ったところで、足手まといになるだけかもしれないじゃない！」

「お、おい哀君……いくらなんでも、言い過ぎじゃないか？」

さすがに今の哀の言葉に、阿笠が止めに入った。

「博士は黙ってて。」

哀の気迫に、阿笠はこれ以上口を挟まないことにした。

「確かに、足手まといになるかもしれない……だけど……それでも俺は、ジョディ先生たちと一緒に行く。俺はもう決心したんだ……必ず、この手で奴らを抑え取るってな。」

コナンは、決心した。必ず自分の手で、組織を潰すと……

「……どうして？ どうしてあなたは、いつも無茶ばかりするの……？」

目に涙を溜めながら、哀が言った。

「お願いだから、行かないで……あなたが死んだら私……」

哀はコナンに抱きつきながら、呟いた。

「灰原……」

泣きながら抱きついてくる哀を見て、コナンは知った。

今までのキツイ言葉は、必死でコナンを止めようとしていたからだ
と云うことを……

(志保……)

コナンはそんな哀を、優しく抱き締め返した。

「バーロオ…俺が死ぬわけねえーだろ？心配すんなって…オメエを残して、死んだりなんかしねえからさ…」

「…でも、もしかしたらってこともあるじゃない！」

哀は泣きじゃくりながら言った。そんな哀の様子を見てコナンは、

「悪いんだけど、博士とジョディ先生には少し外に行ってもらえないかな？」

と言った。

「わかったわ。じゃあ私たちは部屋から出ていくわね…」

そう言って、博士とジョディは部屋を出ていった。

「志保…」

コナンは哀の顔を上げさせて、そして口付けた。

「んっ？」

突然の事に、哀は驚いたが、やがて目を瞑りキスを受け入れた。

しばらくの間、二人はキスをしていた。やがてコナンが唇を離れた。

「どうだ？少しは元気が出ただろ、俺のキスで…」

コナンはニカツと笑いながら言った。

「バカ……／＼／＼／」

哀は顔を赤くしながら呟いた。

「志保……」

先程とは違い、真剣な眼差しで哀を見つめた。

「俺は、決心したんだ。必ずこの手で組織をぶっ潰すってな。今度ばかりは、俺の我儘を聞いてくれ……」

「新一……どうして、そんなにまでして、あなたは闘うの……？」

再び溢れてくる涙を、必死で堪えながら訊いた。

「それは……お前に普通の生活を、送って欲しいからだよ。組織の影に怯えることなく、学校に行つて、友達と遊んだり、買い物をしたり、本を読んだり、好きなものを食べたり、泣いたり笑ったり、と……そうやっていっぱい楽しい思い出を作つていつて欲しいんだよ。今までさんざん辛い思いをしてきたんだから、志保にはその分、たくさん幸せになつてもらいたいんだ……そして俺は、これからもずっと志保と一緒に居たいんだ。だから……そのために俺は、必ず組織をぶっ潰して見せるぜ。」

コナンの想いを聞いて、哀は再び涙を流した。コナンはしばらく、そのまま哀を抱き締めていた。

「どうだ？少しは落ち着いたか？」

「ええ……」

そっかとコナンは呟いた。

「あなたの気持ちは良くわかったわ。もう何を言っても、考えを変え
る気はないみたいね……」

「わりいな、志保……」

コナンは申し訳なさそうな顔をする。

「そんな顔しないでちょうだい……新一が決めたことなんだから、気
にすることはないわ。それに……私も決心したから。」

「決めたって、何を？」

「私もあなたと一緒に行くわ。」

「なんだって!？」

「あら、私が行ったら不満なのかしら？」

哀はコナンにジト目を向けた。

「奴らの一番の狙いはお前なんだぞ？」

「そんなの、百も承知よ。」

さらっと答える哀に、今度はコナンがジト目を向けた。

「あのなあ……」

「心配ないわよ。あなたがいるから……」

「へ？」

コナンは間の抜けた声を出した。

「守ってくれるんでしょう？私のこと。」

「え、ああ。当たり前だろ。」

「頼りにしてるわよ。名探偵さん。」

哀はコナンにウィンクをしながら言った。

「それじゃあ、博士たちの所に行ってるわね。」

「……………／／」

部屋にはコナン一人が取り残された。

(やっべーな…可愛すぎだろ、さっきの志保／／)

哀のウィンクに、コナンは顔を赤らめた。その後しばらくの間、コナンはさっきのことを思い出しては、赤面していた…

第三十話・コナンの決意（後書き）

まだ、組織と対面するまでの展開にはなりませんでした。

書いていて、結構長くなってしまい、自分でも驚きです。

次回こそは、組織の本拠地に突入！ってなるかは、今のところ不明です（笑）

次回も宜しくお願いしますm（| |）m

第三十一話・決戦前夜（前書き）

更新が遅くなってしまい、申し訳ないです（<ー>）

色々、可笑しな部分があると思いますが、どうぞご覧になってください。

第三十一話・決戦前夜

コナンと哀は、FBI捜査官たちと共に、作戦会議に参加していた。もちろんその作戦会議とは、組織との対決に関するものだ。

「それでは、みんな揃ったところで作戦会議を始めるとするかね。」

FBIのボスであるジェイムズが、みんなに言った。

その言葉に、みんな真剣な表情で軽く頷いた。

「まずは、今わかっている組織の情報を教えてくれるかね？」

ジェイムズは、ジヨデイの目を見ながら言った。ジヨデイは「わかりました」と返事をして、椅子から立ち上がった。

「今わかっている情報によると、組織の本拠地がある場所は、米花町の町外れにある山の中です。この場所は人が滅多に訪れることはなく、隠れるのにはうってつけの場所と思われるです…」

「つまり、一般人を巻き込む可能性は低いというわけだね。」

ジヨデイのすぐ近くに座っているコナンが言った。その言葉にジヨデイは軽く頷いてみせた。

「次に彼等の人数なんですが、組織に潜入している水無怜奈の情報によると、かなりの人数のようです…」

「かなりの人数と言うと、それはどのくらいなんだね？」

「少なくとも見積もっても200人程だそうです。それに加えて、組織の主要メンバーも数に入れると、もっと多くなると思われます……」

その事に、ここにいる全員の表情が驚きに変わる。少なくとも見積もっても200人はいると言うのだから、実際にはもっと多いのだろう……

「それで、FBIの方はどのくらいの人数がいるの？」

コナンの横に座っている哀が、ジョディとジェイムズを見ながら訊いた。

「私たちも、彼等と同じくらいの人数を集めるつもりだよ……」

「そう……」

哀は短く答えると、なにやら考え込む。

「次に組織内部の構造ですが、これに詳しくかかれています。」

ジョディは、組織内部の地図と思われるものを机の上に広げた。

コナンと哀は、机に身を乗り出しながら地図を見た。

組織の内部はかなり複雑な構造になっていて、とても広い。

「これは、なかなか厄介だね……」

コナンは地図を見ながら呟いた。

「そうね…これを見る限り、向こうが圧倒的に有利ね。」

コナンに続いて、今度は哀が呟いた。

「組織のボスがいる場所は、おそらくここだと思われませう。」

ジヨデイの指を指したところは、その建物の一番最深部である場所だ。

「きつと組織の主要メンバーも、その近くにいるはずですよ。」

コナンはその言葉を聞いて、ジンたちが頭に浮かんだ。哀もコナンと同じことが、頭に浮かんだのか、身体が強ばっている。

「まとまって突入すると、一気にやられてしまう可能性があるのですが、いくつかの隊に別れたほうがいいでしょう…」

ジヨデイは腕を組ながら言った。

「そうだな…私やジヨデイ君は突入部隊として、君たちは…」

ジェイムズは、コナンと哀の方を見た。

「僕たちも、ジヨデイ先生たちと一緒に行くよ。」

「それはいくら君たちでも、危険すぎるんじゃないのかね？」

「あら、私たちも少しは役に立つと思うわよ？それに、あなたたち

FBIの足手まといにはならないから…」

「しかしだね…」

ジェイムズは困った顔をする。

「いいんじゃないでしょうか？この子たちの言う通り、私たちFBIの役に立ちますし、特にコナン君には何度も協力してもらっていますしね…」

ジヨディは、ジェイムズを説得した。

「…わかった。そのかわり、絶対に無茶をしてはいかんよ？」

「うん、わかってるよ…」

「決まりね…コナン君と哀ちゃんは、私たちと一緒に行動してもらおうわ。それと、突入部隊の他に、万が一の時に待機している部隊も必要ね。」

ジヨディは、この場にいるFBI捜査官を見た。そして、何人かの捜査官を指名した。

「あなたたちは、万一の時に備えて待機していて。」

「…わかりました。」

ジヨディに指名された捜査官たちは、揃って返事をした。

「ジヨディ先生、薬のデータの事なんだけど…」

コナンはジョディの近くへ行き、周りに聞こえるか聞こえないくらいの声で言った。

「それなら任せといて。ちゃんとデータを入手できるようにするから。」

「ありがとう。」

言い終わると、コナンは哀のところへ戻っていった。

その後も作戦会議が続いた。

「それでは、この辺で会議を終了にするかね……」

「そうですね。じゃあみんな、今日はゆっくり休んで頂戴。明日はいよいよ組織との決戦の日だからね……」

その言葉にみんな頷いた。明日に全て決着が着くと思つと、みんな自然と表情が堅くなる。

コナンと哀も、お互いに表情が堅くなっている。

「いよいよ明日だな……」

「……そうね。」

お互いに不安そうな顔で呟いた。
コナンは片手を出して、哀の手と繋いだ。

「新一……」

哀はコナンの方を見た。その顔は、さっきまでとは違い、哀の大好きな、優しい表情をしている。

自然と哀も笑顔になる。

「私は大丈夫よ。あなたがいるから……」

「ああ、安心しろ。ぜってーに守ってやつからな……」

お互いに見つめ合うと、二人とも先程までの堅い表情ではなく、穏やかな顔つきだった。

二人の、お互いを想う強い気持ちさえがあれば、不安なんてものは掻き消されるのだろう……

コナンと哀は、そう思った。

その日の夜

「いよいよ明日なんじゃない……」

阿笠邸に戻ってきたコナンと哀に、阿笠は重苦しい表情で言った。

「ああ……明日で全て決着が着く。」

コナンも重苦しい表情で答えた。

「いいか、二人とも。絶対に死んではならんぞ！そして……必ず生きて帰ってくるんじゃぞ……」

阿笠は、涙が出そうになるのを必死で堪えながら二人に言った。

「ああ。必ず、生きて帰ってくるよ……」

「私も……必ず、生きて帰ってくるわ……」

コナンと哀は、それぞれ阿笠に誓った。必ず無事に帰ってくると……

「俺、ちよつくら探偵事務所に行ってくるよ。」

玄関で靴を履きながらコナンは言った。

「あら、どこかへ行くの？」

「ん？ああ、ちよつと忘れ物をしちまってな……」

「それじゃあ、私も一緒に……」

哀も靴を履こうとしたが……

「ああ、いいよ。大した忘れ物じゃねーから。すぐ戻ってくつから、心配しなくていいぞ。」

「あつ、ちよつと……」

哀が呼び止める暇もなく、コナンは出ていった。

「何なのよ、一体……」

哀は不満そうな顔をしたが、それも一瞬の事で、すぐに表情を直してリビングに戻っていった。

コナンは阿笠宅を出た後、毛利探偵事務所へは行かず、すぐ隣に建っている洋館へと入っていった。

「そろそろ来る頃だと思ったよ、ボウヤ……」

声のした方を見ると、沖矢昴が立っていた。しかし、口調は今までの昴とは少し違う。

「ボウヤ一人だけか……」

「ああ。秘密は、なるべく少ない人物だけに留めておいた方がいいからね……」

「フツ…ボウヤの言う通りだな。」

昴は椅子に腰掛けながら言った。

「それで、作戦の内容はちゃんと聞けた？」

昴の正面の椅子に腰掛けて、コナンは訊ねた。

「ああ、バツチリだったよ。」

昴はイヤホンのようなものを取り出して、指を指しながら言った。

実は、これは盗聴器になっていて、コナンの犯人追跡眼鏡から入ってくる音を聞くことができるのだ。

だから、FBIとの作戦会議の内容も、しっかりと知ることが出来るわけだ。

「なら大丈夫だね。明日は予定通りに頼むよ。」

「ああ、任せておけ…」

コナンと昴は、お互いに不敵に笑いながら言った。

「いよいよ明日か…」

あれから数時間後。ただ今の時刻は、23時を過ぎた頃だ。

コナンはベランダに出て、月を眺めていた。

「眠れないの？」

後ろから聞こえてきた声が、誰なのかは確認しなくても分かった。

「まあな。お前も眠れないのか？」

コナンは哀の顔を見て言った。

「明日の事を考えると、どうしてもね……」

哀は、コナンの隣に座った。

「……恐いか？」

「恐くないって言ったたら、嘘になるわね……」

哀は俯きながら言った。

「……お前は、ここに残っていてもいいんだぜ？」

コナンは優しいげな声で、哀に言った。その言葉に哀は顔を上げて、首を横に振った。

「私は、あなたと一緒に行くわ。あなたがいれば、私は恐くないわ。それに……」

「それに？」

「守ってくれるんでしょう？」

哀は微笑みながら、コナンに言った。

月明かりに照らされながら、コナンに微笑む哀の顔は、この地球上の誰よりも綺麗だと、コナンはそう思った。

「ああ…志保は俺が絶対に守ってやるよ。」

「新一…」

二人は自然と見つめ合い、そして顔を近づけ、唇を重ねた。少し長めのキスの後、二人は唇を離れた。

「ねえ…一緒に寝てくれない？」

上目遣いで、甘えた口調で言ってくる哀に、コナンはドキッとした。

「ああ、勿論だろ…」

二人は寝室に行き、ベッドに横になった。そして、お互いに身体を寄せ合った。

「おやすみ、志保…」

コナンは、哀を優しく抱き締めて囁いた。

「おやすみ、新一…」

哀も、コナンの背中に手を回し、その胸に顔を埋めた。

第三十一話・決戦前夜（後書き）

決戦前夜の話、ということだったんですが、中々思うように表現できないうです……

もっと詳しく作戦とかも書こうと思ったんですが、そう言うのが苦手です上手く書けませんでした（TOT）

組織編は難しいです……

更新遅くなってしまうましたが、見捨てずに読んで頂いた読者様には感謝です（^o^）

これからも、不定期更新になってしまいますが、必ず完結させますので、応援宜しくお願いしますm（）（）m

第三十二話・黒の組織との最終決戦〜突入〜（前書き）

評価・感想等お待ちしております。

また、ここはこうした方が良いなどのアドバイスがあれば、指摘して頂けると嬉しいです。

第三十二話・黒の組織との最終決戦〜突入〜

「二人共、準備は出来たかしら？」

ジヨディは、早朝に阿笠宅を訪れて、コナンと哀に訊いた。

「ああ、いつでも行けるよ。」

「私も準備OKよ。」

既に二人共準備は整っていた。

「それじゃ、行きましょう。」

ジヨディは外に出て、乗ってきた車に乗り込んだ。

コナンと哀も、外に出てジヨディの車の近くまで行った。

その後ろに阿笠が歩いてきた。コナンと哀は、足を止め後ろを振り返った。

「二人とも、必ず帰ってくるんじゃないぞ…」

「ああ、わかってるよ。」

「必ず帰ってくるわ。」

コナンと哀は笑顔で答え、そしてジヨディの車に乗った。

「それじゃあ、出発するわよ。」

ジヨディは車のエンジンを掛け、車を発進させた。

段々と遠ざかっていく車を、阿笠は祈るように見ていた。

(絶対に、無事帰ってくるんじゃないぞ……)

「この先に奴らのアジトがあるのか……」

あれから数時間が経ち、ついにコナン達は組織の本拠地に到着した。

山奥なので、人の気配はまったくくない。あるとしたら、ここに集まっているコナンや、FBI捜査官くらいだ。

「いいかね、諸君。これが、我々FBIと組織との最後の戦いにするんだ。」

ジェイムズは、真剣な顔で言った。その言葉に、この場にいる一同が頷いた。

「それでは各自、指示された場所へ移動するように。」

ジェイムズの指示で、各自それぞれの持ち場についた。

コナンと哀も、ジヨディ達の後について行く。

「いよいよね…」

哀は、高まる不安を抑えながら呟いた。

「心配すんなって。俺がついてるだろ？」

コナンは哀の手を握りしめて言った。

「そうね…あなたがいるから大丈夫よね。」

先程までの不安感は、コナンのおかげで消え去り、代わりに安堵感が哀の中に沸き上がった。

ふと、前を歩くジョーディ達が立ち止まった。そして、一点を見ている。

その視線の先には、研究所のような建造物が確認できる。おそらく、それが組織の本拠地だろう。

「あれがそうみたいね…」

ジョーディが茂みに身を潜めながら呟いた。

「見たところ、見張りはいないようだがね…」

ジェームズは、建物の周辺を見渡しながら言った。

「どうします、ボス？」

「見たところ人の気配はないようだし、ここは一気に突入するのが

いいだろう。」

ジエイムズは、コナン達の顔を見ながら言った。そして無線で、待機しているFBI捜査官に指示を出す。

その間に、ジヨディはコナンと哀にある物を渡す。

「これは……」

コナンと哀は、ジヨディから拳銃を受け取った。

「念のために、持っておいた方がいいわ。使い方は分かるかしら？」

「大丈夫よ。拳銃の腕には自信があるから……」

「僕も大丈夫だよ。でも、極力使わないようにしたいけどね……」

コナンは重苦しい表情で言った。極力使わないようにしていても、相手は暗殺のプロ集団だ。もちろん、拳銃だって所持しているだろう。そんな状況下では、阿笠博士の発明品だけじゃ、到底歯が立たないだろう。そうなると、こちらも拳銃に頼るしかないわけだ。

コナンの身体に緊張が走る。もしかしたら自分は、この戦いで人の命を奪ってしまうかもしれないという、不安が強まる。

(もしかしたら、俺はこの戦いで……)

その言葉の先を考えると恐ろしくて仕方がない。

「そろそろ突入するわよ……」

コナンが考え込んでいると、ジヨディが拳銃を構えながら呟いた。ジエイムズも同じようにしている。

「二人とも準備はいい？」

ジヨディは目線だけを合わせて、訊いてきた。

（考えてたっつてしょうがねえか……今は、目の前のことだけに集中するんだ。）

コナンは心の中で、自分に言い聞かせた。いまだに緊張が残る身体を落ち着かせるために、コナンは深呼吸をした。そして、

「準備オーケーだよ。」

と、頷きながら答えた。哀も無言で頷く。

「それじゃあ、みんな突入するわよ！」

ジヨディの合図で、一斉にアジトへ突入した。

突入してすぐに、組織の一員と思われる、数名の人物に遭遇した。

「な、何者だ!？」

「FBIよ!あなた達は、完全に包囲されてるわ!大人しく、武器を捨てて降参しなさい!」

ジヨディらは、拳銃を構えながら言った。

相手も拳銃を構えているが、所詮は少数。圧倒的にFBIの人数の方が多い。

「ク、クソッ！」

負けを認めたのか、悔しそうな表情をしながら、武器を捨てた。

すぐにジヨディ達は、彼らを取り押さえた。

その様子は、監視カメラにしっかりと映っていた。

「ちよっ、ちよっと！どうなってるんだい！？なんでFBIの連中がここにいるのさ！？」

その映像を、モニタールームで見ていたキャンティは、焦りながら言った。

「フツ…恐らく組織内の誰かがFBIと、密かに情報を交換しているんだろう。」

キャンティとは反対に、ジンは冷静に言った。

「誰かって、一体誰のことですかい？」

ウォッカの質問には答えずに、ジンはモニターに映っている人物を見ていた。

そのモニターに映っているFBI…そして、その中に混ざっている子供の姿。

「わざわざ、テメエらから出向いてきてくれるとはなあ……こちらから行く手間が省けたぜ。」

ジンは不敵に笑いながら呟いた。

「フンッ。今度こそ、必ず貴様らの息の根を止めてやるぜ……」

ジンは、懐から愛用のベレッタを取り出しながら呟いた。

その様子を部屋の隅で見ていたベルモットは、小さく笑った。

(フフフッ…面白くなりそうね、クールガイ…)

モニターに映るコナンに、ベルモットは心の中で呟いた…

第三十二話・黒の組織との最終決戦〜突入〜（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます〇 (^ - ^) 〇

相変わらずの駄文ですが、これからも応援宜しくお願いしますm)

――) m

それと、連載小説の『哀 LOVE コナン』なのですが、暫く更新が滞ってしまうと思います。

と言うのも、『コナンと哀の恋愛物語』で、組織関連の話になってから随分と時間が経っているのにも関わらず、中々終わらないからです。なので、組織編の話が一通り区切りがつくまでは、こちらに専念したいのです。

結果、『哀 LOVE コナン』の更新の方はどうしても疎かになってしまうのです。

楽しみにされていた方には、本当に申し訳ないです (< _ >)

長い後書きになってしまいました。そういうことなので、宜しく
お願い致します。

長文、失礼しました (^ _ ^ ;)

第三十三話・黒の組織との最終決戦（対面）（前書き）

もしも、誤字・脱字等がありましたら、教えてください。

それでは、駄文ですがどうぞ（＾・＾）

第三十三話・黒の組織との最終決戦〜対面〜

「静かだ…人の気配が全くないな…」

コナンは、辺りを注意深く見渡しながら言った。

あれから全くと言っていいほど、組織のメンバーが現れてくる気配がない。

「確かに静かすぎるわね…あれからかなり時間が経っているにも関わらず、まだ全然敵と遭遇してないし…」

コナンの横を歩く哀も、不審な顔をする。

「一体どうなってるのかしら…？」

ジヨディは腕をながら、首を傾げた。
そしてジヨディは無線を取り出した。

「私だけど、そっちの様子はどんな感じ？」

『はい。こちらは先程から施設内を歩き回っているのですが、一向に敵の姿が見えません…』

「あなた達もそうなの？」

『と言うと、ジヨディさん達も同じなんですか？』

「ええ、そうよ…でも、妙ね。敵が姿を見せないなんて。恐らく私たちFBIが突入していることは、奴らにはとっくに知れ渡っているだろうに…」

『確かに妙ですね…となると、奴らは我々を待ち伏せているのではないでしょうか?』

「その可能性は高いわね。まあ、もし何かあったら私に連絡してちょうだい。」

ジヨディは無線を切った。そしてコナン達の方を向いた。

「取り合えず先に進みましょう。」

ジヨディは歩き出しながら言った。コナン達も歩き出す。

しばらく歩いていると、ジヨディ達の目に大きな扉が見えてきた。

「見たところ、鍵は掛かっていないみたいだが…」

ジェームズが、扉全体を慎重に見ながら呟いた。

「…どうします?」

険しい表情で、ジヨディが答える。

「ここでじっとしていても、仕方あるまい…」

「畏かもしれないわよ。」

「かもしれんな……」

哀の言葉に、ジェイムズは重い口調で呟いた。

「望むところじゃねえか。例え毘だるうとも、びびっていたんじゃ、奴らは倒せないぜ。」

コナンは扉の前に立つ。その横にジヨデイが来る。

ジヨデイは扉のノブに手をかけ、他の三人に目で合図を送る。

三人とも無言で頷いた。そしてジヨデイは、拳銃を構えながら勢いよく扉を開け放った。

扉が開いた瞬間に、コナン達は身構える。

「FBIよ！動かないで！」

ジヨデイが銃を構えながら叫ぶが、部屋には誰もいない。

「どつやら、誰もいないみたいですね……」

銃をおろして、ジェイムズに呟く。

部屋には、色々な実験器具やらパソコンが置かれていた。

「ここは何かの研究室だったみたいだな……」

コナンは、部屋全体を物色しながら隣を歩く哀に話しかける。

「そうみたいね…」

哀は机の上の器具を見て答えた。

「それにしても、奴らが一体何処にいるのか、見当がつかないのか？」

「さあ……この施設は、私が組織にいた頃とは違う場所にあるから、見当がつかないわ…」

「そうか…」

コナンは肩を落とし、残念そうに呟いた。

「ごめんなさい…力になれなくて…」

「いや、志保が気にすることねえよ。」

コナンは優しげな口調で言った。

「どうやら、ここには何も無さそうね…」

ジョディがコナンの後ろに歩いてきた。

「来た道を引き返すとするかね。」

コナンは壁に寄り掛かりながら、小さく頷いた。

その時、コナンは足で何かを踏んだ感触がした。しゃがんで確認すると、それは何かの資料のようだった。

その資料のすぐ近くに机があることから、恐らく元々机の上に置いてあった資料が、何かの拍子に落ちたのだろう。

「……ん？」

資料を机の上に戻そうと手に取ったとき、コナンは怪訝な顔をした。

「その資料が、どうかしたのかしら？」

その様子を見ていた哀がコナンに尋ねる。

「いや、資料じゃなくてこの床……」

コナンは指を指す。

「床？」

言われて、哀はコナンの指先に視線を落とす。見てみると、そこだけ他の床とは僅かだが色が違った。

ちなみに、その床はちょうど大人の片手の平くらいの大きさだ。

コナンはそこに右手を置き、上下に動かしてみた。すると、手前に床がスライドした。

「これは、何かのスイッチみたいだな……」

コナンの言う通り、そこにはスイッチのようなものがあった。

ジヨデイとジェイムズも、コナンの近くに来てそれを確認する。

「押してみたら？」

「言われなくても押すさ。」

コナンはフツと笑い、そしてスイッチを押してみた。

ガガガガッ……

その途端、何やら部屋全体に大きな音が響き渡った。

「な、何の音!？」

ジヨデイはキョロキョロと辺りを見る。すると、部屋の中央辺りの床が動き出す。

コナン達は、その床の近くまで寄った。そして徐々に、その床の下にある隠し通路への入り口が姿を現す。

やがて、部屋全体に響きわたっていた音が止んだ。

「なるほど……さっきのスイッチは、この仕掛けを作動させるためのものだったというわけだな。」

ジェイムズが感心したように言う。

「取り合えず、進んでみようよ。」

コナンは言い終わらないうちに、地下へと続いているだろう、階段

を降りていった。ジエイムズと哀も、その後ろに続く。

地下へ降りていくにつれ、段々と暗くなってきたので、コナンは腕時計のライトをつけた。すると、コナン達の目に扉が映る。

「あれ、ジヨディ先生は？」

「私はここよ。」

後ろの方から、ジヨディの声が聞こえてきた。どうやら今階段を降りきったようだ。

「他の捜査官に連絡してたの。隠し部屋があるってことをね。それより、何か見つかった？」

「ああ、扉があるよ……」

コナンは、ライトの光を扉に向ける。

ジヨディはジエイムズを見る。ジエイムズは何も言わずに頷く。

「みんな、覚悟はいい？」

ジヨディは声のトーンを落としながら訊いた。コナン達はそれぞれ頷く。

それを確認して、ジヨディは扉を開ける。最初に入ってきたのは、電気の眩しい明かりだった。

今まで暗いところにいたコナン達は、思わず目を瞑った。段々と明

かりに慣れてきて、コナン達の目に扉の向こうの様子が映ってきた。そこには、いくつもの道が分かれており、部屋の数もたくさんあり、地上よりもさらに複雑な構造になっていた。

「まさか、地下にこんなところがあるとはね…」

哀は驚きが混じった表情で呟いた。

「恐らく奴らはここにいるんだろうな…」

「間違いないでしょうね…」

そんな会話をしていると、後ろから他のFBI捜査官達がやってきた。それもかなりの人数だ。

「どうやら揃ったようだな。」

ジェイムズは捜査官達を見て言った。

「それじゃあ、みんな行くわよ!!」

その掛け声と同時に、一斉に飛び出す。

その騒ぎに気がついた組織のメンバーが、拳銃を発砲してくる。

「志保、俺から絶対に離れるなよ!」

「ええ、わかってるわ。」

コナン達も拳銃を構える。

「どつちら、奴らは罠に嵌まったようですよ？アニキ……」

地下のモニター室で、様子を伺っていたウォツカがニヤツと笑った。

「フツ…これで奴らには逃げ場はない。」

ジヨディ達が出てきた、隠し通路は組織の一員によって、完全に塞がれた。

「それで、アタイらはどうするんだい？このままここで、見物なんてごめんだよ！」

「心配するな。俺達も奴らのところへ行く……」

「なら、アタイは先に行かせてもらうよ。久々の戦で、さっきっからアタイの血がウズウズしてしょうがないからね……」

キャンティは不気味に笑いながら言った。

「俺も、先行く。FBI、俺が撃つ……」

独特なしゃべり方をするコルン。キャンティとコルンはライフルを背負って、モニター室を出ていった。

「俺達も行くぞ……」

「了解しやした。」

キャンティ達に続いて、ジンとウォッカもモニター室を出ていった。

「それにしても、次から次へとキリがないわね！」

ジヨディは銃で、相手の手足を撃って動きを止める。

「ふう…ようやく片付いたわね。」

ジヨディは一息ついた。取り合えず、近くには敵はいない状態になった。

「安心するのは早いよ。いつ、また敵が現れるかわからないからね…」

コナンは周囲を警戒しながら言った。そしてコナンは辺りを慎重に歩く。

「FBI、見つけた…」

コロンは、ジヨディにライフルを構えながら言った。

「なかなか、いい女…」

キャンティもライフルを構え、狙いをジェイムズに定める。

「あんたはあの女を撃ちな。アタイはその隣のジジイを撃ち抜くから…」

ちなみにコナンと哀は、スナイパーの死角にいるから気がつかれていない。

そしてレーザーポイントを、ジョディとジェイムズの後頭部に合わせる。

「ん…あれは!?!」

コナンは、ジョディ達に向けられているレーザーポイントを見て戦慄する。

哀も同じような表情をする。

「 「危ない!!!」 「 「

コナンと哀は、同時に叫んだ。

その瞬間、ライフルの引き金が引かれ、銃声が響き渡った…

「にしても、ほんまあんたの正体には驚いたで。」

「私も君には驚いたよ。彼の知り合いで、しかも組織のことを知っているとはね…。」

山奥を走る車の中には、二人の人物が乗っていた。

「久々にあいつと会おうと思って東京へ来たら、あいつは組織に乗り込んだって聞くしなあ…ほんま驚いたで。」

「…彼からは何も聞いていないのか？」

「なんも聞いてへんで！知ってたんやったら、もっと早くに東京へ来たったのに。あいつ、この俺になんの相談もせんと、勝手な真似しおって…後でシバイたるわ。」

「…もうすぐ、目的地だ。飛ばすから、しっかり掴まっている！」

「おわっ…！」

車のスピードが上がったので、その人物は舌を嚙まないように喋るのを止める。そして、助手席で祈るように目を閉じた。

（絶対に死ぬんやないぞ！工藤…）

「 「 危ない!!!! 」 「 」

「 えっ? 」

コナンと哀の叫びを聞いて、ジョディとジェイムズは、自分達が狙われていることに気がつく。

そしてすぐに身を隠そうとした。

「 …!?!? 」

ジョディは、間一髪で頬を弾が掠めただけだったが、ジェイムズの方は少し遅かったらしく、弾が肩を貫通した。

ジェイムズは、その場に膝をついた。

「 ボス! しっかりしてください!! 」

ジョディは、すぐにジェイムズに駆け寄り、スナイパーの死角へと移動させた。

「 心配いらんよ。肩を撃たれたただけだから… 」

ジェイムズは顔をしかめながら言った。

「 すぐに応急手当をします! 」

「 チッ…あと少しだったってのに。 」

キャンティは舌打ちをする。

「奴ら、俺たちの死角に移動した…」

キャンティとは違い、コルンは相変わらず表情を変えずに呟いた。

「二人とも、大丈夫!？」

コナンと哀は、ジョディ達の近くに来た。

「私は大丈夫よ。でも…」

ジョディは、ジェイムズを見る。

「なあに。私も大したことはない…」

言葉とは反対に、かなり出血しているので苦しそうだった。

コナンは、スナイパーのいるであろう場所をこっそりと見てみた。

「いないな…」

既にキャンティ達は移動した後だった。

「いつまでも、ここに隠れていられそうにないわね…」

哀は辺りを見た。見たところ、まだスナイパーがやってくる気配はない。

「取り合えず、あそこへ移動しよう。」

コナンは、すぐ近くにある扉を指差した。

「ボス、歩けますか？」

「ああ…問題はない。」

「急ごう。もたもたしていると、奴らが来るよ。」

コナン達は、扉の所まで走った。そして、扉を開けて、その向こうに駆け込む。

「取りあえずは安心ね…」

コナンと哀は一息つく。そして、扉をそっと開き、さっきまで隠れていた場所を確認する。

「奴ら、どこに行ったんだい！」

「わからない…でも、まだ近くにいる。」

そこには、キャンティとコルンの姿があった。

「やっぱり、狙撃したのは奴らだったか…」

「危ないところだったわね…」

コナンと哀は、身を縮めながら呟いた。

「他の捜査官達は、大丈夫かしら……」

ジョディは、不安げな顔をする。

「……彼らならきつと大丈夫だろう。」

ジェイムズは、撃たれた右肩を押さえながら言った。

「フツ……そいつはどうかかな？」

「っ!？」

突然聞こえてきた声に、コナン達は身構えた。そして、その声の主が誰なのかはすぐにわかった。

「ジン！」

コナンは、思わず叫んだ。そして、哀を庇うようにして立った。

「久しぶりだな……小僧」

「……」

コナンは黙ったままだ。いや、正確には声が出せないでいた。

「フツ……恐怖で声も出せねえってか？工藤新一……」

ジンは不敵に笑いながら言った。

「クッ……」

コナンは唇を噛み締める。哀は、コナンの後ろで震えていた。

「テメエの後ろに隠れているのは、シェリーか…」

ジンは、コナンの後ろに隠れているシェリーを睨み付ける。

「会いたかったぜ、シェリー…」

ジンは、哀を見て不気味に言った。

「動かないで！」

ジヨディは、ジンに拳銃を向ける。

「ちよつとでも動いたら撃つわよ…」

ちなみにジンは拳銃を構えていない。

「すぐに他のFBI達が来るわ！大人しく武器を捨てて降参しなさい！」

しかしジンは余裕の表情だ。

「残念だが、他のFBIは既に始末した。」

「なんですって!?!」

ジヨディは、驚きの声を上げた。コナン達も、目を見張った。

あまりにも衝撃なことを言われたせいも、コナン達は背後から近づいてくる人物に気がつかなかった。

「ハッ!？」

コナン達はようやく気配に気づき、後ろを振り返った。

「おっと、動くなよ。」

ウォツカが、ジヨデイの後頭部に銃を突きつける。その隣では、コロンがジェイムズに銃を向けている。

「ジヨデイ先生!？」

コナンは、二人に駆け寄り寄ろうとした。

「動くんじゃないよ!」

キャンティが、コナンに銃を向けた。

「もちろん、お前もだよ……」

キャンティは、哀に冷たく言った。

「クソッ!」

コナンは唇を噛んだ。拳銃を突き付けられているのでは、手の出しようがない。

「フンッ……どうやら、「こ」までのようだな。」

ジンは、懐からベレッタを取り出す。そして、コナン達に向ける。

その凍てつくようなジンの視線に、哀は身を縮める。

「シェリー…お前は、最後に始末してやるよ。よく見ておくんだな…お前に関わった人間が死んでいく様を。」

「やめろっ!」

コナンは叫んだが、それでやめるような奴らではない。

「フツ…これで終わりだ。」

ジンは、ジョディに銃を向けた。

「クツ……」

ジョディは、目を瞑った。

ジンは引き金を引き、そして…

ドーンッ……

一発の銃声が響いた。

第三十三話・黒の組織との最終決戦（対面）（後書き）

長くなったので、一旦切ります。

まあ、この後の展開は大体分かりますと思いますが…（＾|＾・こ）

次回も、なるべく早く更新できるといいなあと思います。

今後とも、宜しくお願いします（＾O＾）

第三十四話・黒の組織との最終決戦（決着）（前書き）

久しぶりの更新でスミマセン（<ー>）

誤字・脱字等がありましたら指摘してください。

第三十四話・黒の組織との最終決戦〜決着〜

コナン達は悲痛な顔をした。誰もが、ジヨデイが撃たれたと思ったからだ。しかし、聞こえてきたのはジンの呻き声だった。

「…………クツ…………」

見てみると、ジンは左手を押さえていた。

「ア、アニキツ！大丈夫ですかい？」

ウォツカは、ジンに駆け寄った。

「一体、どうなってるんだい！」

「わからない……」

キャンティは突然のことに驚き、声を張り上げた。

コロンも、いつもと変わらない口調ではあるが、焦っている。

ジヨデイとジェイムズは顔を合わせる。

『『今なら押さえられる！』』

ジヨデイとジェイムズは、ほぼ同時に立ち上がり、そしてキャンティとコロンに突進した。

不意を突かれ、キャンティとコルンはそのまま勢いよく突き飛ばされ、そして壁に激突した。

二人ともそのまま気を失った。

「形勢逆転ね……」

ジヨディは銃を構えて言った。

「クソッ……」

ウォッカも銃を構える。しかし、その顔を焦っている。それもそうだろう。ジンは左手を負傷していて、キャンティとコルンは気絶している。圧倒的にこちらが不利だ。

「観念することだな……」

ジェイムズは、ジン達に言った。

しかし、ジンはジェイムズの方は見てはいなかった。

「……何者だ……」

「ア、アニキ……」

ウォッカは、ジンが見ている方向に目を向けた。そこには、人影のようなものがあった。

ジヨディ達も、その人影の方を見る。そして、その人影は段々とこちらに近づいてきた。

「どつやら、ギリギリ間に合ったようだな……」

その人影……沖矢昴は、不敵に笑いながら登場した。

「どうして彼がここにいるの!？」

哀は沖矢昴を見て呟いた。

「誰だ、テメエ!」

ウオツカは沖矢昴を見て、叫んだ。

「フツ……私のことを忘れたのか?」

突然、声色が変わった。

「あ、あなた一体……」

ジヨディは、沖矢昴のことを戸惑いながら見ていた。ジェイムズと哀も、ジヨディと同じように見ていた。

コナンだけは、沖矢昴を見て、不敵に笑っていた。

「……フツ……やはり生きていたか。」

ジンは、沖矢昴を見て口元を緩めた。

沖矢昴は、顔に手をあてて、そして顔を引っ張った。その瞬間、コナンとジン以外は声を上げた。

「あ、赤井秀一!?!」

「シュウツ!」

「赤井君!?!」

みんな赤井秀一を見て、驚いている。哀も目を見開いている。

「どういつことなの、シュウ!?!あなたは死んだはずじゃ…!」

「説明してくれんかね!?!」

ジョディとジェイムズは、死んだと思っていた赤井秀一が生きていたことに、とてもびっくりしている。

そして、どうやって生き延びたか知りたかった。

「理由は後程…!?!今は、目の前にいる狼どもの相手をしなければなりませんからね。」

「フツ、やってくれるじゃねえか…!」

ジンはウオツカから、拳銃を奪い取るように取った。

「ウオツカ…!?!お前は手を出すんじゃない。赤井は、俺が殺る…!」

「わ、わかりやした…!」

ジンの気迫に、ウオツカは小さく頷いた。

「動かないで！」

ジヨディは、すかさずジンに銃口を向ける。

「ジヨディ、お前は下がっている。」

赤井はジヨディに言った。

「でも、シユウ……」

「これは、俺と奴の一对一の勝負だ……」

「……わかったわ。」

ジヨディは銃を下ろした。そして心配そうな顔で赤井を見る。

「心配するな。すぐにケリをつける……」

「たいした自信じゃねーか……」

お互い、銃を構えて不敵に笑って見せた。ジンは左手を負傷しているので、右手で銃を持っている。

それを見て、赤井はジンを挑発する。

「利き腕を負傷しているお前が、俺に勝てるかな？」

「フツ……利き腕が使えなくなったら、お前を殺るのに差し支えたりはしねえよ。」

両者ともに、睨み合ったまま動かない。ちょっとした隙を見せた方が、勝負に負けるからだ。

ジンはふと、構えていた拳銃を下ろした。

「貴様にハンデをくれてやる……いつでもかかって来い。」

ジンは余裕の表情で言った。

「随分と余裕だな……お前の方が圧倒的に不利な状況だというのに……」

「フツ……不利かどうか、試してみるか？」

ジンは、挑発的な態度で赤井に言い放った。

赤井もジンに向けていた拳銃を下ろした。

「フツ……おもしれーじゃねーか」

互いに睨み合いながら、いつでも銃を構えられるような体勢をしている。

コナン達は、その様子を心配そうに見ている。

(赤井さん……信じてるぜ……)

コナンは心の中で祈った。

その刹那、静寂を破るかのように銃声が響いた。

「っ…!？」

二人が放った銃弾は、互いに持っている拳銃に当たり、その衝撃で持っていた拳銃が弾き飛ばされた。

ガシャガシャという音を立てて、互いの拳銃は床に落ちた。

コナンと哀は、手を握り合いながらその様子を見守っている。ジョディとジェイムズも、心配そうに赤井を見ている。

赤井はすぐに体勢を立て直し、予備の拳銃を構える。ジンも同じように、隠し持っていた拳銃を構える。

パァンッ…

ほぼ同時に、銃声が響き渡る。その音に続いて、二人の呻き声が聞こえてきた。

今度は、お互いの肩を弾が貫通した。そして、撃たれたところから鮮血が溢れる。

ジンは表情を全く変えずに、撃たれたことをものともせず、すぐに赤井に狙いを定める。

赤井も表情を変えずに、少し遅れて銃を構えた。しかし、撃たれたところの痛みは抑えられず、腕が震えている。

その様子に、コナンは思わず赤井の名前を叫んだ。

「赤井さんっ！」

ほぼ同時に、三回目の銃声が響いた。

「つぐあ…！」

互いに呻き声を上げて、赤井とジンは倒れた。

「シュウ！しっかりして！」

「赤井君…！」

「赤井さんっ…！」

「しっかりしなさいっ…！！！」

コナン達はすぐに、赤井の元へ駆け寄った。

ウォッカもジンの元へ駆け寄った。

「アニキ！しっかりしてくださいっ…！」

赤井とジンが放った弾は、両者の体に当たっていた。

「シュウ！大丈夫！？」

「あ…ああ。心配ない…」

「どつやら急所は外れているようだな…赤井君、すぐに手当てを…」

ジエイムズはすぐに応急処置を行った。その間にジヨディは、ジンとウオツカのところへ行く。

「これであなた達も終わりね……」

ジヨディは銃を構えながら、言い放った。

「クソ……っ!?!?」

ウオツカは拳銃を構えようとしたが遅く、ジヨディの撃った弾によって弾き飛ばされてしまった。

「無駄な抵抗は止めて、おとなしくすることね。次は頭を狙うわよ。」

その口調から、威嚇ではないということ悟ったのか、ウオツカは動きを止めた。

「後は、こいつらのボスだけだな……」

コナンは、赤井の様子を気にしながら呟いた。今の赤井の状態では、とてもではないが戦えそうにない。それはコナン達にとって、大きな戦力を失ったことになる。最も、組織の方もジンが倒れて大幅に戦力を失ったのだが……

どちらにしても、この凶悪な犯罪組織を束ねる人物だ。一筋縄では行かないだろう。

(…果たして、俺達だけで勝てるのか…?)

コナンが考え込んでいると、右手に哀の手が重なった。

「大丈夫よ。私達なら絶対に勝てるわ。それに…工藤君の辞書に不可能の文字はないんでしょ？」

哀はそう言っつてコナンに微笑みかける。その笑顔は、今までコナンにあった不安の気持ちを消し去った。

「そうだったな…俺達なら絶対に勝てるよな。」

そう呟くコナンの瞳には、不安の色はなかった。

「ジヨディ先生、俺達は奴らのボスのところへ行くよ。」

「ジヨディ先生は、赤井さんのことを見ている。」

「それは危険すぎるわ…っついても、その顔は止めても行くつもりね。」

ジヨディはコナンと哀を見て言った。

「わかったわ。私はここでシユウや彼らを見ているから、ジエイムズも連れて三人で行ってちょうだい。くれぐれも無茶はしないでね

…」

「ああ、わかってるよ。」

「それじゃ、行きましょう。彼らのボスの場所は、私が案内するわ。恐らく、場所は変わってないだろうから…」

そう言つて、哀は歩き出した。その後ろにコナンとジェイムズが続く。

「ジョディ君、君も気を付けるんだぞ。」

「わかつてるわよ。みんなも、気を付けるのよ…」

その言葉にコナン達は頷き、そして再び歩き出そうとしたとき…

一発の銃声が響いた。それと同時に、コナン達の歩いていた、すぐ前の地面に弾が当たった。

「おっと、何処へ行くつもりだい？」

先程まで気を失っていたキャンティが、拳銃を構えて立っていた。

「チツ、意識を取り戻しやがったか！」

コナンが舌打ちをすると同時に、身構える。

「随分と、好き勝手やってくれたみたいじゃないかい。」

キャンティは倒れているジント、ジョディによって拘束されたウオツカを見て、額に血管が浮き上がる。

「アタイを怒らせたことを、後悔するんだねえ！」

どうやら、かなり頭に血がのぼっているようだ。

「此処は我々に任せて、コナン君達は行きたまえ…」

ジェームズは銃を取り出し、キャンティに向ける。

「何、こそこそ喋ってるんだい？ガキもまとめて、みんな殺ってやるよ！」

「さあ、早く行くんだ！」

ジェームズは、コナンと哀に叫ぶ。

「わかった…でも、絶対に死なないでね。」

コナンと哀は、走り出した。もちろんキャンティが、それを見逃す筈がない。

「おっと、逃がさないよ！」

銃をコナン達に向けようとしたとき、キャンティの持っていた銃は、ジェームズによって弾き飛ばされてしまった。

「…ちっ！」

キャンティが怯んだ隙に、コナンと哀はこの場から遠ざかっていった。

「殺す！殺す！！絶対殺す！！！」

キャンティは獣のように叫んだ。そして、ジェームズとジョディを睨み付ける。

ジエイムズ達は、そんな彼女に怯むことはなく、眉一つ動かさずにいた。そんなキャンティの声に反応したのか、続いてコルンも意識を取り戻した。

「ちょうどよかった…コルン、アンタもアタイに手を貸しな！あそこにいるFBIの連中を始末するよ…」

「わかった…」

コルンも拳銃を取り出して構える。ジヨディ達も身構える。

そして、激しい銃撃戦が始まる。その頃、組織のボスがいるであろう最深部へ、コナンと哀は向かっている。

組織の殆どは既に壊滅しているためか、コナンと哀の走る音以外には、何も聞こえない。そんな中、先程までコナン達がいた場所から銃声が響き渡ってくる。

「…ジヨディ先生達、大丈夫かしら…」

哀は心配そうに呟く。

「ジヨディ先生達ならきつと無事さ…今は二人を信じるしかないさ。」

「…そうね」

それから暫くの間、無言で走り続ける。ふと、哀が立ち止まったので、コナンも足を止める。

「ん？どうした？」

コナンの問いに、哀の表情は険しくなる。

「…この先を真っ直ぐ進んだところが、彼らのボスの部屋よ…」

普段と変わらない口調ではあるが、その声は微かに震えている。

「いよいよってわけか…」

低いトーンで呟き、心配そうに哀の表情を伺う。

コナンの視線に気づき、何が言いたいのかわかった哀は、微笑みを向ける。

「私は大丈夫よ…最後まであなたについて行くわ。私達は運命共同体なんですよ？」

「ああ、そうだな…何があっても、お前は俺が守ってやつからよ。」

コナンも哀に笑顔を見せる。そして、すぐに二人とも真剣な表情に戻る。

「…それじゃあ、行くぞ志保。準備はいいか？」

「ええ。いつでもいいわよ、新一…」

そしてコナンと哀は、組織のボスがいる部屋に向かって歩き出す。

(…ついに、この時が来たんだな……必ず決着をつける！)

コナンは心の中で、強く呟いた…

第三十四話・黒の組織との最終決戦（後書き）

まずは、この小説の更新を待っていた方々、遅くなってしまう本当にすみません（<|>）

ここ数カ月、平日は勿論のこと、土日も休むことが殆ど出来ない状況でして、更新が滞ってしまい、本当に申し訳ないです…

これから先も、更新が滞ってしまう可能性が十分にありますが、ご理解の方お願い致しますm（| |）m

何か、矛盾点等があったり可笑しなところがあるかもしれませんが、多目に見てください（^| ^ ;）

こんな作者ですが、最後まで見捨てずに小説を読んでいただけたら、嬉しいです。必ず完結させるつもりです。

それでは次回も宜しくお願いします（| |）

長文、失礼しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7094k/>

コナンと哀の恋愛物語

2010年12月9日18時02分発行